

ISSN 1347-5495

経営研究

Business Research

No. 55

中野 常男（神戸大学大学院経営学研究科教授）

橋本 武久（帝塚山大学経営情報学部教授）

清水 泰洋（神戸大学大学院経営学研究科准教授）

桑原 正行（香川大学大学院地域マネジメント研究科准教授）

わが国における会計史研究の軌跡—『會計』に

見る会計史文献の史的分析：1917～2008 年 —

2009 年 7 月 8 日

神戸大学大学院経営学研究科

わが国における会計史研究の軌跡

—『會計』に見る会計史文献の史的分析：1917～2008年—

中野 常男

橋本 武久

清水 泰洋

桑原 正行

本稿の目的は、明治期以降から今日に至るまでのわが国における会計史研究の歩みを概観するとともに、その研究上の特徴を明らかにすることにある。具体的には、わが国における会計学関係の学術誌の中でもっとも長い歴史を有する『會計』を対象として取り上げ、同誌が創刊された1917(大正6)年から2008(平成20)年に至るまでの期間にそこに掲載された各種の論稿から、会計史に関わる研究論文等(合計817編)を抽出し、それぞれの論稿における考究内容を複合的な分類基準を用いて体系的に整理・分析することにより、今日に至るまでのわが国における会計史研究の展開と、そこに見出される研究上の特徴を考察することにある。

キーワード：会計史，会計史学史，会計学，文献目録

I 開 題

会計史学の端緒は、複式簿記を解説した世界最初の印刷教本とされる Luca Pacioli (1445～1517)⁽¹⁾ の「簿記論」(1494)⁽²⁾，特に19世紀におけるその現代語への翻訳過程から形成されたといわれる。また、それは、Paciolo を問題とすることからはじまり、簿記文献史的展開を伴うことが持って生まれた性格のようでもあったと指摘される⁽³⁾。現実には、会計の歴史を著書の形で本格的に取り上げた最初期の文献の一つである Benjamin F. Foster (1803～1859) の *The Origin and Progress of Book-keeping* (1852) も、研究書というよりは、書誌学的色彩の強いものであった⁽⁴⁾。その後、陸続というほどではないにしても、会計史に関する研究文献は継続して公表され、研究成果の蓄積も進んでいる。同時に、会計史に関する研究成果の整理、および、これに基づく文献目録(bibliography)ないしリサーチ・ディレクトリ(research directory)の作成も、1960年代末から1980年代後半を通じての Robert

H. Parker の一連の業績に見るように、逐次行われつつある⁽⁵⁾。

他方、わが国では、たとえば、専門的著書としては海野力太郎の『簿記學起原考』(1886(明治19)年)⁽⁶⁾を嚆矢として、明治初期に複式簿記が欧米から「洋式簿記」として導入された比較的早い時期から、複式簿記の起源やその沿革を論じた会計史に関わる文献が出現している。しかしながら、会計史研究の成果に関する整理や文献目録の作成は、今日に至るまでほとんど手つかずといってよい状況にある⁽⁷⁾。

筆者たちは、このような状況をふまえて、これまでわが国で公表された会計史に関わる研究論文等について、一定の分類基準にしたがってデータベース化を図り、文献目録(ないしリサーチ・ディレクトリ)を作成する試みを展開してきた。その目的は、著者たちの他の論稿(中野・橋本[1999])における言を繰り返すならば、「(会計史に関する)研究成果のデータベース化とこれに基づくリサーチ・ディレクトリの作成は、わが国における会計史研究の基盤整備につながり、これを通じて、たとえば、明治期以降に蓄積されてきた先人たちの会計史研究がもつばらどの部分に焦点を定めてきたのか、何が不十分であったのかといった問題を体系的に把握することが可能となり、かかる現状分析から、将来の発展課題に対する一定の示唆もまた導き出すことができるものと考えられる」⁽⁸⁾ということである。

このような問題意識のもとで、まず中野・橋本[1999]では、「日本會計學會」(1917(大正6)年創設)の機関誌に位置づけられ、その後も当該学会を母体として1937(昭和12)年に設立され現在に至る「日本会計研究学会」の実質的機関誌として長らく位置づけられてきた『會計』を分析の対象として取り上げている。そして、『會計』の創刊号が公刊された1917年から、第二次世界大戦下に一時休刊を余儀なくされた1944(昭和19)年までの期間に対象を限定し、「大正～昭和戦前・戦中期」に同誌に掲載された論稿のうち、会計史に関わるものとして抽出した研究論文等(計157編)で個々記述されている考究内容について、(1)研究領域別基準、(2)地域別基準、および、(3)時代別基準という三つの個別的分類基準を組み合わせた複合的な分類基準にしたがって整理し、その試行的分析を試みている。

また、「わが国における会計史研究の発展に関する実証研究」(平成14～15年度科学研究費補助金・基盤研究(C)・研究代表者：中野常男、研究分担者：桑原正行・清水泰洋・橋本武久；以下、中野他[2004]と略す)では、上記の論稿における試行的分析をふまえて、これと基本的に同一のアプローチに基づき、『會計』が第二次世界大戦の敗戦後に復刊される1949(昭和24)年から1988(昭和63)年までの「昭和戦後期」に同誌に掲載された会計史関係の研究論文等(計452編)を抽出し、個々の論稿における考究内容について、先の中野・橋本[1999]で明らかにした「大正～昭和戦前・戦中期」のものと併せて総合的な分析を行っている。

このような試みはその後も継続され、中野他[2005]では、上述した二つの先行研究を継

承する形で、1989(平成元)年から2004(平成16)年までの期間に『會計』に公表された会計史に関わる研究論文等に対象を拡大し、従来のものと同一のアプローチに拠りながら分析を行い、その結果を既出の二つの論稿(中野・橋本[1999];中野他[2004])のそれと総合することにより、1917年から2004年に至るまでの期間に『會計』に公表された会計史関係の研究論文等(合計784編)を対象とした分析の結果を明らかにしている。

さらに、中野他[2006]では、中野他[2005]においては紙幅の関係から十分な分析を行えなかった点を考慮し、これを補完する意味から、先の論稿中の「文献目録」に整理・集約された基礎データに基づく詳細な分析の結果を提示している。また、中野他[2008]では、対象とする期間を2008(平成20)年(ただし、3月まで)までにさらに拡大し、1917年から2008年(3月)に至るまでの期間に『會計』に発表された会計史に関わる研究論文等(計809編)を取り上げるとともに、「①1917年の創刊から第二次世界大戦下の1944年の休刊に至るまでの期間を「萌芽期」、②敗戦後の1949年の復刊から1970年までの期間を「離陸期」、そして、③1971年から2008年3月までの期間を「確立期」に区分し、それぞれの期間に見出されるわが国の会計史研究の展開とそこに見出される特徴を分析する」⁽⁹⁾として、対象とする期間を大きく三つの時代に区分して考察を加えている。

なお、上掲の論稿(中野他[2008])において、「萌芽期」(1917~1944年)とは、会計史研究がもっぱら研究者個々の関心事にとどまっていた時代をいう。また、「離陸期」と「確立期」については、1968年に会計史委員会(Committee on Accounting History)がアメリカ会計学会(American Accounting Association)に設置され、1970年に当該委員会の報告書が公表されたこと⁽¹⁰⁾、同年にブラッセルで第一回の会計史世界会議(World Congress of Accounting Historians)が開催されたこと、あるいは、1973年にアメリカ会計史学会(Academy of Accounting Historians)が設立されるとともに、その機関誌(*The Accounting Historians Journal*;ただし、1974年から1976年(Vol.I~III)までは*The Accounting Hitorians*と呼称)が定期的に刊行され始めるなど、会計史への関心が世界的に高まってくる1970年前後の「事象」に着目し、これらの事象をメルクマールとして区画している。すなわち、上掲の論稿では、具体的には1970年を境として、1970年以前の期間を会計史研究が会計学における一つの学問分野、つまり、会計史学として形成(認知)される「離陸期」(1949~1970年)、それ以後の期間を会計史研究が体系的な学問分野として確立される「確立期」(1971~2008年)という二つの時代に区画することにより、先の「萌芽期」と合わせて計三つの時代に区分して分析を行っているのである。

本稿は、「会計史リサーチ・データベースの作成とその利用」(平成19~20年度科学研究費補助金・基盤研究(C)・研究代表者:中野常男,研究分担者:清水泰洋・桑原正行・橋本武久)に基づき、これまでに掲げた五つの論稿(中野・橋本[1999];中野他[2004];中野他[2005];中野他[2006];中野他[2008])における研究成果を継承し、さらにこれを拡大・発展させたものと位置づけられる。

すなわち、筆者たちにより企図された先行研究を継承しつつ、対象となる期間を 2008 年 12 月までに拡張、1917 年から 2008 年に至るまでの期間中に『會計』に掲載された会計史に関わる研究論文等（合計 817 編：ただし、過去の研究においてその分析対象から漏れていた論稿の追加修正分を含む）の考究内容について、従来と同一のアプローチに拠りながら総合的に整理・分析を行うことにより、1917 年から 2008 年に及ぶ約 90 年間のわが国の会計史研究の歴史を総括的に概観するとともに、その研究上の特徴を明らかにすることを目的としている。

Ⅱ 基礎データと分類基準

本稿において展開される分析の基礎データは、次の第Ⅲ節に掲記される「文献目録」に含まれている。当該「文献目録」では、1917 年から 2008 年までに『會計』に掲載された研究論文等の中から会計史に関わるものとして抽出された合計 817 編の論稿について、「番号」、「論文等の標題」、「執筆者」、「巻号（年月）」、「考究内容の要旨」、「分類」の各欄において、それぞれの研究論文等を識別するための整理番号、研究論文等の標題、執筆者の名前、それらが『會計』に掲載された巻・号（年・月）、当該研究論文等で考究されている内容の要旨、そして、研究領域別・地域別・時代別という三つの個別分類基準を組み合わせた複合的基準に拠る分類（分析）の結果が示されている。

このうち、個別分類基準とは、会計史に関わるものとして抽出された研究論文等が、考察対象として、(1) 会計学を構成する主要領域のうち、どの研究領域の歴史を取り上げているかという「研究領域別分類基準」、(2) どの地域の会計の歴史を取り上げているかという「地域別分類基準」、および、(3) どの時代の会計の歴史を取り上げているかという「時代別分類基準」、つまり、それぞれの研究論文等が考究対象とするものの中から研究領域・地域・時代という三つの属性に着目した個別分類基準をいう。そして、検討の対象とされる論稿は、これら三つの個別分類基準を組み合わせた複合分類基準に基づき、それぞれの考究内容が整理・分析される。

ここで、分類の基礎となる (1) ～ (3) の個別分類基準の詳細を示せば、以下のとおりである。

(1) 研究領域別分類基準（考究対象とする研究領域に基づく分類基準）⁽¹¹⁾

- I 総 説（会計通史、会計史研究の方法論など）
- II 基礎理論
- III 簿 記
- IV 財務会計

- V 原価計算
- VI 管理会計（経営分析，財務諸表分析を含む）
- VII 監 査
- VIII 国際会計
- IX 税務会計
- X 公会計・非営利組織会計
- X I 情報会計（コンピュータ会計，機械化会計を含む）
- X II 会計教育
- X III 会計専門職業
- X IV 会計関連法規等（商法/会社法，証券取引法/金融商品取引法，税法，会計原則/会計基準など）
- X V 伝記・人物評等（訃報を含む）
- X VI 書評・資料・翻訳その他

(2) 地域別分類基準（考究対象とする地域別に基づく分類基準）

- A 日 本
- B 中 国（台湾，香港を含む）
- C 韓国・朝鮮
- D 東南アジア
- E 南アジア（インド，パキスタンなど）
- F 中近東・アラブ
- G イタリア
- H フランス
- I ネーデルラント（オランダ，ベルギー）
- J イギリス（アイルランドを含む）
- K ドイツ（オーストリア，スイスを含む）
- L 南ヨーロッパ（スペイン，ポルトガル，ギリシャなど）
- M 東ヨーロッパ・ロシア
- N 北ヨーロッパ（スウェーデン，ノルウェー等）
- O オセアニア（オーストラリア，ニュージーランド，その他太平洋地域）
- P アメリカ合衆国
- Q カ ナ ダ
- R ラテン・アメリカ（メキシコ，ブラジル，その他中南米地域）
- S その他（特定の地域に考究対象を限定していないもの）

(3) 時代別分類基準（考究対象とする時代別に基づく分類基準）⁽¹²⁾

- 0 古代～現代（通史もしくは時代を特定できないもの）
- 1 古 代（～5世紀；ゲルマン民族の大移動まで）
- 2 古代～中世
- 3 古代～近代
- 4 中 世（～15世紀半ば；東ローマ帝国の滅亡まで）
- 5 中世～近代
- 6 中世～現代
- 7 近 代（～第一次世界大戦終結まで）
- 8 近代～現代
- 9 現 代

したがって、「文献目録」の「分類」欄では、会計史に関わるものとして抽出された研究論文等（合計817編）が、個々にそこで記述されている考究内容に即して、まず、(1) 会計学を構成する主要領域のうち、どの研究領域の歴史を取り上げているかという「研究領域別分類基準」にしたがって、「Ⅰ 総説」，「Ⅲ 簿記」，「Ⅳ 財務会計」，「Ⅴ 原価計算」などの主要研究領域別に分類される（Ⅰ～ⅩⅥ）。次いで、(2) どの地域の会計の歴史を取り上げているかという「地域別分類基準」にしたがい、「A 日本」，「K イタリア」，「P アメリカ合衆国」（以下、アメリカと略す）などの主要地域別に分類される（A～S）。さらに、(3) どの時代の会計の歴史を取り上げているかという「時代別分類基準」にしたがって、「7 近代」や「8 近代～現代」等の時代別に分類される（0～9）。そして、最終的に、(4) これら三つの個別分類基準を組み合わせた複合的分類基準により、その考究内容が整理・分析されるのである（たとえば、「Ⅲ・A・7」とか、「Ⅳ・K・9」など）。

Ⅲ 文献目録

本節では、1917年から2008年にかけて『會計』に掲載された論稿の中から会計史に関わる研究論文等として抽出された合計817編の「文献目録」を掲げている。そこでは、まず抽出された個々の研究論文等について整理番号（A0001～）を付す（「番号」欄）とともに、既述のように、それぞれの研究論文等の標題（「論文等の標題」欄），執筆者の名前（「執筆者」欄），『會計』に掲載された巻・号（年・月）（「巻号（年月）」欄），当該研究論文等で考究されている内容の要旨（「考究内容の要旨」欄），そして、前節で提示した研究領域・地域・時代という三つの属性に着目した個別分類基準を組み合わせることによる複合的基準に基づく分類（分析）の結果（「分類」欄）を示している。

なお、「文献目録」の提示に先立って、以下の三点にご留意いただきたい。

まず第一に、『會計』に掲載された論稿の中から会計史関係の研究論文等を抽出するにあたり、たとえば、学説研究であってもその歴史的展開（学説史）を意識したものは分析対象として取り上げたが、単に学説研究とみなされるものについては、本稿における分析の対象外としていること。

第二に、「文献目録」中の「分類」欄には、主たる分類結果のみの表記を原則とするが、従たる分類結果も併せて記す必要がある場合には、たとえば、「Ⅲ・S・7（Ⅲ・G・7）」のように、従たる分類結果を主たる分類結果の後に（ ）を設けて示していること。

第三に、「書評・資料・翻訳その他」については、個別的分類基準によれば、「研究領域」的には「XVI」に該当するが、単にそれだけを示すのではなく、それぞれの論稿で取り上げられている内容に基づき、たとえば、それが簿記の歴史を対象とする著作の書評である場合には、「XVI・G・4（→Ⅲ・G・4）」というように、その対象となる内容の分類結果についても、主たる分類結果の後に（ ）を設けて「→」を付す形で示している。

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0001	貸借対照表の形式を論ず	下野直太郎	1 巻 1 号 (1917 年 4 月)	銀行簿記と商業簿記の貸借の相違について、イギリス式貸借対照表を基に検討。	III・A・7
A0002	将棋盤式簿記法	岡田誠一	2 巻 1 号 (1917 年 10 月)	将棋盤式簿記を紹介。	III・G・7
A0003	Logismografia を論ず (一)	岡田誠一	2 巻 2 号 (1917 年 11 月)	ロジスモグラフィアを解説。	III・G・7
A0004	カメラル式簿記	岡田誠一	2 巻 4 号 (1918 年 1 月)	カメラル式簿記を紹介。	III・K・7
A0005	「借方」「貸方」の意義を論じて貸借対照表の形式に及ぶ (一)	中島精二	2 巻 6 号 (1918 年 3 月)	借方・貸方の意義を下野直太郎の見解を中心に検討。	III・A・7
A0006	「借方」「貸方」の意義を論じて貸借対照表の形式に及ぶ (二・完)	中島精二	3 巻 2 号 (1918 年 5 月)	上掲論文 A0005 の続編。銀行簿記における貸借の意義について検討。	III・A・7
A0007	複式簿記の解釈を論ず (上)	児林百合松	3 巻 3 号 (1918 年 6 月)	複式簿記の実質と形式を考察。	III・A・7
A0008	複式簿記の解釈を論ず (中)	児林百合松	3 巻 5 号 (1918 年 8 月)	上掲論文 A0007 の続編。複式簿記の解釈法としての擬人説について検討。	III・A・7

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0009	複式簿記の解釈を論ず (下)	児林百合松	5 巻 2 号 (1919 年 5 月)	上掲論文 A0007 と A0008 の続編。 貸借の字義を重視する擬人法と対 置する等式論を検討し、両者が並 立するものであると結論。	III・K・7
A0010	複式簿記法に於ける財産 目録に就いて	岡田誠一	8 巻 1 号 (1920 年 10 月)	財産目録の機能として四つを指 摘。	III・S・7 (III・G・7)
A0011	史的簿記学雑観 (一)	岡田誠一	8 巻 2 号 (1920 年 11 月)	複記式簿記という名称の妥当性 と、三帳簿制というものの根拠の 希薄さを指摘。	III・S・7 (III・G・7)
A0012	簿記の始りと簿記に関す る初期の書物 (一)	宮本 豊	8 巻 3 号 (1920 年 12 月)	Mackenzie, <i>The Modern Balance Sheet</i> (1908) の邦語抄訳。簿記の 起源についての概略。	XVI・G・4 (→III・G・4)
A0013	簿記の始りと簿記に関す る初期の書物 (二・完)	宮本 豊	8 巻 4 号 (1921 年 1 月)	上掲訳 A0012 の続編。Peele, Dafforne, Postlethway らの著書を 紹介。	XVI・J・7 (→III・J・7)
A0014	アメリカ式簿記法に就て	岡田誠一	8 巻 4 号 (1921 年 1 月)	アメリカ式簿記法の起源を、フラ ンス、イギリス、ドイツ、イタリ アの文献に求めつつ、その有益性 について言及。	III・S・7
A0015	史的簿記学雑観 (二)	岡田誠一	8 巻 5 号 (1921 年 2 月)	前掲論文 A0011 の続編。Paciolo の 名前の読み方や表記、商業帳簿に 対する考え方の変化について言 及。	III・S・7 (III・G・7)
A0016	明治初年の簿記書 (一)	岡田誠一	9 巻 3 号 (1921 年 6 月)	Shand の『銀行簿記精法』(1873) の概要。	III・A・7
A0017	史的簿記学雑観 (三)	岡田誠一	9 巻 6 号 (1921 年 9 月)	前掲論文 A0011 と A0015 の続編。 等式説の確立者としての Schär と、簿記史家としての平井を紹介。	III・K・7 (XV・A・9)
A0018	史的簿記学雑観 (四)	岡田誠一	10 巻 6 号 (1922 年 3 月)	前掲論文 A0011, A0015, A0017 の 続編。Cotrugli の著書の紹介と、 Paciolo の名前の読み方や表記に ついて再言及。	III・G・7
A0019	史的簿記学雑観 (五・完)	岡田誠一	11 巻 4 号 (1922 年 7 月)	前掲論文 A0011, A0015, A0017, A0018 の続編。古代ローマと中世 イタリアにおける複式簿記の発達 について言及。	III・G・4 (III・I・7)
A0020	古代の資本勘定二三(上)	岡田誠一	13 巻 1 号 (1923 年 4 月)	Paciolo, Manzoni, Pietra, Stevin, Dafforne らの資本にあたる用語を 列挙した後、Paciolo と Stevin の それについて検討。	III・S・7

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0021	開城簿記法の形式と内容	大森研三	13 巻 1 号 (1923 年 4 月)	開城簿記法の形式や内容を紹介。	III・C・7
A0022	古代の資本勘定二三(下)	岡田誠一	13 巻 1 号 (1923 年 4 月)	前掲論文 A0020 の続編。Paciolo, Stevin, Dafforne の資本勘定に言及した後, Schär や Nicklisch らのそれと比較。	III・S・8
A0023	補助簿の意味に就て	岡田誠一	13 巻 3 号 (1923 年 6 月)	主要簿・補助簿という区別を意味がないものとして指摘。	III・S・7
A0024	原価計算界の処女地(一)	中村茂男	13 巻 4 号 (1923 年 7 月)	第三回国際原価会議の紹介。	XVI・S・9 (→V・P・9)
A0025	エドワーズ・ジョーンズと其英吉利式簿記法	岡田誠一	14 巻 1 号 (1924 年 1 月)	Brown 編著(1905)(邦語抄訳)を基に, Jones が提唱したイギリス式簿記法について解説。	XVI・J・7 (→III・J・7)
A0026	ルカ・パチョリイの風度	中村茂男	14 巻 1 号 (1924 年 1 月)	Paciolo と Da Vinci との会話を描写した松岡譲の小説「モナ・リザ」の紹介。	XVI・G・7
A0027	原価計算界の処女地(二・完)	中村茂男	14 巻 2 号 (1924 年 2 月)	前掲論文 A0024 の続編。	XVI・S・9 (→V・P・9)
A0028	組合商品勘定に就いて	森 信六	14 巻 4 号 (1924 年 4 月)	16~17 世紀に多く使用された組合商品勘定の意義について考究。	III・A・9
A0029	三記式簿記法梗概(一)	岡田誠一	14 巻 5 号 (1924 年 5 月)	三記式簿記に使用する四つの帳簿のうち, 日記帳を解説。	III・G・7
A0030	簿記法の為めの史的弁護	小篠相一	14 巻 6 号 (1924 年 6 月)	Hatfield, “An Historical Defense of Bookkeeping,” <i>The Journal of Accountancy</i> (1924) の邦語訳。	XVI・S・5 (→I・S・5)
A0031	三記式簿記法梗概(二)	岡田誠一	15 巻 1 号 (1924 年 7 月)	前掲論文 A0029 の続編。三記式簿記に使用する四つの帳簿のうち, 内訳帳について解説。	III・G・7
A0032	三記式簿記法梗概(三)	岡田誠一	15 巻 2 号 (1924 年 8 月)	前掲論文 A0029 と A0031 の続編。	III・G・7
A0033	カイル教授「パチオリ」研究の西班牙訳に添えたるロベツ氏の序文	平井泰太郎	15 巻 2 号 (1924 年 8 月)	Kheil による Paciolo 研究(チェコ語)をスペイン語に訳した文献に対する Lopez の序文の邦語訳。	III・G・7
A0034	平井教授の寄稿に就て	中村茂男	15 巻 4 号 (1924 年 10 号)	Paciolo の名前の綴り方に関する平井教授への反論。	III・G・7
A0035	三度 <i>Summa</i> 著者の氏名に就いて	岡田誠一	15 巻 5 号 (1924 年 11 月)	<i>Summa</i> の著者の名前についての自説を改めて主張。	III・G・7
A0036	師父シェア先生の訃	平井泰太郎	15 巻 6 号 (1924 年 12 月)	Schär の死去を知った著者の回想と, 彼の業績について解説。	XV・K・8
A0037	岡田誠一君に質す	中村茂男	16 巻 1 号 (1925 年 1 月)	Paciolo の名前の読み方に関する岡田への反論。	III・G・7

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0038	三記式簿記法梗概（四・完）	岡田誠一	16 巻 3 号 (1925 年 3 月)	前掲論文 A0029, A0031, A0032 の続編。三記式簿記法における計算組織, 計算明細表, 試算, 閉算について解説。	III・G・7
A0039	資本方程式説の先駆者	岡田誠一	16 巻 4 号 (1925 年 4 月)	資本方程式の先駆者としての Schär 学説について考究。	III・K・7
A0040	露西亜簿記法梗概	岡田誠一	16 巻 5 号 (1925 年 5 月)	ロシア簿記法について紹介。	III・M・8
A0041	本邦銀行会計帳簿式立案者の名に就きて	瀬尾幸三郎	16 巻 6 号 (1925 年 6 月)	Shand のミドルネームの正確な綴りと, 彼の帰国後の生活を紹介。	XV・A・7
A0042	アメリカ会計士業の創業時代	渡部寅二	17 巻 3 号 (1925 年 9 月)	Anyon の著作 (1925) を基に, アメリカにおける会計士業の創業時代を紹介。	XIII・P・7
A0043	英国会計士職務の変遷	渡部義雄	17 巻 4 号 (1925 年 10 月)	18 世紀以降のイギリス会計士の職務の変遷について解説。	XIII・J・8
A0044	J.S. Quiney の <i>Comptable général</i> (上)	岡田誠一	17 巻 5 号 (1925 年 11 月)	Hügli の著書を基に, Quiney の <i>Comptable général, ou livre de raison</i> (1839) を紹介。	III・I・7
A0045	J.S. Quiney の <i>Comptable général</i> (下)	岡田誠一	18 巻 3 号 (1926 年 3 月)	上掲論文 A0044 の続編。上記紹介の後半部分。	III・I・7
A0046	オールドキャスル以前の英国に於ける複式簿記 (一)	岡田誠一	18 巻 4 号 (1926 年 4 月)	Kats が <i>The Accountant</i> (1926) に発表した論文の邦語訳。	XVI・J・4 (→III・J・4)
A0047	オールドキャスル以前の英国に於ける複式簿記 (二・完)	岡田誠一	19 巻 2 号 (1926 年 8 月)	上掲論文 A0046 の続編。邦語訳の後半部分。	XVI・J・4 (→III・J・4)
A0048	簿記法の本領に対する私の理解	岡田誠一	19 巻 2 号 (1926 年 8 月)	簿記に関する各種の問題はすべて簿記法の本領に基づいて解決すべきものとして, 諸問題について解説。	III・A・8
A0049	オールドキャスル以前の英国に於ける複式簿記 (追補)	岡田誠一	19 巻 3 号 (1926 年 9 月)	前掲論文 A0046 と A0047 への追補。注記と原語を掲載。	III・J・4
A0050	複式簿記の普及と階級的 精神	岡田誠一	19 巻 3 号 (1926 年 9 月)	複式簿記の普及発達を階級精神に求め, これを証明するために Paciolo やフランスの商事王令について言及。	III・S・7
A0051	開城簿記法に就て	大谷顕太郎	19 巻 4 号 (1926 年 10 月)	開城簿記法について事例を基に解説。	III・C・7
A0052	ルイ十四世商業条令中商業帳簿に関する条文	岡田誠一	19 巻 4 号 (1926 年 10 月)	ルイ 14 世商事王令 (1673) 中の商業帳簿に関する条文の邦語訳。	XVI・H・7 (→XIV・H・7)

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻号 (年月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0053	日本式収支簿記法	下野直太郎	21 巻 3 号 (1927 年 9 月)	日本式収支簿記について解説。	III・A・8
A0054	ゲーテと簿記	黒澤 清	23 巻 1 号 (1928 年 7 月)	Goethe の作品中における記述から、彼の複式簿記に関する知識について言及。	III・K・7
A0055	パチオロと近世会計学	黒澤 清	23 巻 2 号 (1928 年 8 月)	Littleton, “Paciolo and Modern Accounting,” <i>The Accounting Review</i> (1928) の概要。	III・G・7
A0056	会計学の先駆者達 (一) —タマス・ジョーンズ—	黒澤 清	23 巻 3 号 (1928 年 9 月)	Littleton, “Thomas Jones - Pioneer,” <i>The Certified Public Accountant</i> (1927) を基に、アメリカの Jones の学説を紹介。	III・P・7
A0057	会計学の先駆者達 (二) —フォスター—	黒澤 清	23 巻 3 号 (1928 年 9 月)	Littleton, “Pioneers of Accountancy,” <i>The Certified Public Accountant</i> (1928) を基に、Foster の学説を紹介。	III・P・7
A0058	会計学の先駆者達—アウグスプルグ—	黒澤 清	23 巻 4 号 (1928 年 10 月)	Littleton, “Two Pioneers of Accountancy,” <i>The Certified Public Accountant</i> (1928) を基に、Auguspurg の学説を紹介。	III・K・7
A0059	会計学の先駆者達—クロンヘルム—	黒澤 清	23 巻 4 号 (1928 年 10 月)	イギリスの Cronhelm の学説を紹介。	III・J・7
A0060	トルストイの簿記観	黒澤 清	23 巻 4 号 (1928 年 10 月)	Tolstoy の教育論にみられる簿記観を批判的に検討。	III・M・7
A0061	会計学の先駆者達—スプレーグ—	黒澤 清	23 巻 5 号 (1928 年 11 月)	Sprague の複式簿記観と人物を紹介。	III・P・7
A0062	会計学の先駆者達—ゲオルグ・クルツバウエル—	黒澤 清	23 巻 5 号 (1928 年 11 月)	Kurzbauer の二勘定学説を紹介。	III・K・7
A0063	水島鍊也君を悼む	東 夷五郎 下野直太郎	23 巻 6 号 (1928 年 12 月)	水島への追悼文	XV・A・7
A0064	会計学の先駆者達—エドワーズ・ジョーンズとタマス・ジョーンズ—	黒澤 清	23 巻 6 号 (1928 年 12 月)	Edward Jones (イギリス) と Thomas Jones (アメリカ) という二人の Jones のうち、後者の学説を紹介。	III・P・7
A0065	瑞典に於ける簿記文献の概観	片岡義雄	25 巻 6 号 (1929 年 12 月)	Sillen の文献をもとに、1900 年までのスウェーデンの簿記に関する文献を概観。	III・N・7
A0066	古典と監査—監査の側面史—	野本悌之助	26 巻 1 号 (1939 年 1 月)	古典に現れた監査に関する記述を紹介。	VII・S・3
A0067	伊太利式貸借簿記法と日本式収支簿記法	下野直太郎	26 巻 3 号 (1930 年 3 月)	イタリア式貸借簿記法と日本式収支簿記法とを比較検討。	III・A・8 (III・G・8)
A0068	ルース・リーフ式帳簿の先駆	片岡義雄	26 巻 3 号 (1930 年 3 月)	Brauner の文献を基に、ルーズ・リーフ式帳簿の起源を紹介。	III・S・0

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻号 (年月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0069	明治中葉に於ける収支簿記法の先駆	田中藤一郎	26 巻 3 号 (1930 年 3 月)	収支簿記の先駆的著書として、大坪著『簿記活法』を紹介。	III・A・7
A0070	アラン・シャンドの『銀行簿記精法』に就て	渡部寅二	27 巻 1 号 (1930 年 7 月)	Shand の逝去を契機に『銀行簿記精法』を改めて解説。	III・A・7
A0071	支那固有の会計と其将来	有本邦造	27 巻 3 号 (1930 年 9 月)	中国固有の簿記法についての概説と、新式会計輸入以来の諸問題を解説。	III・B・8
A0072	近代的会計学の意義と予算統制への進展	長谷川安兵衛	27 巻 4 号 (1930 年 10 月)	アメリカ、イギリス、ドイツにおける予算統制の普及過程の紹介と、わが国における予算統制普及の必要性を主張。	VI・S・9
A0073	勘定学説史論 (其一)	岡田誠一	27 巻 4 号 (1930 年 10 月)	Gomberg, <i>Historie Critique de la Théorie des Comptes</i> (1929) の第 4 章までの邦語抄訳。	XVI・S・7 (→III・S・7)
A0074	勘定学説史論 (其二)	岡田誠一	27 巻 5 号 (1930 年 11 月)	上掲論文 A0073 の続編。原著第 5 章の邦語抄訳。	XVI・S・7 (→III・S・7)
A0075	勘定学説史—ゴンベルグ・勘定理論の史的批判—	和泉三郎	27 巻 5 号 (1930 年 11 月)	上掲論文 A0073 と A0074 の実質的続編。原著第 6 章の前半部分の邦語抄訳。	XVI・S・7 (→III・S・7)
A0076	ゴンベルグ・勘定学説の史的批判	和泉三郎	27 巻 6 号 (1930 年 12 月)	上掲論文 A0073～A0075 の続編。原著第 6 章の後半部分から最後の「結論」までの邦語抄訳。	XVI・S・8 (→III・S・8)
A0077	貸借対照表本質観略史 (其一)	杉本秋男	28 巻 3 号 (1931 年 3 月)	(序論の 1) 動態論の確立者としての Schmalenbach と, Schär らの静态論者の所説について解説。	IV・K・8
A0078	貸借対照表本質観略史 (其二)	杉本秋男	28 巻 4 号 (1931 年 3 月)	上掲論文 A0077 の続編。(序論の 2) Schmidt と Sewering の主張について解説。	IV・K・9
A0079	貸借対照表本質観略史 (其三)	杉本秋男	28 巻 5 号 (1931 年 5 月)	上掲論文 A0077 と A0078 の続編。(本論の 1) 14 世紀から 20 世紀初頭までの貸借対照表論を概観。	IV・G・5 (IV・K・7)
A0080	貸借対照表本質観略史 (其四・完)	杉本秋男	28 巻 6 号 (1931 年 6 月)	上掲論文 A0077, A0078, A0079 の続編。(本論の 2) 経営経済学成立以後の貸借対照表論について解説。	IV・K・8
A0081	貸借対照表なる用語の出所に就て	岡田誠一	28 巻 6 号 (1931 年 6 月)	わが国における貸借対照表という用語の出所を商法との関連で検討。	IV・A・8

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻号 (年月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0082	ピー・カット複式簿記の 起源に就いて	柳沢豊勝	29 巻 1 号 (1931 年 7 月)	Kats, “A Surmise regarding the Origin of Bookkeeping by Double Entry,” <i>The Accounting Review</i> (1930) を紹介。	III・G・1
A0083	複式簿記の派生的原理と 日記帳との関係	藤巻治吉	29 巻 2 号 (1931 年 8 月)	客観的貸借日記帳, 主観的貸借日記帳および収支式日記帳についての解説。	III・A・9
A0084	西洋式貸借簿記計算法の 欠点を論難す	下野直太郎	29 巻 4 号 (1931 年 10 月)	西洋式貸借簿記計算法の欠点を指摘。	III・A・8
A0085	原価計算の必要を論じた 最初の文献に就て	尾崎義夫	29 巻 6 号 (1931 年 12 月)	原価計算を最初に論じた一人とされる Babbage の紹介と, 彼の著書の部分邦語訳。	V・J・7
A0086	英国破産法の由来	平田 央	30 巻 2 号 (1932 年 2 月)	イギリス破産法の歴史について考察。	XIV・J・7
A0087	勘定理論と勘定学説	畠中福一	30 巻 5 号 (1932 年 5 月)	勘定理論の定義, 研究方法, 分類, 基本的諸問題等について検討。	III・S・8
A0088	勘定理論に於ける一元的 方法と二元的な方法	畠中福一	31 巻 1 号 (1932 年 7 月)	勘定貸借の意義に関する一元的な方法と二元的な方法について解説。	III・S・8
A0089	テーラー先生と原価計算 —原価計算の先駆者としての テーラー先生—	上野陽一	31 巻 4 号 (1932 年 10 月)	Taylor の生涯を追いながら, 彼の原価計算に対する関わりを考究。	XV・P・8 (→V・P・8)
A0090	計理士制度の回顧	木村禎橘	31 巻 5 号 (1932 年 11 月)	1927 年施行の計理士法の成立過程について解説。	XIV・A・9 (XIII・A・9)
A0091	支那固有の会計制度沿革 考	有本邦造	32 巻 1 号 (1933 年 1 月)	中国固有の公会計制度, つまり, 収支会計制度の概要。	X・B・3
A0092	複式簿記と企業簿記 (其 一)	木村和二郎	32 巻 1 号 (1933 年 1 月)	複式企業簿記の本質を明らかにするために, これを複式簿記と企業簿記とに分解して考察。	III・S・8
A0093	広東固有の商業簿記及び 其批判	有本邦造	32 巻 2 号 (1933 年 2 月)	広東固有の商業簿記法の解説と若干の批判。	III・B・8
A0094	複式簿記と企業簿記 (其 二・完)	木村和二郎	32 巻 2 号 (1933 年 2 月)	前掲論文 A0092 の続編。	III・S・8
A0095	原価会計発達の現在及び 過去	大石善四郎	32 巻 2 号 (1933 年 2 月)	原価計算の発展を初期・中期・現代に分類し, これらの概略を紹介。	V・P・8
A0096	ニックリッシュの有機的 貸借対照表観—静的貸借 対照表観の吟味 (其一) —	杉本秋男	32 巻 4 号 (1933 年 4 月)	Nicklisch の貸借対照表観について解説。	IV・K・8

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0097	ニックリッシュの貸借対照表観の批判—ニックリッシュの有機貸借対照表観（二）—静的貸借対照表観の吟味（其一）—	杉本秋男	32 巻 5 号 (1933 年 5 月)	上掲論文 A0096 の続編。Nicklisch の貸借対照表観に対する若干の批判的考究。	IV・K・8
A0098	勘定系統論	木村和二郎	32 巻 5 号 (1933 年 5 月)	勘定学説を資本勘定学派と損益勘定学派とに分類し、両勘定学派の勘定理論構成における一面性を批判。	III・K・8
A0099	勘定理論構成に於ける立場—勘定系統論の其の二—	木村和二郎	32 巻 6 号 (1933 年 6 月)	上掲論文 A0098 の続編。現れるべき勘定理論は、残高試算表を理論構成の基礎とせねばならないことをと主張。	III・K・8
A0100	勘定学説の現実的基礎		33 巻 1 号 (1933 年 7 月)	Schär らの物的二勘定学説から Walb らの成果勘定学説までを、現実の企業会計制度との関連において概観。	III・K・8
A0101	複式簿記の再吟味	太田哲三	33 巻 2 号 (1933 年 8 月)	勘定学説の議論で取り上げられる諸学説に言及した上で、複式簿記を単なる計算機構として捉えることの妥当性を考察。	III・K・8
A0102	新刊紹介：畠中福一著『勘定学説研究』	黒澤 清	33 巻 2 号 (1933 年 8 月)	畠中著『勘定学説研究』を紹介。	XVI・S・8 (→III・S・8)
A0103	複式簿記の発生史的考察	黒澤 清	33 巻 3 号 (1933 年 9 月)	13 世紀のフィレンツェ簿記から 18 世紀の口別計算の終焉までを概観。	III・G・5
A0104	日記帳論（其一）	但馬弘衛	33 巻 3 号 (1933 年 9 月)	明治 23 年商法第 25 条が規定する帳簿に日記帳が含まれるか否かについて検討。	XIV・A・8 (III・A・8)
A0105	日記帳論（其二・完）	但馬弘衛	33 巻 4 号 (1933 年 10 月)	上掲論文 A0104 の続編。	XIV・A・8 (III・A・8)
A0106	勘定の本質	黒澤 清	33 巻 5 号 (1933 年 11 月)	階梯計算から勘定、そして、複式簿記への発展を資本主義経済の発展を背景に解説。	III・G・5
A0107	勘定論	木村和二郎	34 巻 1 号 (1934 年 1 月)	前掲論文 A0098 と A0099 の続編。Buhl らの見解を参考にしながら、勘定の生成発展を概観。	III・G・5 (III・K・5)
A0108	現行西洋式貸借簿記計算法の不備欠点を論ず	下野直太郎	34 巻 4 号 (1934 年 4 月)	Shand の著作に代表される西洋式簿記を批判し、収支簿記法の使用を主張。	III・A・8

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻号 (年月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0109	経過項目概念生成の概観 —アントン・ハールに拠 る—	片岡義雄	34 巻 5 号 (1934 年 5 月)	ドイツとイタリアにおける経過勘 定項目の生成について, Haal の文 献を基に概観。	III・K・6 (III・G・6)
A0110	帳簿組織の歴史的発展	木村和三郎	35 巻 1 号 (1934 年 7 月)	帳簿組織の発展が記帳量と記帳能 力の矛盾にあることと, 今後は凝 集と拡散の相対立する方向に現れ ると主張。	III・K・5
A0111	『帳合之法』につきて	西川孝治郎	35 巻 3 号 (1934 年 9 月)	福澤訳『帳合之法』(1873/74) に ついて解説。	III・A・7
A0112	簿記及会計学文献雑考	有本邦造	35 巻 4 号 (1934 年 10 月)	1868(明治元)年から 1897 年まで にわが国で公刊された簿記書 49 点を解説。	III・A・7
A0113	パシオロ時代における損 益計算制度	木村和三郎	35 巻 5 号 (1934 年 11 月)	Paciolo の時代が口別損益計算制 度のもとにあることを指摘。	IV・G・7 (III・G・7)
A0114	決算書類の名称変遷考	有本邦造	35 巻 5 号 (1934 年 11 月)	決算書類のうち, 貸借対照表と損 益計算書の名称の変遷について解 説。	IV・A・8
A0115	簿記学と会計学に関する 一考察	沼田嘉穂	36 巻 1 号 (1935 年 1 月)	簿記学と会計学の使い分けについ て考察。	III・S・8
A0116	我国初期の簿記書に就て	西川孝治郎	36 巻 1 号 (1935 年 1 月)	前掲論文 A0112 で取り上げられな かった簿記書 20 数冊を解説。	III・A・7
A0117	パチオリ以前に於ける伊 太利簿記の展望	田中藤一郎	36 巻 2 号 (1935 年 2 月)	Penndorf の著書を基に Paciolo 以 前のイタリア式簿記を展望。	III・G・4
A0118	新刊紹介: 木村和三郎著 『銀行簿記論』	黒澤 清	36 巻 2 号 (1935 年 2 月)	木村著『銀行簿記論』を紹介。	XVI・A・9 (→III・A・9)
A0119	我国初期簿記書目	西川孝治郎	36 巻 3 号 (1935 年 3 月)	1896 年以前のわが国の簿記書 173 点のリスト。	III・A・7
A0120	『馬耳蘇氏簿記法』に就 て	西川孝治郎	36 巻 5 号 (1935 年 5 月)	『馬耳蘇氏簿記法』(1875) につい て, その内容, 背景, および, 訳 者を紹介。	III・A・7
A0121	経済地盤の変遷と原価計 算の発展	松本雅男	36 巻 6 号 (1935 年 6 月)	原価計算法の変遷を各国の経済的 地盤の見地から考察。	V・S・8
A0122	スタトモグラフィヤ梗概	岡田誠一	37 巻 3 号 (1935 年 9 月)	Esquérre の著作を基に, 四記式簿 記 (Statomografia) を解説。	III・G・7
A0123	静的評価論の変遷	岩田 巖	37 巻 4 号 (1935 年 10 月)	初期の販売価値説から続く各種評 価論について検討。	IV・K・7
A0124	新刊紹介: 岡田誠一訳『ゴ ムベルグ批判的勘定学説 史』	黒澤 清	38 巻 1 号 (1936 年 1 月)	岡田著『ゴムベルグ批判的勘定学 説史』を紹介。	XVI・G・7 (→III・G・7)

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0125	ルカ・パチョーリ「複式簿記釈義」	黒澤 清	38 巻 2 号 (1936 年 2 月)	Paciolo の「簿記論」(1494) について、Penndorf の独語訳に依拠しつつ、Crivelli の英語訳も参照した邦語訳。	III・G・7
A0126	和蘭簿記学史の研究(一)	田中藤一郎	38 巻 3 号 (1936 年 3 月)	ten Have, <i>De Leer van Het Boekhouden in de Nederlanden tijdens de Zeventiende en Achtiende eeuw</i> (1933) を基に、17～18 世紀ネーデルラントの簿記史を概観。	III・I・7
A0127	和蘭簿記学史の研究(其二・完)	田中藤一郎	38 巻 4 号 (1936 年 4 月)	上掲論文 A0126 の続編。	III・I・7
A0128	単式簿記と複式簿記の限界	金子利八郎	38 巻 6 号 (1936 年 6 月)	主としてドイツの学説を基に、単式簿記と複式簿記を比較検討。	III・K・8
A0129	原価制度の趨向—過去、現在、未来—	和泉三郎 (黒澤清)	38 巻 6 号 (1936 年 6 月)	イギリスの原価会計士 Moran, “The Trend of Costing - Past, Present and Future,” <i>The Cost Accountant</i> (1936) の大半の邦語訳。	XVI・J・8 (→V・J・8)
A0130	シャンドの功績	藤原 泰	39 巻 6 号 (1936 年 12 月)	『銀行簿記精法』の著者として有名な Shand の功績を紹介。	XV・A・7 (III・A・7)
A0131	明治前期簿記書に就て	西川孝治郎	40 巻 5 号 (1937 年 5 月)	前掲論文 A0116 の続編。新たに明治時代の簿記書 30 点を解説。	III・A・7
A0132	和蘭簿記学史概観	田中藤一郎	40 巻 5 号 (1937 年 5 月)	de Waal, <i>Van Paciolo tot Stevin</i> (1927) を基に、15～16 世紀ネーデルラントの簿記史を概観。	III・I・7
A0133	江戸時代に於ける織物問屋の帳簿(其一)	大谷壽太郎	41 巻 5 号 (1937 年 11 月)	江戸時代の関東と中部の織物問屋 23 店の帳簿を考察。	III・A・7
A0134	ヒューグリ簿記体系と簿記形式(其一)	山下勝治	41 巻 5 号 (1937 年 11 月)	Hügli, <i>Buchhaltungs-Systeme und Buchhaltungs-Formen</i> (1923) の第 1 部の邦訳。	XVI・K・8 (→III・K・8)
A0135	江戸時代に於ける織物問屋の帳簿(其二・完)	大谷壽太郎	41 巻 6 号 (1937 年 12 月)	前掲論文 A0133 の続編。事例によりその特徴を詳述。	III・A・7
A0136	ヒューグリ簿記体系と簿記形式(其二・完)	山下勝治	41 巻 6 号 (1937 年 12 月)	前掲論文 A0134 の続編。	XVI・K・8 (→III・K・8)
A0137	簿記学史随想	田中藤一郎	42 巻 1 号 (1938 年 1 月)	de Waal, <i>Van Paciolo tot Stevin</i> (1927) の附録の概要。	III・S・7
A0138	神馬氏「複式簿記日本伝来」に就て	西川孝治郎	42 巻 2 号 (1938 年 2 月)	神馬著“Introduction of Double Entry Bookkeeping into Japan”に対する批判的考察。	III・A・7

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0139	本邦米穀問屋会計組織の研究	相馬正三	42 巻 3 号 (1938 年 2 月)	江戸時代以来の伝統を誇るわが国の米問屋における近代的な簿記の利用に関する実地調査と考究。	III・A・8
A0140	神馬氏「複式簿記の日本輸入」	大倉義雄	42 巻 5 号 (1938 年 5 月)	神馬著“Introduction of Double Entry Bookkeeping into Japan”の邦語訳。	III・A・7
A0141	会計学の史的考察と再吟味の必要	辻 治躬	42 巻 5 号 (1938 年 5 月)	わが国の文献を例として、会計学の史的考察の必要性を主張。	I・A・8
A0142	台湾在来の簿記	渡邊 進	43 巻 2 号 (1938 年 8 月)	台湾簿記の調査報告。	III・B・8
A0143	稿本『銀行簿記精法』の発見	西川孝治郎	43 巻 4 号 (1938 年 10 月)	Shand の『銀行簿記精法』の稿本（訳者の一人である梅浦精一によるもの）と刊行本とを比較。	III・A・7
A0144	比較簿記史論（一）	田中藤一郎	43 巻 5 号 (1938 年 11 月)	Besta, <i>La Ragioneria</i> (1909/1910) を基に、比較簿記史論を展開。	III・S・7
A0145	比較簿記史論（其二・完）	田中藤一郎	43 巻 6 号 (1938 年 12 月)	上掲論文 A0144 の続編。	III・S・7
A0146	明治前期簿記文献史の一資料—ハーウッド会計文庫蔵書目録と我が国明治前期簿記書目—	西川孝治郎	44 巻 1 号 (1939 年 1 月)	前半ではニューヨークの Herwood & Herwood 会計事務所が編纂した 19 世紀末以前の簿記会計書目録の内容を考察。後半では著者が新たに収集した文献 90 点を挙げ上記の目録と比較。	III・A・7
A0147	「ホキツトネー」と簿記	西川孝治郎	44 巻 6 号 (1939 年 6 月)	わが国最初の外人簿記教師とされる Whitney の事跡と、当時の簿記教育について考察。	XV・A・7 (XII・A・7)
A0148	伊太利簿記史の三段階に就て	田中藤一郎	45 巻 2 号 (1939 年 8 月)	Baliora の著書を基に、イタリアにおける簿記の発展を概観。	III・G・7
A0149	ペラガロの複式簿記発達史論に就て	田中藤一郎	45 巻 6 号 (1939 年 12 月)	Peragallo, <i>Origin and Evolution of Double Entry Bookkeeping</i> (1938) の第 1 部と第 2 部を紹介。	III・G・5
A0150	下野会計学の全貌	太田哲三	46 巻 1 号 (1940 年 1 月)	収支簿記法の提唱者、下野の学説を紹介。	III・A・8
A0151	伊太利に於ける複式簿記の機能的発展	本田利夫	47 巻 2 号 (1940 年 8 月)	前掲論文 A0149 の実質的続編。Peragallo, <i>Origin and Evolution of Double Entry Bookkeeping</i> (1938) の第 3 部に基づくイタリア式簿記の発展史的考察。	III・G・7
A0152	忘れられたる『商家必用』に就て	西川孝治郎	47 巻 3 号 (1940 年 9 月)	明治期の簿記啓蒙書である加藤訳『商家必用』（1873/77）を紹介。	III・A・7

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0153	ハットフキールド・簿記 随想	本田利夫	47 巻 6 号 (1940 年 12 月)	Hatfield, “Accounting Triva,” <i>The Accounting Review</i> (1940) の邦語訳。	XVI・S・7 (→III・S・7)
A0154	明治前期家計簿記書史考	西川孝治郎	48 巻 1 号 (1941 年 1 月)	明治前期の家計簿記書を紹介。	XVI・A・7 (→III・A・7)
A0155	『日用簿記法』に就て	西川孝治郎	51 巻 5 号 (1942 年 11 月)	『銀行簿記精法』以外に大蔵省が公刊した『日用簿記法』(1878)を紹介。	III・A・7
A0156	勘定学説と工業簿記	太田哲三	51 巻 6 号 (1942 年 12 月)	物的二勘定学説と工業簿記との関連, 派生する問題点について言及。	III・K・7
A0157	米独予算統制論略史	本田利夫	52 巻 1 号 (1943 年 1 月)	Hahn, <i>Die Budgetrechnung im Kreditbankwesen</i> (1940) の部分邦語訳。	XVI・P・8 (XVI・K・8) (→VI・P・8, →VI・K・8)
A0158	アラン・シャンドに就て	山崎英雄	52 巻 3 号 (1943 年 3 月)	Shand の業績と人物について紹介。	XV・A・7
A0159	減価償却の成立過程 (其 一)	木村和二郎	53 巻 4 号 (1943 年 10 月)	イギリスの産業革命以降に生じた減価償却 (論) 発展過程の概観。	IV・S・7
A0160	減価償却の成立過程 (其 二・完)	木村和二郎	53 巻 5 号 (1943 年 10 月)	前掲論文 A0159 の続編。	IV・S・7
A0161	勘定学説の展開—複合二 勘定説の提案—	太田哲三	56 巻 2 号 (1949 年 5 月)	これまでの勘定学説を検討し, 借方勘定を価値勘定, 貸方勘定を価値原因勘定との二つに大別した勘定学説を提案。	III・K・7
A0162	企業経済の計算的思考と 其の発展	山下勝治	56 巻 2 号 (1949 年 5 月)	利益計算思考の発展として, 口別損益計算, 期間的損益計算, 原価計算的思考に基づく損益計算について検討。	IV・S・5
A0163	経営者会計学とその対象	阪本安一	56 巻 6 号 (1949 年 11 月)	Schmalenbach を引用して, 経営者による会計学や発生主義会計について検討。	IV・S・9
A0164	フィッシャー学説の展望 —その学説上の地位につ いて—	飯野利夫	57 巻 2 号 (1950 年 2 月)	Fischer の簿記技術に立脚した貸借対照表論の学説的位置づけについて考究。	IV・K・7
A0165	複式簿記における人名勘 定—勘定の経済的職能を めぐりて—	小島男佐夫	57 巻 2 号 (1950 年 2 月)	Penndorf の著作を基に, フィレンツェの帳簿を検討し, 人名勘定が複式簿記の体系化に果たした役割の重要性を主張。	III・G・4
A0166	パチョーリ「簿記論」の 一齣 (一)	片岡義雄	57 巻 4 号 (1950 年 4 月)	Paciolo の「簿記論」(1494) の翻訳と紹介。	III・G・7

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0167	諸外国の会計士事情—その過去、現在及び将来—	本田利夫	57 巻 5 号 (1950 年 5 月)	アメリカを中心として、さまざまな国における会計士の成立状況とその業務について説明。	XIII・P・7
A0168	複式簿記の成立と損益計算制度	山下勝治	57 巻 6 号 (1950 年 6 月)	13～15 世紀の複式簿記に見られる損益計算制度の発展について考察。	IV・G・4
A0169	パチョーリ「簿記論」の一齣（二）	片岡義雄	57 巻 6 号 (1950 年 6 月)	前掲論文 A0166 の続編。	III・G・7
A0170	パチオリ以前の簿記の特徴	本田利夫	58 巻 2 号 (1950 年 8 月)	de Roover の論文を基に、Paciolo 以前の簿記生成の過程を概観。	III・G・4
A0171	パチョーリ「簿記論」の一齣（三）	片岡義雄	58 巻 3 号 (1950 年 9 月)	前掲論文 A0166 と A0169 の続編。	III・G・7
A0172	パチョーリ「簿記論」の一齣（四）	片岡義雄	58 巻 4 号 (1950 年 10 月)	前掲論文 A0166, A0169, A0171 の続編。	III・G・7
A0173	複式官廳簿記史上の一齣—受払勘定と決算計算書説明—	大川戸猶吉	58 巻 5 号 (1950 年 11 月)	複式官庁簿記において、成果計算の書類としてこれまで使用されていた受払勘定と決算計算書について説明。	X・A・8 (III・A・8)
A0174	原口亮平先生追悼の辞	太田哲三	59 巻 3 号 (1951 年 3 月)	原口への追悼文。	XV・A・9
A0175	米国財務監査の生成因	久保田音二郎	59 巻 4 号 (1951 年 4 月)	アメリカの財務監査理念に関して、19 世紀末にまで遡って検討。	V・P・8
A0176	コントローラーの生成と発展	江村 稔	59 巻 5 号 (1951 年 5 月)	コントローラーについて、その生成を近世初頭まで遡り、その展開過程について検討。	VI・P・8
A0177	口別損益計算制度の成立過程	小倉栄一郎	59 巻 6 号 (1951 年 6 月)	Littleton と de Roover の研究を基に、口別損益計算制度の成立過程について検討。	III・S・5
A0178	複式簿記と管理機能	小島男佐夫	60 巻 2 号 (1951 年 8 月)	中世イタリアの簿記の検討から、複式簿記の本質的な要素が「管理」であることを主張。	III・G・4
A0179	会計理論の社会経済的基礎—ドイツ貸借対照表論争に対する解釈—	宮上一男	61 巻 1 号 (1952 年 1 月)	ドイツ普通商法典（1861）における時価評価規定と、Schmalenbach の動的貸借対照表論が 1900 年初頭に現れた意義を考察。	IV・K・7
A0180	米国会計学者の横顔	中島省吾	61 巻 5 号 (1952 年 5 月)	Paton と Littleton の紹介。	XV・P・9 (→IV・P・9)
A0181	戦後における原価論の発展	池田英次郎	62 巻 7 号 (1952 年 12 月)	原価と操業率の関係に関して、それまでのドイツやアメリカにおける論者の見解を紹介。	V・K・8 (V・P・8)

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0182	複式簿記の経済理論—ス ガンチーニとパーペー	白井佐敏	62 巻 7 号 (1952 年 12 月)	資本の循環過程を示した Sganzzini と Pape を取り上げ、彼らの簿記 理論の意義と限界について検討。	III・K・8
A0183	コンテンラーメンの発展	土岐政蔵	63 巻 1 号 (1953 年 1 月)	ドイツにおけるコンテンラーメン (主に公企業会計に適用する勘定 組織)を、Schmalenbach のそれを 中心に紹介。	III・K・8
A0184	アメリカ財務表分析の発 展 (一)	野瀬新蔵	63 巻 2 号 (1953 年 2 月)	1910 年代から 1930 年代までのア メリカ財務分析の発展について概 観。	IV・P・8
A0185	アメリカ財務表分析の発 展 (二・完)	野瀬新蔵	63 巻 3 号 (1953 年 3 月)	上掲論文 A0184 の続編。	IV・P・8
A0186	簿記法導入に功績のあつ た三人の西洋人について	西川孝治郎	64 巻 1 号 (1953 年 7 月)	日本への複式簿記(西洋式簿記法) の導入に最も関係の深い Braga, Shand, Whitney を紹介。	XV・A・7 (→III・A・7)
A0187	複式簿記生成過程におけ るヴェニス式簿記の地位 —ソランツォ兄弟商会と アンドリア・バルバリゴ の簿記を中心として—	小島男佐夫	64 巻 4 号 (1953 年 10 月)	ヴェネツィア式簿記における勘定 形式、勘定体系の組織化、帳簿組 織の確立について解説。	III・G・4
A0188	簿記理論の経済学的基礎	岡本愛次	64 巻 4 号 (1953 年 10 月)	Sganzzini, Walb らの勘定学説を引 用し、資本循環といった利益・資 本問題について検討。	III・K・8
A0189	シュマーレンバッハ教授 八〇才誕生日に際して	山下勝治	64 巻 5 号 (1953 年 11 月)	Schmalenbach の学界への貢献、主 要文献、略歴について紹介。	XV・K・8 (→IV・K・8)
A0190	収支簿記法の起源の研究	西川孝治郎	64 巻 7 号 (1953 年 12 月)	Shand の『銀行簿記精法』(1873) を基に、収支簿記法の特徴を解説。	III・A・7
A0191	パチョーリ「簿記論」の 祖述者	片岡義雄	65 巻 3 号 (1954 年 3 月)	Paciolo の「簿記論」に対するイタ リア、イギリス、オランダ、ドイ ツにおける祖述者を列挙・紹介。	III・S・7
A0192	アメリカ財務表分析発展 史論(覚書) (一)	野瀬新蔵	65 巻 3 号 (1954 年 3 月)	1920 年代以降のアメリカにおける 財務諸表分析の発展と管理会計の 生成について検討。	VI・P・9
A0193	アメリカ財務表分析発展 史論(覚書) (二・完)	野瀬新蔵	65 巻 4 号 (1954 年 4 月)	上掲論文 A0192 の続編。	VI・P・9
A0194	アメリカにおける二十世 紀初頭の損益計算の慣行	高橋吉之助	66 巻 5 号 (1954 年 11 月)	1900 年代を中心として損益計算書 に関する当時の実務や凡例を基 に、財産計算による損益把握が中 心であったことを指摘。	IV・P・7

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0195	福澤諭吉と収支簿記法	西川孝治郎	66 巻 6 号 (1954 年 12 月)	福澤訳『帳合之法』の注釈と、そこに収支簿記法にまで発展する端緒となるものがあったことを指摘し、その発展経過を紹介。	III・A・8
A0196	間接費論の歴史的生成— 固定費と経営を中心として—	天野恭徳	66 巻 7 号 (1954 年 12 月)	18～20 世紀における原価計算の文献を引用しながら、原価計算体系に間接費が登場してくる歴史的経過について考究。	V・S・8
A0197	経営経済学の父シュマー レンバッハ先生を憶う	土岐政蔵	67 巻 4 号 (1955 年 4 月)	Schmalenbach への追悼文。	XV・K・9
A0198	故岩田巖教授と会計士監 査	木村禎橘	67 巻 4 号 (1955 年 4 月)	岩田への追悼文。	XV・A・9
A0199	日本における西洋簿記の 普及と記数法	西川孝治郎	67 巻 5 号 (1955 年 5 月)	帳簿における記録数字としてのアラビア数字の普及と、日本特有の記数法による記録の特徴について解説。	III・A・7
A0200	商法講習所設立趣意書の 原本	西川孝治郎	67 巻 6 号 (1955 年 6 月)	一橋大学の起源にあたる商法講習所の創立 90 年にあたり、福澤による設立趣意書を紹介。	XII・A・7
A0201	明治初期輸入簿記書	西川孝治郎	68 巻 5 号 (1955 年 11 月)	明治初期における簿記書の目録とその分類について解説するとともに、特に影響を与えた Folsom について紹介。	III・A・9
A0202	シャンド編『日本国立銀 行事務取扱方』について	西川孝治郎	69 巻 5 号 (1956 年 5 月)	『銀行簿記精法』で有名な Shand による隠れた事績である『日本国立銀行事務取扱方』(1876) について、同書が前者の姉妹編として著述されたことを指摘。	III・A・7
A0203	複式簿記の機能的展開— 記帳計算手続の管理機能 的側面の展開—	小島男佐夫	70 巻 1 号 (1956 年 7 月)	複式簿記の管理的機能について、15 世紀から 20 世紀初頭までの文献を分析し、複式簿記の「勘定とその組織」が、損益計算の機能だけでなく、管理計算の機能を常に伴って展開してきたことを指摘。	III・S・5
A0204	西川氏のシャンド研究業 績のイギリスにおける反 響	著者不詳	70 巻 3 号 (1956 年 9 月)	西川の Shand 研究がイギリスの <i>The Accountant</i> 誌に掲載されたことを、該当の記事とともに紹介。	XVI・A・9 (→III・A・9)
A0205	工業会計制度確立の周辺 —いわゆる「インテグ レーション」を中心として —	敷田礼二	70 巻 4 号 (1956 年 10 月)	20 世紀初頭アメリカの工業会計制度および原価計算制度の機能について検討。	V・P・7

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0206	会計史の課題とその方法 —会計における十五世紀 と十九世紀の地位につ いて—	茂木虎雄	70 巻 4 号 (1956 年 10 月)	会計史上重要な時代とされる 15 世紀と 19 世紀について、会計史家 がどのように捉えてきたかを分析 するとともに、会計史の学問的独 立のためには、会計の果たしてき た有用性に対する検討が必要であ ることを指摘。	I・S・5
A0207	アメリカにおける特別償 却と反独占論（一）	高寺貞男	70 巻 5 号 (1956 年 11 月)	アメリカで行われた三度（第一次 世界大戦中、第二次世界大戦中、 朝鮮戦争中）の加速特別償却に関 する研究のうち、「特別償却と産 業集中との関連」に関する研究を 紹介。	IV・P・8
A0208	シャンド式簿記の起源に ついて	西川孝治郎	70 巻 5 号 (1956 年 11 月)	Shand 式簿記の源流について、通 説であったドイツ式総合簿記法改 良説を否定し、イギリス起源説を 主張。また、振替伝票が彼の考案 であるといった誤伝を訂正し、 Shand 式簿記の成立の背景につ いて考究。	III・A・7
A0209	アメリカにおける特別償 却と反独占論（承前）	高寺貞男	70 巻 6 号 (1956 年 12 月)	前掲論文 0207 の続編。	IV・P・8
A0210	産業革命期のイギリス株 式会社	馬場克三	71 巻 3 号 (1957 年 3 月)	Evans の <i>British Corporation Fi- nance, 1775-1850</i> (1936) を基に、 産業革命期のイギリス株式会社の 実態について検討。	IV・J・7
A0211	貸借対照表価格と財産目 録価格	土岐政蔵	71 巻 5 号 (1957 年 5 月)	貸借対照表と財産目録の資産評価 基準が同一であるべきとする考え 方に疑問を呈し、財産目録がなん ら複式簿記と関連せず会計学以外 のものであることから評価基準は 異なるべき旨を主張。	IV・A・8
A0212	原価時価低価法の確立過 程—マルコよりサヴァリ まで—	中村萬次	72 巻 1 号 (1957 年 7 月)	低価法（低価基準）の確立過程に ついて、15 世紀の Datini, Mennher, Savary の所説を基に考究。	IV・G・4 (IV・H・5)
A0213	動態論の歴史的意義	神田忠雄	72 巻 2 号 (1957 年 8 月)	動態論の歴史的意義について、分 権管理方式の展開、および、計画 と管理の会計の地位向上に伴い重 要性を失いつつあると指摘。	IV・K・9 (IV・P・9)
A0214	近代会計の生成—産業資 本主義段階における会計 問題—	茂木虎雄	72 巻 3 号 (1957 年 9 月)	近代会計の生成史上における 19 世紀の重要性について考察。	I・S・7

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0215	貸借対照表論史上のウィルモウスキー	浅羽二郎	72 巻 4 号 (1957 年 10 月)	v. Wilmowski の学説について検討。	IV・K・8
A0216	W. C. ホイトニーと簿記	西川孝治郎	74 巻 6 号 (1958 年 12 月)	Whitney の簿記教育活動とその門弟たちの著書から、取引要素説の生成に関する試論を展開。	III・A・7
A0217	減価償却概念の萌芽的形成— John Mellis より J. Clement Stocker まで—	中村萬次	75 巻 2 号 (1959 年 2 月)	16 世紀から 19 世紀前半までの簿記・会計文献とプロシヤ一般国法の分析から、“depreciation”という用語が減価償却を意味しなかったことを指摘。	IV・S・7
A0218	「複会計制度」への一省察—特にその生成事情と会計思考について—	上村久雄	75 巻 3 号 (1959 年 3 月)	近代会計の先駆ともみなされる「複会計制度」について検討。	IV・J・8
A0219	パチョーリ『ズムマ』のマイクロフィルム	著者不詳	75 巻 5 号 (1959 年 5 月)	Paciolo の <i>Summa</i> のマイクロフィルムが日本に到着したことを紹介。	XVI・G・7 (→III・G・7)
A0220	原価計算の近代化	土岐政蔵	75 巻 6 号 (1959 年 6 月)	会計の近代化を、動態論の生成と原価計算の経営価値計算化として捉え、後者について解説。	V・K・8
A0221	複式簿記発生史に関する若干考察—ブルージュ銀行業者の帳簿を中心として—	小島男佐夫	76 巻 1 号 (1959 年 7 月)	ブルージュの銀行業者の帳簿について de Roover の著作を基に検討し、ジェノヴァの記帳方法との相互関連性について言及。	III・I・4
A0222	「産業合理化期」における企業会計の展開 (一)	茂木虎雄	76 巻 1 号 (1959 年 7 月)	第二次世界大戦前の「産業合理化期」における企業会計の展開について検討。	IV・A・9
A0223	「産業合理化期」における企業会計の展開 (二)	茂木虎雄	76 巻 2 号 (1959 年 8 月)	上掲論文 A0222 の続編。	IV・A・9
A0224	「産業合理化期」における企業会計の展開 (三・完)	茂木虎雄	76 巻 3 号 (1959 年 9 月)	上掲論文 A0222 と A0223 の続編。	IV・A・9
A0225	米国工業会計史の一齣—ヘンリー・ローランド研究によせて—	辻 厚生	76 巻 6 号 (1959 年 12 月)	アメリカの初期工業会計の特質について、Arnold の所説を基に考察。	V・P・7
A0226	西川孝治郎編『複製・パチョーリ簿記論』	黒澤 清	76 巻 6 号 (1959 年 12 月)	西川編『複製パチョーリ簿記論』の書評。	XVI・G・7 (→III・G・7)
A0227	米国会計人の横顔 (一)	中島省吾	76 巻 6 号 (1959 年 12 月)	当時のアメリカの著名会計学者への訪問記。	XV・P・9

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻号 (年月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0228	江州中井家帳合の法について	小倉栄一郎	77 巻 2 号 (1960 年 2 月)	わが国固有の簿記法として有名な江州中井家の「帳合の法」について、決算方法・帳簿組織等を中心に考究。	III・A・7
A0229	資本主義成立期における管理会計の源泉について	青木 茂	77 巻 3 号 (1960 年 3 月)	原価計算生成史について概観。	V・S・5 (VI・S・5)
A0230	ガーナー教授歓迎会	著者不詳	77 巻 3 号 (1960 年 3 月)	1960 年 2 月に来日した Garner の歓迎会の報告。	XVI・P・9
A0231	十七・八世紀の簿記事情について—デ・ラ・ポルトの帳簿とその組織を中心として—	小島男佐夫	77 巻 6 号 (1960 年 6 月)	de la Porte の簿記書について、ドイツ語訳に依拠して考察。	III・H・7
A0232	アラン・シャンドの墓	西川孝治郎	78 巻 2 号 (1960 年 8 月)	Shand の墓所発見の報告。	XVI・A・7 (→III・A・7)
A0233	V. E. ブラガと簿記	西川孝治郎	78 巻 5 号 (1960 年 11 月)	大蔵省造幣寮御雇い外国人 Braga の事績と資料を紹介。	III・A・7
A0234	V. E. ブラガと簿記講義案	西川孝治郎	78 巻 5 号 (1960 年 11 月)	大蔵省造幣寮御雇い外国人 Braga が行った講義案を紹介。	III・A・7
A0235	管理会計制度の発展について	小高泰雄	79 巻 2 号 (1961 年 2 月)	経済価値計算が管理会計に包含されることの是非を検討。	VI・A・9
A0236	わが国監査制度の過去と未来	坂野観司	79 巻 2 号 (1961 年 2 月)	明治期に遡ってわが国の監査制度をその起源から振り返り、さらに今後についても展望。	VII・A・8
A0237	決算と元帳の締切について—複式簿記発生史に関する一考察として—	小島男佐夫	79 巻 3 号 (1961 年 3 月)	決算と元帳の締切についてその歴史的展開過程を検討し、両者が決して当初から関連していたものではなく、株式会社などの生成とともにその結合が慣習化してきたことを指摘。	III・S・5
A0238	アメリカ会計制度の発達 (一)	青柳文司	79 巻 3 号 (1961 年 3 月)	アメリカ会計制度の発達について、19 世紀までを概観。	IV・P・7
A0239	フローレンス簿記の基本的特徴 (一)	泉谷勝美	79 巻 4 号 (1961 年 4 月)	フィレンツェ式簿記の特徴について、人名勘定を中心に考察。	III・G・4
A0240	二十世紀初頭までの間接費論の展開について	天野恭徳	79 巻 5 号 (1961 年 5 月)	19 世紀末から 20 世紀初頭までの間接費配賦理論について検討。	V・S・7
A0241	フローレンス簿記の基本的特徴 (二・完)	泉谷勝美	79 巻 5 号 (1961 年 5 月)	前掲論文 A0239 の続編。物財勘定、名目勘定のほか、損益計算制度に至るまでを解説。	III・G・4
A0242	小島男佐夫著『複式簿記発生史の研究』	茂木虎雄	79 巻 5 号 (1961 年 5 月)	小島著『複式簿記発生史の研究』の書評。	XVI・G・5 (→III・G・5)

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻号 (年月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0243	貸借対照表論史研究方法 の検討	浅羽二郎	79 巻 6 号 (1961 年 6 月)	貸借対照表論史の研究について、 宮上の研究方法を基に検討。	IV・K・8
A0244	アメリカ会計制度の発達 (二)	青柳文司	79 巻 6 号 (1961 年 6 月)	前掲論文 A0238 の続編。管理会計 制度についても言及。	IV・P・8 (VI・P・8)
A0245	アメリカ会計制度の発達 (三)	青柳文司	80 巻 1 号 (1961 年 7 月)	前掲論文 A0238 と A0244 の続編。 1930 年代の会計原則の制度化につ いて検討。	IV・P・9
A0246	フランスにおける勘定学 説の展開	鎌田信夫	80 巻 1 号 (1961 年 7 月)	18 世紀以降のフランスにおける勘 定学説の展開を Vlaeminck の著 書 (1956) を基に検討。	III・H・7
A0247	複式簿記展開過程の一考 察	白井佐敏	80 巻 5 号 (1961 年 11 月)	複式簿記の展開過程について概 観。	III・S・5
A0248	上野先生と貸借対照表論	諸井勝之助	81 巻 2 号 (1962 年 2 月)	上野の研究のうち貸借対照表論に ついて紹介。	XV・A・9
A0249	上野先生を偲ぶ	江村 稔	81 巻 2 号 (1962 年 2 月)	上野への追悼文。	XV・A・9
A0250	上野会計学の全貌	松本正信	81 巻 4 号 (1962 年 4 月)	上野の横顔について紹介。	XV・A・9
A0251	後入先出法の発展	渡邊 進	81 巻 5 号 (1962 年 5 月)	後入先出法の発展について、アメ リカ税法における小売棚卸後入先 出法とドル価値後入先出法を基に 考究。	IX・P・9
A0252	Lardner の減価償却論	中村萬次	81 巻 6 号 (1962 年 6 月)	Lardner の減価償却論について検 討。	IV・P・7
A0253	米国に簿記史家を訪ねて —デュー・ルーヴァとペラ ガロー	小島男佐夫	82 巻 1 号 (1962 年 7 月)	アメリカの会計史家 de Roover と Peragallo への訪問記。	XV・P・9
A0254	英国オランダに簿記史家 を訪ねて—ヤーメイ教授 とハーヴェ博士—	小島男佐夫	82 巻 2 号 (1962 年 8 月)	上掲論文 A0253 の続編。イギリス の会計史家 Yamey と、オランダ の会計史家 ten Have への訪問記。	XV・J・9 (XV・I・9)
A0255	会計学における新しい発 展	黒澤 清	82 巻 3 号 (1962 年 9 月)	会計学の現状と将来について展 望。	II・A・9
A0256	ベルギーに中世商人の跡 を訪ねて—アントワー プ・ブルージュを中心と して—	小島男佐夫	82 巻 3 号 (1962 年 9 月)	前掲論文 A0253 と A0254 の続編。 アントワープとブルージュへの会 計史探訪記。	XVI・I・9 (→III・I・5)
A0257	北伊太利の三都市を巡っ て—ミラノ・ジェノア・ ヴェニス—	小島男佐夫	82 巻 4 号 (1962 年 10 月)	前掲論文 A0253, A0254, A0256 の 続編。北イタリア諸都市への会計 史探訪記。	XVI・G・9 (→III・G・5)

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0258	フローレンスとその周辺を訪ねて—メリス教授を中心として—	小島男佐夫	82 巻 5 号 (1962 年 11 月)	前掲論文 A0253, A0254, A0256, A0257 の続編。フィレンツェ探訪と、イタリアの会計史家 Melis への訪問記。	XVI・G・9 (→III・G・5, XV・G・9)
A0259	会計学研究序説	井上 清	83 巻 3 号 (1963 年 3 月)	会計学の分科について歴史的に概観。	I・S・0
A0260	日本における会計教育の方法	片野一郎	83 巻 4 号 (1963 年 4 月)	アメリカにおけるセミナーでの日本の会計教育に関する報告の邦語訳。	XII・A・9
A0261	アメリカ会計学の原型	青柳文司	83 巻 5 号 (1963 年 5 月)	アメリカ会計学の原型を構成する「公会計・私会計」, 「財務会計・原価計算」などについて, 20 世紀初頭のビッグ・ビジネス誕生期に遡って考察。	IV・P・8 (V・P・8)
A0262	ウェディングトン簿記書—特殊仕訳帳の萌芽として—	小島男佐夫	83 巻 5 号 (1963 年 5 月)	Weddington の簿記書 (1567) について, 特殊仕訳帳生成の観点から検討。	III・J・7
A0263	財産法の近代的解釈	武田隆二	84 巻 1 号 (1963 年 7 月)	財産法の近代的解釈について, その起源に遡って考察。	IV・S・6
A0264	原価概念の正常化—米国原価計算史研究の一視角—	岡本 清	84 巻 2 号 (1963 年 8 月)	原価概念の正常化という観点から, アメリカの原価計算史について考究。	V・P・8
A0265	土岐政蔵先生を悼む	阪本安一	84 巻 3 号 (1963 年 9 月)	土岐への追悼文。	XV・A・9
A0266	和歌山時代の土岐政蔵先生を偲ぶ	本田利夫	84 巻 4 号 (1963 年 10 月)	土岐への追悼文。	XV・A・9
A0267	インバイン簿記書の研究	小島男佐夫	84 巻 6 号 (1963 年 12 月)	Ympyn 簿記書 (英語版) (1547) について考察。	III・J・7 (→III・I・7)
A0268	アメリカにおける企業会計原則の変化 (一)	宮上一男	85 巻 1 号 (1964 年 1 月)	アメリカにおける企業会計原則の変化を検討。	IV・P・9
A0269	原初的財産法から近代的財産法へ	武田隆二	85 巻 1 号 (1964 年 1 月)	ドイツ法を基に, 財産法の近代化を概観。	IV・K・8
A0270	ドイツ動態論の成立基盤	井上 清	85 巻 1 号 (1964 年 1 月)	Fischer の所説を基に, ドイツ動態論の成立基盤を考究。	IV・K・7
A0271	アメリカにおける企業会計原則の変化 (二)	宮上一男	85 巻 2 号 (1964 年 2 月)	前掲論文 A0268 の続編。	IV・P・9
A0272	アメリカにおける企業会計原則の変化 (三・完)	宮上一男	85 巻 3 号 (1964 年 3 月)	前掲論文 A0268, A0271 の続編。	IV・P・9
A0273	イギリスにおける限界原価計算の確立過程	中村萬次	85 巻 3 号 (1964 年 3 月)	イギリスにおける限界原価概念の確立過程を 19 世紀後半に遡って検討。	V・J・8

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0274	アメリカ動態論の成立過程	青柳文司	85 巻 4 号 (1964 年 4 月)	アメリカにおける動態論の成立過程について概観。	IV・P・9
A0275	泉谷勝美著『中世イタリア簿記史論』によせて	茂木虎雄	86 巻 1 号 (1964 年 7 月)	泉谷著『中世イタリア簿記史論』の書評。	XVI・G・5 (→III・G・5)
A0276	アメリカ会計学の体質	青柳文司	86 巻 5 号 (1964 年 11 月)	アメリカ会計学の特質について、19 世紀末まで遡って考察。	IV・P・8 (VI・P・8)
A0277	現代公企業の発達史に関する一試論	大島国雄	86 巻 6 号 (1964 年 12 月)	公企業の発達に関して概観。	X・S・8
A0278	「会計士の会計」の展開とその意義	辻 厚生	86 巻 6 号 (1964 年 12 月)	Hatfield と Webner の所説に関連して「会計士の会計」を検討し、「技術者の会計」との連携の重要性を指摘。	VI・P・7
A0279	アメリカにおける減価償却政策の変貌	中村萬次	87 巻 1 号 (1965 年 1 月)	1960 年代におけるアメリカの減価償却政策の変化を考察。	IV・P・9
A0280	機械化会計の問題構造とその歴史的展開	岸本英八郎	87 巻 2 号 (1965 年 2 月)	機械化会計の歴史的展開を概観。	XI・S・9
A0281	ダフォルネの『商人の鏡』に就いて	小島男佐夫	87 巻 5 号 (1965 年 5 月)	Dafforne 簿記書 (1635) について考察。	III・J・7
A0282	小島男佐夫著『簿記史論考』によせて	茂木虎雄	87 巻 6 号 (1965 年 6 月)	小島著『簿記史論考』の書評。	XVI・S・5 (→III・S・5)
A0283	リトルトン教授と会計史研究	白井佐敏	88 巻 1 号 (1965 年 7 月)	Littleton を訪問し、彼の会計史観について考究。	XV・P・9 (→I・P・9)
A0284	フランスにおける会計標準化の生成および発展 (一)	中村宣一郎	88 巻 3 号 (1965 年 9 月)	フランスのプラン・コンタブルの成立背景とその発展を紹介。	IV・H・9
A0285	米国「管理会計論」成立の一齣 (一) —ウォールウォース製造会社の事例研究によせて—	本田利夫	88 巻 4 号 (1965 年 10 月)	Walworth Manufacturing Company の事例を基に、アメリカ管理会計の成立について検討。	VI・P・8
A0286	フランスにおける会計標準化の生成および発展 (二・完)	中村宣一郎	88 巻 4 号 (1965 年 10 月)	前掲論文 A0284 の続編。	IV・H・9
A0287	米国「管理会計論」成立の一齣 (二・完) —ウォールウォース製造会社の事例研究によせて—	本田利夫	88 巻 5 号 (1965 年 11 月)	前掲論文 A0285 の続編。	VI・P・9
A0288	近代的思考方法による会計理論の照明—会計学の認識論的方法論の基礎・続編—	黒澤 清	89 巻 1 号 (1966 年 1 月)	畠中著『勘定学説研究』を再検討。	I・A・9

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻号 (年月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0289	日本簿記発達史の特徴	西川孝治郎	89 巻 1 号 (1966 年 1 月)	江戸時代から明治期に至るまでの西洋式簿記と日本帳合とを比較・検討。	III・A・7
A0290	英国初期簿記書に関する一考察—J. ピール『完全なる勘定の方法と様式』—	小島男佐夫	89 巻 1 号 (1966 年 1 月)	Peele の第一の簿記書 (1553) について考究。	III・J・7
A0291	イギリス式貸借対照表の原型	高寺貞男	89 巻 1 号 (1966 年 1 月)	イギリス式貸借対照表の原型として、ロンドン東インド会社やイングランド銀行の貸借対照表を考察。	IV・J・7 (IV・I・7)
A0292	中世イタリア簿記の特徴	泉谷勝美	89 巻 1 号 (1966 年 1 月)	13～15 世紀のイタリア商人の会計実践を社会的・経済的・経営的諸問題の面から検討。	III・H・4
A0293	パチョーリの故郷を訪ねて (I)	片岡義雄	89 巻 1 号 (1966 年 1 月)	Paciolo の故郷サン・セポルクロ (イタリア) を訪ねる旅の報告記。羽田からニューヨークまで。	XVI・S・9
A0294	近代的思考方法による会計理論の照明	黒澤 清	89 巻 2 号 (1966 年 2 月)	前掲論文 A0288 の続編。	I・A・9
A0295	パチョーリの故郷を訪ねて (II)	片岡義雄	89 巻 2 号 (1966 年 2 月)	前掲論文 A0293 の続編。ニューヨークからパリまで。	XVI・S・9
A0296	近代的思考方法による会計理論の照明	黒澤 清	89 巻 3 号 (1966 年 3 月)	前掲論文 A0288 と A0294 の続編。Holzer の公理的方法の考察。	I・K・9
A0297	パチョーリの故郷を訪ねて (III)	片岡義雄	89 巻 3 号 (1966 年 3 月)	前掲論文 A0293 と A0295 の続編。パリからサン・セポルクロまで。	XVI・S・9
A0298	近代的思考方法による会計理論の照明	黒澤 清	89 巻 4 号 (1966 年 4 月)	前掲論文 A0288, A0294, A0296 の続編。Holzer による公理的方法による勘定系統説を紹介。	I・K・9
A0299	M. R. レーマン教授の訃を悼む	木村和二郎 山上達人	89 巻 5 号 (1966 年 5 月)	Lehmann への追悼文。	XV・K・9
A0300	マッキンジーの「管理会計論」によせて—彼の周辺と背景— (一)	本田利夫	89 巻 6 号 (1966 年 6 月)	McKinsey の 1920 年以前の経歴と著作について紹介。	V・P・7
A0301	近代的思考方法による会計理論の証明	黒澤 清	89 巻 6 号 (1966 年 6 月)	前掲論文 A0288, A0294, A0296, A0298 の続編。Holzer による公理的方法による勘定学説批判を紹介。	I・K・9
A0302	ル・クルート教授とザイシャープ教授の訃を悼む	木村和二郎 山上達人	89 巻 6 号 (1966 年 6 月)	le Courte と Seischab への追悼文。	XV・K・9
A0303	マッキンジーの「管理会計論」によせて—彼の周辺と背景— (二・完)	本田利夫	90 巻 1 号 (1966 年 7 月)	前掲論文 A0300 の続編。McKinsey の 1920 年以降の経歴と著作の背景について検討。	V・P・9

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0304	元帳の締切り方法に関する一考察	小島男佐夫	90 巻 2 号 (1966 年 8 月)	勘定の締切と決算との関係について、イタリア、オランダ、イギリスなどの簿記書を中心に考察。	III・S・5
A0305	アメリカにおける会計監査の確立と発展—Walter A. Staub の所説を中心に—	大矢知浩司	90 巻 2 号 (1966 年 8 月)	Staub の所説を基に、企業合同運動期との関連から貸借対照表監査の生成確立について検討。	VII・P・8
A0306	ドイツにおける静的観勘定学説の展望	片岡義雄	90 巻 6 号 (1966 年 12 月)	Hügli と Schär の学説について考究。	III・K・8
A0307	独占体会計政策の底流	中村萬次	90 巻 6 号 (1966 年 12 月)	20 世紀への転換期のアメリカ独占確立期における会計政策を考察。	III・P・7
A0308	一二一年の会計史料を見て	井上 清	91 巻 2 号 (1967 年 2 月)	フィレンツェの銀行家の 1211 年の帳簿について解説。	III・G・4
A0309	動的会計論と現代会計学の関連—I. ミュンスターマンの所説を中心に—	浅羽二郎	91 巻 4 号 (1967 年 4 月)	Münstermann の所説に基づき、Schmalenbach 学説を批判的に考察。	IV・K・9
A0310	わが国固有の会計報告の類型	小倉栄一郎	91 巻 5 号 (1967 年 5 月)	中井家や鴻池家等の帳簿を比較・検討。	III・A・7
A0311	フランスにおける財務諸表公開制度の発展	青木 脩	91 巻 6 号 (1967 年 6 月)	1965 年 10 月 28 日第 65-968 命令と 1965 年 11 月 29 日第 65-999 命令を考究。	IV・I・9
A0312	一三四〇年の絹糸勘定を見て	井上 清	91 巻 6 号 (1967 年 6 月)	ジェノヴァ財務官の 1340 年の帳簿について検討。	III・G・4
A0313	予算統制成立史論序説	辻 厚生	92 巻 6 号 (1967 年 12 月)	20 世紀初頭の 20 年間における予算統制の生成発展過程について考察。	IV・P・7
A0314	アメリカ経済の発展と会計	後藤幸之助	92 巻 6 号 (1967 年 12 月)	Brundage の著書を基に、20 世紀におけるアメリカ経済の発展と会計学との関係について考究。	IV・P・8
A0315	一四〇〇年代の会計帳簿を見て (前)	井上 清	93 巻 1 号 (1968 年 1 月)	Solanzo 兄弟商会の帳簿について考察。	III・G・4
A0316	ペイトンと「序説」の会計公準論—会計公準論発展史上の意義—	新井清光	93 巻 2 号 (1968 年 2 月)	Paton の著作と、Paton=Littleton の共著との比較から、会計公準論を歴史的に検討。	IV・P・9 (II・P・9)
A0317	造幣寮簿記の研究	西川孝治郎	93 巻 3 号 (1968 年 3 月)	わが国における西洋簿記導入初期の造幣寮簿記を紹介。	III・A・7
A0318	パチョーリの「簿記論」とベニス式簿記	泉谷勝美	93 巻 3 号 (1968 年 3 月)	Paciolo の「簿記論」の特徴について、その他の著者との比較・検討。	III・G・7
A0319	パチョーリとステヒナー—損益計算の歴史的発展と会計史の体系の問題—	茂木虎雄	93 巻 3 号 (1968 年 3 月)	Paciolo と Stevin を取り上げ、会計史の三段階発展説を展開。	III・G・7 (III・I・7)

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0320	一四〇〇年代の会計帳簿を見て (後・完)	井上 清	93 巻 3 号 (1968 年 3 月)	前掲論文 A0315 の続編。	III・G・4
A0321	初期の製造間接費についての若干の考察	砂川洋幸	93 巻 4 号 (1968 年 4 月)	製造間接費の認識問題について、中世の工業会計に遡って検討。	V・S・5
A0322	久保田音二郎監修・平林喜博訳『ドイツ原価計算の発展』を読む	小島男佐夫	93 巻 4 号 (1968 年 4 月)	平林著『ドイツ原価計算の発展』の書評。	V・K・8
A0323	ピール簿記書の研究— <i>The Pathe waye</i> を中心として—	小島男佐夫	94 巻 4 号 (1968 年 10 月)	Peele の第二の簿記書 (1569) について検討。	III・J・7
A0324	日本の近代化と監査思想	守永誠治	94 巻 6 号 (1968 年 12 月)	監査制度の確立を文化史的観点から考察。	VII・A・8
A0325	一六七三年フランス商事勅令規定における商業帳簿並びに財産目録について (一)	岸 悦三	95 巻 1 号 (1969 年 1 月)	フランス商事王令 (1673) の規定に大きな影響を与えた Savary の簿記論 (1675) について検討。	III・H・7
A0326	一六七三年フランス商事勅令規定における商業帳簿並びに財産目録について (二・完)	岸 悦三	95 巻 3 号 (1969 年 3 月)	上掲論文 A0325 の続編。財産目録について考究。	IV・H・7
A0327	井上 清著『ヨーロッパ会計史』	茂木虎雄	95 巻 3 号 (1969 年 3 月)	井上著『ヨーロッパ会計史』の書評。	XVI・S・6 (→III・G・4, IX・K・7)
A0328	製品原価政策としての戦時加速償却	中村萬次	95 巻 6 号 (1969 年 6 月)	アメリカにおける戦時加速償却の問題について検討。	IX・P・8 (IV・P・8)
A0329	木村禎橘先生の監査教育論—追悼の辞によせて—	松本正信	96 巻 2 号 (1969 年 8 月)	木村 (禎橘) への追悼文。	XV・A・9
A0330	小高泰雄先生を悼む	高橋吉之助	96 巻 4 号 (1969 年 10 月)	小高への追悼文。	XV・A・9
A0331	ジョン・メリス簿記書の研究	小島男佐夫	96 巻 5 号 (1969 年 11 月)	Mellis 簿記書 (1588) について検討。	III・J・7
A0332	故伊藤正一教授追悼の記	片岡義雄	96 巻 5 号 (1969 年 11 月)	伊藤への追悼文。	XV・A・9
A0333	一六世紀フランス簿記書研究—サヴォンヌにみられる特質をめぐって—	岸 悦三	96 巻 6 号 (1969 年 12 月)	Savonne 簿記書について検討。	III・H・7
A0334	丹波康太郎先生急逝さる	青木倫太郎	96 巻 6 号 (1969 年 12 月)	丹波への追悼文。	XV・A・9
A0335	山下勝治教授を悼む	黒澤 清	97 巻 2 号 (1970 年 2 月)	山下への追悼文。	XV・A・9

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻号 (年月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0336	米国における大学会計基準の展開	中西 旭	97 巻 3 号 (1970 年 3 月)	1935 年に初めて公表されたアメリカの大学会計基準について、その後の展開を概観。	X・P・9
A0337	山下勝治博士の損益計算論―追悼の辞によせて―	松本正信	97 巻 3 号 (1970 年 3 月)	山下への追悼文。	XV・A・9
A0338	米国における予算統制制度の確立―マッキンシー・クエインタンスの史的意義とその検討―	辻 厚生	98 巻 1 号 (1970 年 7 月)	20 世紀初頭から第一次世界大戦終了時までの企業予算制度の定着過程を考究。	V・P・7
A0339	パチョーリを求めて	片岡泰彦	98 巻 1 号 (1970 年 7 月)	Paciolo の故郷サン・セポルクロを訪ねた旅行記。	XVI・G・9 (→III・G・7)
A0340	『造幣簿記之法』について (一) ―わが国最古の簿記文献	西川孝治郎	98 巻 1 号 (1970 年 7 月)	わが国における西洋簿記導入初期の写本『造幣簿記之法』を紹介。	III・A・7
A0341	佐々木吉郎博士を悼む	武田 孟	98 巻 1 号 (1970 年 7 月)	佐々木への追悼文。	XV・A・9
A0342	イギリスにおける初期鉄道業の見積原価比較	中村萬次	98 巻 2 号 (1970 年 8 月)	初期鉄道業における見積原価比較の資料である Walker の報告書 (1829) について考察。	V・J・7
A0343	『造幣簿記之法』について (二・完) ―わが国最古の簿記文献	西川孝治郎	98 巻 2 号 (1970 年 8 月)	前掲論文 A0340 の続編。	III・A・7
A0344	追悼の辞	黒澤 清	98 巻 2 号 (1970 年 8 月)	太田への追悼文。	XV・A・9
A0345	平井泰太郎先生の訃	市原季一	98 巻 2 号 (1970 年 8 月)	平井への追悼文。	XV・A・9
A0346	平井学説・その根源と展開	栗田真造	98 巻 4 号 (1970 年 10 月)	平井への追悼文。	XV・A・9
A0347	複式簿記生成発達史と現金収支記録	馬場克三	98 巻 6 号 (1970 年 12 月)	現金収支記録を重視する立場から、複式簿記の成立過程を再検討。	III・G・4
A0348	初期の資金計算書について	植野郁太	98 巻 6 号 (1970 年 12 月)	アメリカにおける資金計算書の初期形態としての 1920 年代のものと、それに影響を与えたとみられるイギリスの複会計制度について考究。	IV・P・8 (→IV・J・7)
A0349	日本会計学説史におけるコンステレーション―太田哲三先生追悼講演―	黒澤 清	99 巻 1 号 (1971 年 1 月)	太田への追悼文。	XV・A・9
A0350	評価論史における低価主義の位置	岡下 敏	99 巻 1 号 (1971 年 1 月)	原価主義から低価主義 (低価基準) への移行の原因を、フランスとドイツの法令を基に検討。	IV・H・7 (IV・K・7)

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0351	勘定記録の生成と「借方」 「貸方」	泉谷勝美	99 巻 2 号 (1971 年 2 月)	勘定記録の生成を中世イタリアの 資料を基に考察。	III・G・4
A0352	アメリカ独占成立期にお ける減価償却実務（一）	加藤盛弘	99 巻 2 号 (1971 年 2 月)	20 世紀への転換期のアメリカ独占 確立期における減価償却実務につ いて検討。	IV・P・7
A0353	アメリカ動的会計理論の 形成過程における資産評 価論の役割（一）	村瀬儀祐	99 巻 2 号 (1971 年 2 月)	1920 年代の会計実務を固定資産の 再評価と無額面株式制度の側面か ら考究。	IV・P・9
A0354	アメリカ独占成立期にお ける減価償却実務（二・ 完）	加藤盛弘	99 巻 3 号 (1971 年 3 月)	前掲論文 A0352 の続編。	IV・P・7
A0355	アメリカ動的会計理論の 形成過程における資産評 価論の役割（二・完）	村瀬儀祐	99 巻 3 号 (1971 年 3 月)	前掲論文 A0353 の続編。会計理論 の体系の変遷を Paton の資産評 価論を中心に検討。	IV・P・9
A0356	先駆者の業績	青木倫太郎	99 巻 4 号 (1971 年 4 月)	太田への追悼文。	XV・A・9
A0357	イギリスにおける初期鉄 道業の会計報告	中村萬次	99 巻 4 号 (1971 年 4 月)	イギリスにおける鉄道会計が会計 学の成立に及ぼした影響について 考究。	IV・J・7
A0358	「フランス商事法令」に おける計算規定の萌芽	徐 龍達	99 巻 6 号 (1971 年 6 月)	フランス商事法令の計算規定と、 これに大きな影響を与えたとされ る Savary の著書との比較・検討。	IV・H・7 (→III・H・7)
A0359	アメリカ会計理論の展開	笹淵文男	100 巻 5 号 (1971 年 11 月)	アメリカにおける財務会計の基本 的用語に対する見解を基に、会計 理論の発展を概観。	IV・P・9
A0360	技術者の会計の終結	辻 厚生	100 巻 5 号 (1971 年 11 月)	Evans の著書を検討し、技術者の 会計の終結を指摘。	VI・P・9
A0361	韓国固有簿記研究の曙光 —尹根鎬教授『四介松都 治簿法研究』によせて—	徐 龍達	100 巻 6 号 (1971 年 12 月)	韓国固有の簿記法とされる四介松 都治簿法について考察。	III・C・7
A0362	グラマトイスの簿記法— ドイツ最古の簿記書をめ ぐって—	井上 清	100 巻 6 号 (1971 年 12 月)	ドイツ最古の簿記書とされる Grammateus (Schreiber) の著作 (1518) について検討。	III・K・7
A0363	わが国会計史研究につい て—和式帳合の二重構造 —	西川孝治郎	100 巻 6 号 (1971 年 12 月)	わが国の会計史研究について概 観。	III・A・7
A0364	米国監査制度における内 部統制の萌芽	小西一正	100 巻 6 号 (1971 年 12 月)	19 世紀後半以降のアメリカにおけ る内部統制について概観。	VII・P・8
A0365	韓国固有簿記の理論と構 造—四介松都治簿法研 究・その一—	尹 根鎬	101 巻 4 号 (1972 年 4 月)	韓国固有の簿記法とされる四介松 都治簿法について考究。	III・C・7

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0366	韓国固有簿記の起源—四 介松都治簿法研究・その 二—	尹 根鎬	101 巻 5 号 (1972 年 5 月)	上掲論文 A0365 の続編。	III・C・7
A0367	『造幣簿記法』発見—わ が国最古の簿記文献—	西川孝治郎	101 巻 6 号 (1972 年 6 月)	1971 年に発見されたわが国最古の 簿記文献『造幣簿記法』について 紹介。	III・A・7
A0368	イギリス銀行業における 経理公開および監査制度 の形成	桑原幹夫	102 巻 2 号 (1972 年 8 月)	19 世紀後半のイギリスの銀行にお ける経理公開と、監査制度の役割 を検討。	IV・J・7 (VII・J・7)
A0369	ハットフィールド『近代 会計学』の分析視角	加藤盛弘	102 巻 2 号 (1972 年 8 月)	Hatfield 学説の歴史的意義につい て考察。	IV・P・8
A0370	アメリカ税務会計の会計 史的特質	佐橋義金	103 巻 4 号 (1973 年 4 月)	アメリカ税務会計の特質につい て、20 世紀初頭まで遡って検討。	IX・P・8
A0371	ルカ・パチョリ生誕地遺 跡	中西 旭	103 巻 5 号 (1973 年 5 月)	Paciolo の故郷サン・セポルクロへ の訪問記。	XVI・G・9 (→III・G・7)
A0372	嗚呼木村和三郎先生	辻 厚生	103 巻 5 号 (1973 年 5 月)	木村（和三郎）への追悼文。	XV・A・9
A0373	田中藤一郎先生を悼む	後藤幸之助	103 巻 6 号 (1973 年 6 月)	田中への追悼文。	XV・A・9
A0374	小島男佐夫著『簿記史』 について	西川孝治郎	104 巻 1 号 (1973 年 7 月)	小島著『簿記史』の書評。	XVI・S・5 (→III・S・5)
A0375	シュマーレンバッハ学説 の体系化—生誕一〇〇年 を記念して—	斉藤隆夫	104 巻 2 号 (1973 年 8 月)	生誕 100 年を迎えた Schmalenbach の学説を概観。	IV・K・8
A0376	ドイツにおける複式簿記 生成の背景	岡下 敏	104 巻 2 号 (1973 年 8 月)	ドイツにおける 14 世紀初頭の簿 記書について検討。	III・K・4
A0377	ハットフィールド『近代 会計学』の歴史的役割	加藤盛弘	104 巻 3 号 (1973 年 9 月)	前掲論文 A0369 の続編。Hatfield 学 説の歴史的意義について考察。	IV・P・8
A0378	ヤーメイ教授との懇談会	黒澤 清	104 巻 5 号 (1973 年 11 月)	著名な会計史家であるロンドン大 学（L S E）の Yamey との懇談 会を記録。	XVI・S・9 (→I・S・9)
A0379	独占資本の形成と配当可 能利益の計算	内川菊義	104 巻 6 号 (1973 年 12 月)	配当可能利益に関するアメリカの 規定を歴史的に検討。	IV・P・8
A0380	一六世紀フローレンスの 毛織物業会計について	岸 悦三	105 巻 1 号 (1974 年 1 月)	de Roover の所説を基に、16 世紀 フィレンツェの工業会計について 考究。	III・G・7 (V・G・7)
A0381	勘定形式の原型とバラン ス	安宅文雄	105 巻 2 号 (1974 年 2 月)	「バランス」概念について、多面 的に検討。	III・S・0
A0382	わが国固有の会計法の発 達と西洋式簿記法	小倉栄一郎	105 巻 3 号 (1974 年 3 月)	中井家における「帳合の法」につ いて検討。	III・A・7

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0383	監査役制度の過去と将来	久保田音二郎	105 巻 3 号 (1974 年 3 月)	明治以降の監査役制度を概観。	III・A・8
A0384	日本簿記史上の明治六年の意義	西川孝治郎	105 巻 3 号 (1974 年 3 月)	わが国に本格的に西洋簿記法が紹介された 1873(明治 6)年の簿記史上の意義とその前後の事情を紹介。	III・A・7
A0385	日本財務諸表制度の展開—明治初年より第二次世界大戦にいたる路標—	片野一郎	105 巻 3 号 (1974 年 3 月)	1872 年に設けられた「国立銀行条例」中の三つの会計規定以降、第二次世界大戦前に至るまでのわが国の財務諸表制度の展開過程を概観。	IV・A・8
A0386	わが国会計制度百年のあゆみ	黒澤 清	105 巻 3 号 (1974 年 3 月)	わが国の会計制度 100 年を回顧し、特に商法会計規定の歴史的発展に対する「ロessler 草案」の重要性を指摘。	IV・A・8
A0387	再びルカ・パチョリの遺跡を訪ねて	中西 旭	105 巻 4 号 (1974 年 4 月)	前掲論文 A0371 の続編。	XVI・G・9 (→III・G・7)
A0388	故 A. C. リトルトン教授を悼む	片野一郎	105 巻 4 号 (1974 年 4 月)	Littleton への追悼文。	XV・P・9
A0389	複式簿記発祥地イタリアを訪ねて (一)	泉谷勝美	106 巻 1 号 (1974 年 7 月)	イタリアの会計史家 Melis の思い出を記述。	XV・G・9
A0390	テオドル・ベステ教授を悼む	斉藤隆夫	106 巻 1 号 (1974 年 7 月)	Beste への追悼文。	XV・K・9
A0391	ドイツ会計史の研究領域	岡下 敏	106 巻 2 号 (1974 年 8 月)	ドイツの会計史研究は、12 世紀にまで遡って行なわれるべきと指摘。	III・K・5
A0392	複式簿記発祥地イタリアを訪ねて (二)	泉谷勝美	106 巻 2 号 (1974 年 8 月)	前掲論文 A0389 の続編。フィレンツェの帳簿を紹介。	III・G・4
A0393	工事進行基準の形成・受容過程	高寺貞男	106 巻 3 号 (1974 年 9 月)	工事進行基準の形成・受容過程について、1900 年代から 1920 年代までのアメリカの会計文献を基に分析。	IV・P・8
A0394	複式簿記発祥地イタリアを訪ねて (三・完)	泉谷勝美	106 巻 3 号 (1974 年 9 月)	前掲論文 A0389 と A0392 の続編。プラートへの訪問記。	XVI・G・9 (→III・G・4)
A0395	損益計算書の出現 (一)—C. D. ブラウンの会計思想史的研究—	酒井文雄	106 巻 5 号 (1974 年 11 月)	Brown の所説を基に、損益計算書の出現を歴史的に考察。	IV・P・8
A0396	宮上一男編『近代会計学の発展』(I・II)	佐藤博明	106 巻 5 号 (1974 年 11 月)	宮上編著『近代会計学の発展』(I・II) の書評。	XVI・K・8 (XVI・P・8) (→N・K・8, N・P・8)

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻号 (年月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0397	損益計算書の出現 (二) —C. D. ブラウンの会計思想史的研究—	酒井文雄	106 巻 6 号 (1974 年 12 月)	前掲論文 A0395 の続編。	IV・P・8
A0398	The State of Modern Accounting History	Richard H. Homburger	107 巻 3 号 (1975 年 3 月)	アメリカ会計学会 (AAA) の会計史委員会の調査報告を担当した Homburger の寄稿文 (英語)。	I・P・9
A0399	ハムバーガー教授の寄稿文について	小島男佐夫	107 巻 3 号 (1975 年 3 月)	上掲論文 A0398 の紹介。	XVI・P・9
A0400	日下部與市教授の死を悼む	染谷恭次郎	107 巻 3 号 (1975 年 3 月)	日下部への追悼文。	XV・A・9
A0401	日本会計文献目録について	西川孝治郎	107 巻 4 号 (1975 年 4 月)	会計文献目録作成への期待と希望を表明。	XVI・A・9
A0402	減価償却の生成史的考察 (一) —フランスの文献を中心に—	森川八州男	107 巻 5 号 (1975 年 5 月)	減価償却の生成・確立過程について, 19 世紀フランスの Payen その他の著作から検討。	IV・H・7
A0403	一九世紀におけるイギリス監査業務の変遷過程	桑原幹夫	107 巻 5 号 (1975 年 5 月)	19 世紀イギリスにおける監査業務の変遷過程を考察。	VII・J・7
A0404	減価償却の生成史的考察 (二・完) —フランスの文献を中心に—	森川八州男	107 巻 5 号 (1975 年 5 月)	前掲論文 A0402 の続編。	IV・H・7
A0405	企業実体理論の生成—ハットフィールドとペイトン—	白井佐敏	107 巻 6 号 (1975 年 6 月)	Hatfield と Paton を比較・検討し, 両者の会計思考変化の歴史的意義について考察。	IV・P・8
A0406	米国監査における内部統制の展開	小西一正	108 巻 2 号 (1975 年 8 月)	前掲論文 A0364 の続編。1890 年代以降のアメリカ経済の発展と監査における内部統制の展開過程を分析。	VII・P・8
A0407	岡田誠一氏訃報	著者不詳	108 巻 2 号 (1975 年 8 月)	岡田の訃報。	XV・A・9
A0408	財務諸表公開原理の現実性と「論理性」 (一)	津守常弘	108 巻 3 号 (1975 年 9 月)	1920 年代における資本会計を中心とした企業会計実務の特徴と公開における意義について検討。	IV・P・9
A0409	Schär, J.F. のドイツ初期原価計算的思考について	林 良治	108 巻 5 号 (1975 年 11 月)	Schär の原価計算について検討。	V・K・7
A0410	シェアーの初期著作と勘定学説についての一考察 (一)	矢部忠保	108 巻 5 号 (1975 年 11 月)	Schär の初期の著作を考察。	III・K・7
A0411	岡田誠一先生を追悼する	田中章義	108 巻 5 号 (1975 年 11 月)	岡田への追悼文。	XV・A・9
A0412	会計学名誉ホール委員会のこと	著者不詳	108 巻 5 号 (1975 年 11 月)	Accounting Hall of Fame の委員会に関する記事。	XVI・P・9 (→XV・P・8)

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0413	シェアーの初期著作と勘定学説についての一考察 (二・完)	矢部忠保	108 巻 6 号 (1975 年 12 月)	前掲論文 A0410 の続編。	III・K・7
A0414	Schär, J.F., 「簿記及び貸借対照表第五版」(1922) に基づく会計偽装 (Bilanzverschleierung) の概念について	林 良治	109 巻 1 号 (1976 年 1 月)	Schär の貸借対照表論から、粉飾会計とは異なる「会計偽装」という概念を説明し、今日という会計政策論の先駆的形態を論述。	IV・K・8
A0415	近代的複式簿記の二つのアンチノミーについて	千葉準一	109 巻 1 号 (1976 年 1 月)	複式簿記の観点から、「資本」に内在するさまざまな問題点を指摘し、資本勘定の性格を規定・整理。	III・S・8
A0416	財務諸表公開原理の現実性と「論理性」(二・完)	津守常弘	109 巻 2 号 (1976 年 2 月)	前掲論文 A0408 の続編。	IV・P・9
A0417	アメリカ合衆国における会計原則の生成とその問題点	酒井勲二	109 巻 2 号 (1976 年 2 月)	1920～30 年代からの会計専門職業による会計原則生成の過程を論述。	IV・P・9
A0418	小島男佐夫編著『簿記史研究』	茂木虎雄	109 巻 2 号 (1976 年 2 月)	小島著『簿記史研究』の書評。	XVI・S・5 (→III・S・5)
A0419	日本会計学発展史に関する一つの試み (一) —会計学にとってパラダイム変革は可能であるか—	黒澤 清	109 巻 3 号 (1976 年 3 月)	会計学の発展とは何かという問題について、Kuhn の「パラダイム」の理論を用いて考究。	I・A・8
A0420	ヴィルモウスキーの減価償却論	渡辺陽一	109 巻 4 号 (1976 年 4 月)	動態論者である v. Wilmowski の 19 世紀末の文献を基に、固定資産に関する原価配分思考を検討。	IV・K・7
A0421	日本会計学発展史に関する一つの試み (二) —会計学にとってパラダイム変革は可能であるか—	黒澤 清	109 巻 4 号 (1976 年 4 月)	前掲論文 A0419 の続編。	I・A・8
A0422	十三世紀末トスカーナの簿記	泉谷勝美	109 巻 4 号 (1976 年 4 月)	13 世紀末における名目勘定、資本主勘定、現金出納記録等に関する諸問題を史料考証的に考察。	III・G・4
A0423	『銀行簿記精法』の財務表原本	西川孝治郎	109 巻 4 号 (1976 年 4 月)	Shand の『銀行簿記精法』のはじめに記載されている香港上海銀行の財務諸表の原本を入手したことの報告。	XVI・A・7 (→IV・A・7)
A0424	日本会計学発展史に関する一つの試み (三) —会計学にとってパラダイム変革は可能であるか—	黒澤 清	109 巻 5 号 (1976 年 5 月)	前掲論文 A0419 と A0421 の続編。	I・A・8

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0425	シュヴァルツの簿記法 (一)	井上 清	109 巻 6 号 (1976 年 6 月)	Schwarz の生涯と著作を、16 世紀 当時のアウグスブルクの富商であ る Fugger 家と関連づけて考究。	III・K・7
A0426	コリンズの簿記書	小島男佐夫	110 巻 1 号 (1976 年 7 月)	17 世紀後半の代表的な英語簿記書 である Collins の簿記書を検討 し、当時の商人の取引活動との関 係について考察。	III・J・7
A0427	シュヴァルツの簿記法 (二・完)	井上 清	110 巻 1 号 (1976 年 7 月)	前掲論文 A0425 の続編。Schwarz の 自伝および簿記に関連した手記を 紹介。	III・K・7
A0428	国際会計学史学会開催の こと	著者不詳	110 巻 1 号 (1976 年 7 月)	国際会計学史学会 (World Congress of Accounting Historians) の第二回 会議がアトランタで開催されるこ とや、日本からの参加予定者につ いて記述。	XVI・S・9
A0429	企業会計の発展と日本会 計研究学会の役割	黒澤 清	110 巻 2 号 (1976 年 8 月)	パラダイム観に基づき日本会計学 の発展を時代区分し、日本会計研 究学会の役割について論述。	I・A・8
A0430	シュヴァルツ簿記の目的	岡下 敏	110 巻 2 号 (1976 年 8 月)	Schwarz の簿記論 (1516) の解説 と、その著書の記帳目的が損益計 算ではなく、債権・債務の表示に あったことを指摘。	III・K・7
A0431	J. F. シェアの勘定理論 —その発展段階的考察—	安平昭二	110 巻 2 号 (1976 年 8 月)	Schär の初期・中期・後期それぞ れの時期における勘定理論の特徴 について考究。	III・K・7
A0432	『公認会計士制度二十五 年史』	青木茂男	110 巻 4 号 (1976 年 10 月)	公認会計士制度の前史、沿革、会 計制度、および、監査制度の進展、 さらに、日本公認会計士協会の歴 史と活動について記述。	XIII・A・9
A0433	今井忍先生死去	新井益太郎	110 巻 4 号 (1976 年 10 月)	今井への追悼文。	XV・A・9
A0434	商法会計に於ける債権者 保護重視の系譜	安藤英義	110 巻 5 号 (1976 年 11 月)	フランスとドイツを中心とした商 法会計における三つの系譜から成 り立つ債権者保護思考を、それぞ れの起源から展開に至るまでを論 述。	IV・K・8 (IV・H・8)
A0435	会計思想史におけるパラ ダイム変革	黒澤 清	110 巻 6 号 (1976 年 12 月)	近代会計の会計思想史を Kuhn の パラダイム概念を用いて四つの要 素に分類。	I・S・8

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻号 (年月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0436	三つの簿記書について	小島男佐夫	110 巻 6 号 (1976 年 12 月)	Ympyn 簿記書 (英語版) と, Paciolo の <i>Summa</i> (初版), Weddington の簿記書について検討。	III・J・7 (III・G・7)
A0437	第二回会計学史学国際会議の記	西川孝治郎	110 巻 6 号 (1976 年 12 月)	第二回会計学史学国際会議での報告者のリストや大会会場の雰囲気などの報告。	XVI・S・9
A0438	無額面株式の生成要因をめぐる諸問題	松原一泰	111 巻 1 号 (1977 年 1 月)	額面株式の割引発行, 水割株の出現とその問題など, 無額面株式が法制化される前からその後までの特徴について論述。	IV・P・8
A0439	B・S・ヤーメイ, 小島男佐夫共編著『復刻版・(英語版) インピン簿記書』	茂木虎雄	111 巻 1 号 (1977 年 1 月)	『復刻版・(英語版) インピン簿記書』が単なる復刻版ではなく, 研究書であることを指摘。	XVI・J・7 (→III・J・7)
A0440	「四介松都治簿法」の東洋思想的根源	尹 根鎬	111 巻 1 号 (1977 年 1 月)	韓国固有の簿記法である「四介松都治簿法」の東洋思想的根源を究明し, 中国ではなく韓国において創始された理由について論述。	III・C・7
A0441	会計の社会統制機構序説—アメリカ近代会計をめぐって—	今福愛志	111 巻 4 号 (1977 年 4 月)	1930 年から 40 年代に形成されたアメリカ近代会計について, 会社の社会統制機構の変容の観点から考察。	IV・P・9
A0442	会計学史学会の機関誌創刊—開かれたる学問研究の場—	西川孝治郎	111 巻 4 号 (1977 年 4 月)	アメリカの会計史学会 (Academy of Accounting Historians) の機関誌の創刊と学会の活動を説明。	XVI・P・9 (→I・P・9)
A0443	損益分岐点分析と直接原価計算の発展 (一)	小林健吾	111 巻 5 号 (1977 年 5 月)	損益分岐点分析の生成と発展を, 20 世紀初頭から 1930 年代までの論者の所説を用いて紹介。	VI・P・8
A0444	損益分岐点分析と直接原価計算の発展 (二・完)	小林健吾	111 巻 6 号 (1977 年 6 月)	上掲論文 A0443 の続編。	VI・P・8
A0445	シュバルツ簿記の <i>Schuldbuch</i> について	岡下 敏	111 巻 6 号 (1977 年 6 月)	Schwarz の翻刻版にもとづいて帳簿組織, 勘定科目, 帳簿締切などについて記述。	III・K・7
A0446	『銀行簿記精法』財務表原本発見報告	西川孝治郎	111 巻 6 号 (1977 年 6 月)	Shand や『銀行簿記精法』における財務表の地位, 原本の詳細について論述。	III・A・7
A0447	日本公認会計士協会『会計・監査史料』	青木茂男	111 巻 6 号 (1977 年 6 月)	日本公認会計士協会による 25 年史として発刊された『会計・監査史料』の書評。	XVI・A・9 (→VII・A・9)

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0448	法会計学の形成原理(一) —フリードリッヒ・シェアーとルードルフ・フィッシャー—法会計学と経済会計学との間 (五)	黒澤 清	112 巻 1 号 (1977 年 7 月)	法会計学の形成に貢献した Schär と Fischer の会計学説を比較し、資本等式や貸借対照表などについて考察。	IV・K・7
A0449	損益勘定の生成	泉谷勝美	112 巻 1 号 (1977 年 7 月)	14 世紀前半の del Bene 商会の帳簿を基に、損益勘定における実務を中心にその決算会計を考究。	III・G・4
A0450	法会計学の形成原理(二) —フリードリッヒ・シェアーとルードルフ・フィッシャー—法会計学と経済会計学との間 (六)	黒澤 清	112 巻 2 号 (1977 年 8 月)	Schär よりも Fischer に重点を置いて、財産評価問題や期間損益計算の問題について検討。	IV・K・7
A0451	J・F・シェアーの足跡を追って (一)	安平昭二	112 巻 4 号 (1977 年 10 月)	Schär の生い立ちや教職時代などについて詳細に検討。	XV・K・7
A0452	J・F・シェアーの足跡を追って (二)	安平昭二	112 巻 5 号 (1977 年 11 月)	上掲論文 A0451 の続編。	XV・K・7
A0453	渡邊進先生を悼む	武田隆二	112 巻 5 号 (1977 年 11 月)	渡邊への追悼文。	XV・A・9
A0454	アメリカに於ける株式配当の理論と実務 (一)	松原一泰	112 巻 6 号 (1977 年 12 月)	1920 年代の株式配当に関する最高裁判所判決や無額面株式の発行による株式発行について考察。	IV・P・9
A0455	J・F・シェアーの足跡を追って (三・完)	安平昭二	112 巻 6 号 (1977 年 12 月)	前掲論文 A0451 と A0452 の続編。	XV・K・7
A0456	中山隆祐博士の死を悼む	山邊六郎	112 巻 6 号 (1977 年 12 月)	中山への追悼文。	XV・A・9
A0457	シュバルツ簿記の商品勘定について	岡下 敏	113 巻 1 号 (1978 年 1 月)	Schwarz 簿記書における商品勘定の計算例示について、債権・債務の表示と損益計算の関係から考察。	III・K・7
A0458	アメリカに於ける株式配当の理論と実務 (二・完)	松原一泰	113 巻 2 号 (1978 年 2 月)	前掲論文 A0454 の続編。1940～50 年代における株式配当の役割を利益留保や利害調整の観点から考察。	IV・P・9
A0459	三人の簿記史家—フォスター、ブラウン、ムレイ—	小島男佐夫	113 巻 2 号 (1978 年 2 月)	アメリカの会計史家 Foster, および、イギリスの会計史家 Brown と Murray の生涯を、簿記会計史を中心に検討。	XV・P・7 (XV・J・7) (→III・P・7, III・J・7)

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻号 (年月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0460	ドイツ簿記とイタリア簿記—シュヴァイカーの簿記書を中心に—	白井佐敏	113 巻 2 号 (1978 年 2 月)	1549 年の Schweicker の簿記書を中心に、ドイツ簿記に対するイタリア簿記の影響とその限界について考究。	III・K・7
A0461	「配分」論理導入と減価償却の拡大—ウィルモウスキー「減価償却」(1895 年) の場合—	松本 剛	113 巻 2 号 (1978 年 2 月)	v. Wilmowski が減価償却論において「配分」論理を導入した意図と、当時の所得税法との関連について検討。	IV・K・7
A0462	米国財務諸表監査の技術体系と形成過程	山浦久司	113 巻 2 号 (1978 年 2 月)	20 世紀前後の財務諸表監査手続の体系の形成に至る過程を示し、貸借対照表監査の背後にある論理について考察。	VII・P・7
A0463	不破貞春先生を偲んで	飯野利夫	113 巻 2 号 (1978 年 2 月)	不破への追悼文。	XV・A・9
A0464	イギリス会社経理公開制度の変遷過程	桑原幹夫	113 巻 4 号 (1978 年 4 月)	19 世紀後半から 1940 年代に至るまでのイギリスの会社経理公開制度について、さまざまな文献を用いて検討。	IV・J・8
A0465	ルカ・パチョリのスムマと簿記論	本田耕一	113 巻 5 号 (1978 年 5 月)	Paciolo の Summa の内容や、そこで示されている「簿記論」の特徴について検討。	III・G・7
A0466	カール・ハックス先生の訃	市原季一	113 巻 5 号 (1978 年 5 月)	Hax への追悼文。	XV・K・9
A0467	海野力太郎訳『簿記学起原考』の研究	西川孝治郎	113 巻 6 号 (1978 年 6 月)	日本で最初に会計史（特に簿記の歴史）を取り上げた著作である海野『簿記学起原考』(1856) について、他の文献との特異性やその原資料などについて検討。	III・A・7
A0468	代理人簿記論の展開 (一)	岸 悦三	114 巻 1 号 (1978 年 7 月)	古代ローマから中世に至るまでの代理人簿記の生成とその背景について考察。	III・S・2
A0469	フィオリーノ・ドーロとイン・フィオリーノ	泉谷勝美	114 巻 1 号 (1978 年 7 月)	13 世紀末以降のイタリアの帳簿資料から、勘定における金額欄の生成と貨幣価値変動における金額の記載について解説。	III・G・4
A0470	代理人簿記論の展開 (二・完)	岸 悦三	114 巻 2 号 (1978 年 8 月)	前掲論文 A0468 の続編。代理人簿記論の先駆者と位置づけられる Cardano や Mennher, Stevin について考察。	III・S・7
A0471	森川八州男著『フランス会計発達史論』	中村宣一朗	114 巻 4 号 (1978 年 10 月)	森川著『フランス会計発達史論』の書評。	XVI・H・5 (→N・H・5)

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0472	一九世紀の減価償却事情	清水宗一	114 巻 5 号 (1978 年 11 月)	19 世紀のアメリカとイギリスにおける減価償却に関する考察を行い、減価償却の目的が財産計算目的の手段であったことを考究。	IV・P・7 (IV・J・7)
A0473	小島男佐夫著『会計史資料研究』	茂木虎雄	114 巻 6 号 (1978 年 12 月)	小島著『会計史資料研究』の書評。	XVI・S・5 (→III・S・5)
A0474	損益表・残高表の展開	渡邊 泉	114 巻 6 号 (1978 年 12 月)	18 世紀イギリスの簿記書に登場する損益表と残高表の意義を、Mac-Ghie, Malcolm, Mair, Hamilton の所説を用いて検討。	III・J・7
A0475	ルカ・パチョリ生誕地からの招待—サンセポルクロ市学術賞の受領—	中西 旭	115 巻 1 号 (1979 年 1 月)	Paciolo 研究に対する学術賞として、彼の誕生地サン・セポルクロから招待されたときの旅行記。	XVI・G・9
A0476	フッガー家の会計諸表 (一)	片岡泰彦	115 巻 3 号 (1979 年 3 月)	1500 年代前半における Fugger 家の会計諸表として、財産目録、貸借対照表、損益計算書を考究。	IV・K・7
A0477	西洋簿記導入史の研究	西川孝治郎	115 巻 4 号 (1979 年 4 月)	19 世紀前半からの日本への西洋簿記導入に関連して、商業学校や神戸商業講習所などにおける簿記教授法について検討。	III・A・7
A0478	ブレイ教授追悼の記	合崎堅二	115 巻 4 号 (1979 年 4 月)	Bray への追悼文。	XV・J・9
A0479	米国租税判例における課税所得概念—その変遷をめぐる試論—	辻山栄子	115 巻 5 号 (1979 年 5 月)	ドイツとアメリカにおける所得概念について解説し、20 世紀初頭のアメリカ租税判例を中心に所得概念の変遷について検討。	IV・P・8
A0480	出資者の為の分配利益計算規定への展開—商法会計に於ける出資者保護の一系譜—	安藤英義	115 巻 6 号 (1979 年 6 月)	19 世紀のドイツ商法と株式法の検討を中心に、出資者保護のための分配可能利益計算の規定が既に重視されていたことを指摘。	IV・K・8
A0481	フッガー家の会計諸表 (二・完)	片岡泰彦	115 巻 6 号 (1979 年 6 月)	前掲論文 A0476 の続編。	IV・K・7
A0482	「正規の簿記の諸原則」の史的展開	遠藤一久	116 巻 1 号 (1979 年 7 月)	「正規の簿記の諸原則」の史的展開を、Freericks の著作 (1969) を基に検討。	IV・K・8
A0483	宮上一男編『シュマーレンバッハ研究』	斉藤隆夫	116 巻 1 号 (1979 年 7 月)	宮上編著『シュマーレバッハ研究』の書評。	XVI・K・8 (→IV・K・8)
A0484	ルカ・パチョリ逝去の時点—一五〇七年六月一九日—	中西 旭	116 巻 2 号 (1979 年 8 月)	文献に基づく Paciolo の逝去した時点に関する記述。	XV・G・7

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0485	明治・大正期三菱造船所の原価計算—その導入の背景と概要—	山下正喜	116 巻 3 号 (1979 年 9 月)	三菱造船所が創設された 1894 年から、原価計算において間接費の配賦基準に機械運転時間法を採用した 1917 年までを考察。	V・A・7
A0486	久保田音二郎先生を悼む	高田正淳	116 巻 3 号 (1979 年 9 月)	久保田への追悼文。	XV・A・9
A0487	企業会計原則三十周年	著者不詳	116 巻 3 号 (1979 年 9 月)	「企業会計原則」公表当時の状況に関する解説。	XVI・A・9 (→IV・A・9)
A0488	複式簿記と損益計算—ヤーメイ教授の所説に寄せて—	白井佐敏	116 巻 4 号 (1979 年 10 月)	Yamey の論文 (1949) を基に、複式簿記の損益計算機能について検討を行い、16 世紀のヨーロッパ会計史の意義について考察。	III・S・7
A0489	商品勘定の生成	泉谷勝美	116 巻 4 号 (1979 年 10 月)	13～14 世紀のイタリアにおける商品勘定や商品売買損益に関する実務について、現存する資料を中心に検討。	III・G・4
A0490	三菱製鉄所の工業会計—明治一七年の史料による—	山下正喜	116 巻 4 号 (1979 年 10 月)	1880 年代を中心とした三菱製鉄所での工業会計について、当時の会計史料を基に考察。	V・A・7
A0491	ディナミッシェ・ビランツの生成——一八六一年のドイツ一般商法典について—	土方 久	116 巻 5 号 (1979 年 11 月)	ドイツ普通商法典 (1861) 前後における貸借対照表論を跡づけ、ディナミッシェ・ビランツの特徴と限界を考究。	IV・K・7
A0492	財思考の発現形態—所得源泉説と複会計制の生成的背景—	川端保至	116 巻 6 号 (1979 年 12 月)	貨幣計算前に見られる財計算・財思考を、18～19 世紀の所得概念や複会計制と関連させながら論述。	IV・K・8 (IV・J・8)
A0493	コトルリ簿記論研究	岸 悦三	117 巻 3 号 (1980 年 3 月)	Paciolo の「簿記論」(1494) の出版よりも先んじて 1458 年に脱稿した Cotrugli の簿記論を検討。	III・G・7
A0494	南ドイツ会計の歴史を求めて	片岡泰彦	117 巻 3 号 (1980 年 3 月)	14～16 世紀の Fugger 家など、南ドイツ商人の会計帳簿の調査と研究に関する論述。	III・K・5
A0495	イギリスにおける発起人利得とそのディスクロージャーについて	桑原幹夫	117 巻 4 号 (1980 年 4 月)	20 世紀初頭のイギリスにおける発起人利得の状況とそのディスクロージャーの意味を当時の投資信託会社を例に考察。	IV・J・7
A0496	シュバルツ簿記書の第二分冊—その形式と期首の記入—	岡下 敏	117 巻 6 号 (1980 年 6 月)	Schwarz 簿記書の第二分冊における仕訳帳、勘定口座への転記、および、第一分冊との違いについて検討。	III・K・7

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0497	試査の系譜と試査を支える諸要因 (一)	鳥羽至英	117 巻 6 号 (1980 年 6 月)	財務諸表監査における試査を支える要因を明らかにするため、1930 年代頃までのイギリスとアメリカの監査実務における試査の系譜について考察。	VII・J・8 (VII・P・8)
A0498	イギリス東インド会社の配当問題について (一)	松原一泰	117 巻 6 号 (1980 年 6 月)	17～18 世紀のイギリス東インド会社の歴史、発行株式、清算分配などについて検討。	IV・J・7
A0499	泉谷勝美著『複式簿記生成史論』	茂木虎雄	117 巻 6 号 (1980 年 6 月)	泉谷著『複式簿記生成史論』の書評。	XVI・G・5 (→III・G・5)
A0500	試査の系譜と試査を支える諸要因 (二・完)	鳥羽至英	118 巻 1 号 (1980 年 7 月)	前掲論文 A0497 の続編。1950 年頃から今日に至るまでの試査、内部統制、監査目的に関する考察。	III・P・9
A0501	西川孝治郎著『簿記ことはじめ解題』	黒澤 清	118 巻 1 号 (1980 年 7 月)	西川による『帳合之法』、『銀行簿記精法』、『馬耳蘇氏記簿法』の解題を紹介。	XVI・A・7 (→III・A・7)
A0502	木村重義先生を偲んで	若杉 明	118 巻 2 号 (1980 年 8 月)	木村 (重義) への追悼文。	XV・A・9
A0503	シュヴァルツの簿記法 (三・完)	井上 清	118 巻 3 号 (1980 年 9 月)	前掲論文 A0425 と A0427 の続編。Schwarz の「三種の簿記」(1518)における帳簿組織 (元帳、分割元帳など) に関する考察。	III・K・7
A0504	イギリス東インド会社の配当問題について (二・完)	松原一泰	118 巻 3 号 (1980 年 9 月)	前掲論文 A0498 の続編。17～18 世紀のイギリス東インド会社における清算分配、利益配当、株式配当について検討。	IV・J・7
A0505	長崎工作分局の会計・製品計算	山下正喜	118 巻 5 号 (1980 年 11 月)	1881～1887 年を中心に、「長崎分局」における会計計算・製品計算の概要を考究。	V・A・7
A0506	会計史研究方法緒論	濱田弘作	118 巻 5 号 (1980 年 11 月)	会計史研究の方法論や従来の会計史に関する文献を提示。	I・S・8
A0507	近代会計百年・文献目録について	西川孝治郎	118 巻 5 号 (1980 年 11 月)	日本会計研究学会の『近代会計百年—その歩みと文献目録』における初期の文献に関する修正点を記述。	XVI・A・7
A0508	第三回会計史国際会議に参加して	高寺貞男	118 巻 5 号 (1980 年 11 月)	1980 年にロンドンで開かれた会計史国際会議における参加者、日程、研究報告などの概要を記載。	XVI・S・9
A0509	会計方法論の史的考察	河野一英	118 巻 6 号 (1980 年 12 月)	19 世紀末から 20 世紀初頭におけるドイツを中心とした会計の哲学的方法論の史的考察。	I・K・7

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻号 (年月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0510	名目勘定の生成とその締切手続	泉谷勝美	119 巻 1 号 (1981 年 1 月)	13～14 世紀のイタリアにおける会計帳簿の分析を基に、名目勘定の生成とその締切の実務や、名目勘定の当時の役割について検討。	III・G・4
A0511	三菱造船所の工業会計―明治一七～三二年―	山下正喜	119 巻 1 号 (1981 年 1 月)	1884～1899 年の三菱造船所における史料から、工業会計がどのような状況にあったのかを解明。	V・A・7
A0512	明治・大正・昭和初期の会計学文献に関する二つのプロジェクト	染谷恭次郎	119 巻 1 号 (1981 年 1 月)	会計学文献の目録を作成することと、その当時の論文・資料の一部を復刻・刊行させるという二つのプロジェクトに言及。	XVI・A・9
A0513	近代日本商家の企業観―中井家の会計主体―	小倉栄一郎	119 巻 5 号 (1981 年 5 月)	江州中井家の決算書「店卸目録」における会計処理の説明や繰越欠損金処理に見られる企業実体観について検討。	IV・A・7 (III・A・7)
A0514	会計学説史序説	松尾憲橘	119 巻 5 号 (1981 年 5 月)	会計学における現代的課題の探求のために近代会計学の史的展開の研究がされてきたことについて言及。	I・S・9
A0515	第四回会計史研究者国際会議	著者不詳	120 巻 1 号 (1981 年 7 月)	1984 年にイタリアで会計史研究者国際会議が開かれる旨の記述。	XVI・S・9
A0516	白井佐敏著『会計思想史序説』	小島男佐夫	120 巻 2 号 (1981 年 8 月)	白井著『会計思想史序説』の書評。	XVI・J・5 (→III・J・5)
A0517	我国会計学の軌跡	黒澤 清	120 巻 2 号 (1981 年 8 月)	染谷編『我国会計学の軌跡』の紹介。	XVI・A・8 (→IV・A・8)
A0518	日米の営業費会計文献小史	西澤 脩	120 巻 3 号 (1981 年 9 月)	1926 年から 1963 年頃までのアメリカと日本の営業費会計を六つに時代区分し、それぞれの時代の特徴を考察。	V・P・9 (V・A・9)
A0519	史料・日本の会計制度と会計基準法案のこと	黒澤 清	120 巻 3 号 (1981 年 9 月)	黒澤が原案を作成した「会計基準法」についての解説。	XVI・A・9 (→IV・A・9)
A0520	Account, Accountability と衡平法理 (一) ―英国組合会計の形成と変遷―	千葉準一	120 巻 4 号 (1981 年 10 月)	16～19 世紀におけるイギリスの会計責任と衡平性との関連の問題、組合制度の形成と Equity, Common Law の法典化に伴う問題について検討。	IV・J・5 (XIV・J・5)
A0521	商品勘定の統括化過程について	渡邊 泉	120 巻 4 号 (1981 年 10 月)	口別商品勘定から一般商品勘定への統括化に至る時期、要因、形態などを明示し、転換期における損益計算思考の変遷について考究。	III・J・7

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻号 (年月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0522	古代会計史研究一考	濱田弘作	120 巻 4 号 (1981 年 10 月)	八人の会計史家の文献を引用し、 彼らの研究方法や時代区分について 論述。	I・S・1
A0523	Account, Accountability と衡平法理 (二・完) — 英国組合会計の形成と変 遷—	千葉準一	120 巻 5 号 (1981 年 11 月)	前掲論文 A0520 の続編。	IV・J・5 (→XIV・J・5)
A0524	会計評定所について	黒澤 清	120 巻 6 号 (1981 年 12 月)	会計士側と会社側での見解の相違 を調整するための機関設置に関す る解説。	VII・A・9
A0525	ヤーメイ「一般会計史の 反省」—問題の提起—	小島男佐夫	121 巻 1 号 (1982 年 1 月)	第三回国際会計史学会での Yamey の講演から、今後の会計史研究に 対する大きな問題提起が行われた ことを論述。	I・S・9
A0526	新静態論の成立とその系 譜	五十嵐邦正	121 巻 2 号 (1982 年 2 月)	1920 年代の le Coutre の貸借対照 表論を中心に、新静態論の成立か ら 1930 年代後半の展開までを検 討。	IV・K・9
A0527	現存していた「シュバル ツ簿記書の写本」	片岡泰彦	121 巻 2 号 (1982 年 2 月)	ウィーン国立図書館とグズダニク 図書館での Schwarz の文献の写 本の発見とその内容について論 述。	III・K・4
A0528	簿記会計教育の生成発展 とその動向—簿記論と監 査論の関係とその重要性 —	松本正信	121 巻 4 号 (1982 年 4 月)	日本での簿記会計教育の生成・発 展について、昭和の初期から 50 年 代に至るまでを、「企業会計原則」 や「監査基準」を中心に論述。	XII・A・9
A0529	土方 久著『近代会計の基 礎理論』	中野 勲	121 巻 4 号 (1982 年 4 月)	土方著『近代会計の基礎理論』の 書評。	XVI・K・8 (→IV・K・8)
A0530	ヤコモ・バドアの会計帳 簿	小島男佐夫	121 巻 5 号 (1982 年 5 月)	15 世紀前半にヴェネツィア以外の 地に住んでいたヴェネツィア商人 の会計帳簿を考察し、複式簿記の 当時の普及状況について検討。	III・G・4
A0531	アメリカ近代監査制度形 成の意義	鈴木 稔	121 巻 5 号 (1982 年 5 月)	1930 年代初期のアメリカ監査制度 を中心に、さまざまな利害関係者 間の関係を軸に考察。	VII・P・9
A0532	予算管理発達史序説	小林健吾	121 巻 6 号 (1982 年 6 月)	経営管理の分権化と予算管理とい う視点で予算管理の発達史を扱 い、予算管理の本質について検討。	VI・P・9

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻号 (年月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0533	P. Mathewson の予算統制論とその歴史的意義—制度的展開の検討—	辻 厚生	122 巻 1 号 (1982 年 7 月)	1880 年前後からのアメリカにおける科学的管理の展開過程に即しての、予算統制と標準原価計算の発達史の究明。	VI・P・8
A0534	シュバルツ簿記の勘定口座締切法	岡下 敏	122 巻 3 号 (1982 年 9 月)	Schwarz の文献 (1516) に限定して、彼の期末の勘定口座の締切における特徴点を考察。	III・K・7
A0535	マルコム の簿記法	渡邊 泉	122 巻 5 号 (1982 年 11 月)	Malcolm の簿記書 (1731) に基づき、近代イギリスにおける複式簿記の進化の過程について検討。	III・J・7
A0536	近代英国会計発達史一考	濱田弘作	123 巻 1 号 (1983 年 1 月)	イギリス会計史に関するこれまでの文献の特徴や論者による時代区分について論述。	I・J・8
A0537	ルカ・パチョーリーその生涯と「簿記論」—	小島男佐夫	123 巻 2 号 (1983 年 2 月)	Paciolo の生涯と <i>Summa</i> について言及し、彼の「簿記論」の特徴について考究。	III・G・7
A0538	十六世紀南ドイツにおける損益計算	片岡泰彦	123 巻 2 号 (1983 年 2 月)	Schreiber, Gottlieb, Schwarz などの文献から、16 世紀当時のドイツの損益計算の特徴について検討。	III・K・7
A0539	イギリスにおける会計規則と「真実かつ公正な概観」	田中 弘	123 巻 3 号 (1983 年 3 月)	1948 年と 1976 年のイギリス会社法を中心に、「真実かつ公正な概観」の役割について検討。	IV・J・9
A0540	近代英国社会会計制度の形成 (一) —信託法理の構造化と Rex v. Lord Kysant 事件の意味—	千葉準一	123 巻 3 号 (1983 年 3 月)	イギリス会計制度の近代化の基礎を整理し、1948 年会社法形成の契機となった Royal Mail 事件について考察。	IV・J・9
A0541	近代英国社会会計制度の形成 (二・完) —信託法理の構造化と Rex v. Lord Kysant 事件の意味—	千葉準一	123 巻 4 号 (1983 年 4 月)	上掲論文 A0540 の続編。	IV・J・9
A0542	米国生成期管理会計論の成立と展開	廣本敏郎	123 巻 4 号 (1983 年 4 月)	1920 年代を中心としたアメリカ管理会計論の成立・展開を, McKinsey の所説を基に論述。	VI・P・8
A0543	黒澤 清著『日本会計学発展史序説』	久野秀男	123 巻 4 号 (1983 年 4 月)	黒澤著『日本会計学発展史序説』の書評。	XVI・A・8 (→II・A・8)
A0544	林 良治著『ドイツ簿記・会計学史』	黒澤 清	123 巻 6 号 (1983 年 6 月)	林著『ドイツ簿記・会計学史』の書評。	XVI・K・8 (→III・K・8, IV・K・8)
A0545	渡辺 泉著『損益計算史論』	茂木虎雄	123 巻 6 号 (1983 年 6 月)	渡辺著『損益計算史論』の書評。	XVI・J・7 (→III・J・7)

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0546	シュヴァルツ第二手記の特質	井上 清	124 巻 1 号 (1983 年 7 月)	Schwarz の手記 (1550) に関する記帳体系、債務帳の問題点、記入原理などについて解説。	III・K・4
A0547	田中隆雄著『管理会計発達史』	津曲直躬	124 巻 1 号 (1983 年 7 月)	田中著『管理会計発達史』の書評。	XVI・P・7 (→VI・P・7)
A0548	片野一郎先生の御逝去を悼む	久野光朗	124 巻 1 号 (1983 年 7 月)	片野への追悼文。	XV・A・9
A0549	ディナミッシュ・ビランツ生成前史——六七三年のフランス商事王令をめぐって——	土方 久	124 巻 6 号 (1983 年 12 月)	ドイツ普通商法典 (1861) の模範となったフランス商事王令 (1673) に焦点を絞り、当時の貸借対照表における機能や限界などについて考究。	IV・H・7
A0550	シュバルツ簿記の期末締切と開始仕訳	岡下 敏	124 巻 6 号 (1983 年 12 月)	Schwarz の記帳例示 (1516) にある期末締切と開始仕訳における特徴とその問題点を検討。	III・K・7
A0551	一九世紀のアメリカ簿記書における試算表、精算表、および財務諸表	久野光朗	125 巻 1 号 (1984 年 1 月)	1796 年から 1890 年までの簿記文献を四つに時代区分し、それぞれの時代における試算表、精算表、財務諸表の特徴について考察。	III・P・7
A0552	商法における会計監査と業務監査の関係	安藤英義	125 巻 1 号 (1984 年 1 月)	日本における会計監査と業務監査の関係を 19～20 世紀のイギリス・フランス・ドイツの会計監査役に触れながら検討。	VII・A・9
A0553	アメリカ会計学説史研究序説——チャールズ・E・スプレイグの簿記理論について——	中野常男	125 巻 3 号 (1984 年 3 月)	Sprague のシリーズ論文 (1880) に焦点をあて、彼が代数学の手法を援用した等式を用いて解説している簿記論の内容とその特徴について考究。	III・P・7
A0554	米国会計学発達前史一考	濱田弘作	125 巻 4 号 (1984 年 4 月)	アメリカ会計史研究者の著書を基に、1870 年までが会計学発達前史にあたると指摘。	I・P・7
A0555	初期仏蘭西の簿記事情と複式簿記	小島男佐夫	125 巻 6 号 (1984 年 6 月)	14～16 世紀後半に至るまでのフランスとオランダにおける会計事情、簿記事情、簿記書等を検討。	III・H・5 (III・I・5)
A0556	岸 悦三著『会計前史』	泉谷勝美	125 巻 6 号 (1984 年 6 月)	岸著『会計前史』の書評。	XVI・G・5 (→III・G・5)
A0557	ニックリッシュの貸借対照表論——一九二〇年代の学説を中心として——	五十嵐邦正	126 巻 2 号 (1984 年 8 月)	Nicklisch の 1920 年代の貸借対照表論が 1910 年代のそれと異なることを示し、計算構造や評価論を中心に考察。	IV・K・8

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻号 (年月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0558	マーブルの直接原価計算 本質説の再検討 (一)	飯塚 勲	126 巻 3 号 (1984 年 9 月)	アメリカにおける直接原価計算の 外部報告機能をめぐる論争の出発 点となった 1950 年代後半から 60 年代前半にかけての Marple の所 説を考察。	V・P・9
A0559	津曲直躬先生を悼む	斎藤静樹	126 巻 4 号 (1984 年 10 月)	津曲への追悼文。	XV・A・9
A0560	ガフィキン編『チェンバ ース教授退官記念論文 集』	平松一夫	126 巻 5 号 (1984 年 11 月)	Gaffikin 編『チェンバース教授退 官記念論文集』の書評。	XVI・S・9 (→IV・S・9)
A0561	第四回会計史国際会議に 参加して	染谷恭次郎	126 巻 5 号 (1984 年 11 月)	1984 年にイタリアのピサで開催さ れた第四回会計史国際会議に関す る報告記。	XVI・S・9
A0562	マーブルの直接原価計算 本質説の再検討 (二・完)	飯塚 勲	126 巻 6 号 (1984 年 12 月)	前掲論文 A0558 の続編。Marple の 直接原価計算の本質観の要点を示 し、論者の本質観に関する私見を 論述・表明。	IV・P・9
A0563	斎藤静樹著『資産再評価 の研究』	伊藤邦雄	126 巻 6 号 (1984 年 12 月)	斎藤著『資産再評価の研究』の書 評。	XVI・P・8 (→IV・P・8)
A0564	第四回会計史研究者国際 会議—ピサ大会について—	小島男佐夫	126 巻 6 号 (1984 年 12 月)	1984 年にイタリアのピサで開催さ れた第四回会計史国際会議に関す る報告記。	XVI・S・9
A0565	一九世紀中葉のアメリカ 簿記会計事情—Hunt's Merchant's Magazine (18 39-1870) から—	久野光朗	127 巻 1 号 (1985 年 1 月)	「簿記書の紹介」, 「T・ジョー ズ」の簿記原論, 「資産評価論争」 というテーマに絞り, 19 世紀中葉 のアメリカの会計事情を考察。	III・P・7
A0566	山榊忠恕先生を偲んで	會田義雄	127 巻 1 号 (1985 年 1 月)	山榊への追悼文。	XV・A・9
A0567	S E C 開示政策の基本理 念について—S E C 創設 過程での議論等を中心 にして—	藤井健人	127 巻 4 号 (1985 年 4 月)	1933・34 年証券諸法の成立過程の 検討を中心に, アメリカにおける 開示政策の基本理念に関する二つ の考え方を提示。	IV・P・9
A0568	一九世紀ドイツ原価計算 の文献	平林喜博	127 巻 5 号 (1985 年 5 月)	19 世紀ドイツの原価計算の主要文 献を Dorn らの研究から選定し, その特徴について検討。	V・K・7
A0569	簿記史における基礎的事 実	井上 清	127 巻 6 号 (1985 年 6 月)	Schwarz に関する著者の研究を総 括するとともに, 簿記史研究のあ り方を考察。	III・K・7
A0570	クノー・バルト著 松尾憲 橘・百瀬房徳共訳『貸借 対照表法の論理』	渡辺陽一	128 巻 1 号 (1985 年 7 月)	松尾・百瀬共訳 (Barth 著)『貸借 対照表法の論理』の書評。	XVI・K・8 (→N・K・8)

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0571	人名勘定の生成	泉谷勝美	128 巻 2 号 (1985 年 8 月)	13 世紀における会計帳簿の分析を 基に、人名勘定の記帳実務や機能 について検討。	III・G・4
A0572	パチオリとシュバルツ— その仕訳方法を中心とし て—	岡下 敏	128 巻 2 号 (1985 年 8 月)	Paciolo と Schwarz が行っていた 仕訳の形式面、機能を比較し、そ の特徴を考察。	III・G・7 (III・K・7)
A0573	E・ワルプ著 戸田博之訳 『ワルプ損益計算論』	森川八洲男	128 巻 5 号 (1985 年 11 月)	戸田訳 (Walb 著)『ワルプ損益計 算論』の書評。	XVI・K・9 (→IV・K・9)
A0574	イギリス鉄道会計におけ る監査制度生成の一齣	金戸 武	128 巻 6 号 (1985 年 12 月)	1845 年以降提出され、1867 年の鉄 道会社法に至るまで不成立であつ た監査規定に関する法案の特徴に ついて検討。	VII・J・7
A0575	ニックリッシュ貸借対照 表論の展開過程	五十嵐邦正	129 巻 1 号 (1986 年 1 月)	Nicklisch の貸借貸借対照表論の 変遷過程を前期・中期・後期に分 け、それぞれの時代ごとに考察。	IV・K・8
A0576	書評：西野嘉一郎著『現 代会計監査制度発展史』	染谷恭次郎	129 巻 1 号 (1986 年 1 月)	西野著『現代会計監査制度発展史』 の書評。	XVI・A・9 (→VII・A・9)
A0577	シャウプ勧告の核心	高橋志郎	129 巻 2 号 (1986 年 2 月)	「シャウプ勧告」(1949/50) が当 時の日本に特有の事情にあわせて 作成されたものであることを論 証。	IX・A・9
A0578	ステフィン簿記論研究— 「伊太利式商人簿記」に ついて—	小島男佐夫	129 巻 2 号 (1986 年 2 月)	Stevin の簿記論、特にその前半部 分にあたる商人簿記について考 究。	III・I・7
A0579	アメリカにおける公表連 結財務諸表に関する検討 —一九三〇年代における 石油産業を中心として—	高須教夫	129 巻 2 号 (1986 年 2 月)	石油産業の連結財務諸表の公開や 子会社の範囲等について、その理 由を当時の政治的理由に求めて検 討。	IV・P・9
A0580	会計システム変革のドラ マ (一) —公社会計の生 成、これからの株式会 社会計への移行の過程—	黒澤 清	129 巻 3 号 (1986 年 3 月)	公社 (公共企業体・国有鉄道、電 電公社、専売公社) 成立前の会計 システム成立の過程と、そのモデ ルとなった帝国鉄道会計の特徴に 関する覚書。	X・A・8 (→IV・A・8)
A0581	一九世紀初頭から中葉に かけてのイギリスおよび アメリカの原価計算 (一)	松谷靖二	129 巻 3 号 (1986 年 3 月)	19 世紀のイギリスとアメリカの紡 績業の原価計算システムについて 検討。	V・J・7 (V・P・7)
A0582	会計システム変革のドラ マ (二) —公社会計の生 成、これからの株式会 社会計への移行の過程—	黒澤 清	129 巻 4 号 (1986 年 4 月)	前掲論文 A0580 の続編。公社会計 成立前の会計原理論争と、発生主 義に基づくといわれる公社会計の 特徴の解説。	X・A・9 (→IV・A・9)

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0583	一九世紀初頭から中葉にかけてのイギリスおよびアメリカの原価計算（二・完）	松谷靖二	129 巻 4 号 (1986 年 4 月)	前掲論文 A0581 の続編。	V・J・7 (V・P・7)
A0584	収益・費用勘定の性格および位置づけ——一九二〇年代前半までのペイトン理論を手がかりとして——	木戸田力	129 巻 4 号 (1986 年 4 月)	<i>Principles of Accounting</i> (1916) を起点として、Paton の学説における収益・費用勘定が如何に変化したのかを考察。	IV・P・8
A0585	会計システム変革のドラマ（三）——公社会計の生成、これからの株式会社社会計への移行の過程——	黒澤 清	129 巻 5 号 (1986 年 5 月)	前掲論文 A0580 と A0582 の続編。金銭会計の解説。	X・A・9 (→N・A・9)
A0586	会計システム変革のドラマ（四）——公社会計の生成、これからの株式会社社会計への移行の過程——	黒澤 清	129 巻 6 号 (1986 年 6 月)	前掲論文 A0580, A0582, A0585 の続編。拡張収支計算による会計記録の方法を解説。	X・A・9 (→N・A・9)
A0587	わが国における財務諸表標準化の原点——商工省財務諸表準則について——	河野正男	130 巻 1 号 (1986 年 7 月)	財務諸表準則の未定稿と確定稿を巡る議論を取り上げ、特に「標準」の解釈、貸借対照表および財産目録の本質、未払込資本金の扱い、用語の妥当性等について論述。	IV・A・9
A0588	英国株式会社会計制度百年譜	山浦久司	130 巻 2 号 (1986 年 8 月)	1825 年から 1948 年にわたるイギリス会社法規定の変遷を中心とした年表を作成。財務開示制度と監査制度の変遷を明示。	XVI・J・8 (→N・J・8, VII・J・8)
A0589	書評：黒澤 清著『職業会計人の実践哲学』	原田富士雄	130 巻 4 号 (1986 年 10 月)	黒澤著『職業会計人の実践哲学』の書評。	XVI・A・8
A0590	英国会社会計制度（一八四四—一八八五）と我国初期財務報告制度への投影（一）	千葉準一	131 巻 2 号 (1987 年 2 月)	イギリス会社会計制度の概観。「公共圏」の形成とともに、自由放任主義の中でも、有限会社法制および会社計算書類の公開が規定されるようになった過程を考察。	IV・J・7 (IV・A・7)
A0591	英国会社会計制度（一八四四—一八八五）と我国初期財務報告制度への投影（二・完）	千葉準一	131 巻 3 号 (1987 年 3 月)	上掲論文 A0590 の続編。明治商法以前の日本の会計規定に対してイギリスの会社会計制度がいかに影響を与えたかについて言及。また、両国の社会的・歴史的意義の相異について指摘。	IV・J・7 (IV・A・7)

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻号 (年月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0592	静的貸借対照表観の類型	五十嵐邦正	131 巻 3 号 (1987 年 3 月)	ドイツの静的貸借対照表観について、その類型化を行い、歴史的には資本等式に基づく静的観から貸借対照表等式に基づく静的観へと発展したことを指摘。	IV・K・8
A0593	シュバルツ簿記における仕訳の吟味	岡下 敏	131 巻 5 号 (1987 年 5 月)	Schwarz の簿記書、特に第二分冊での仕訳方法の特徴について検討。そこには処理上の経済性が考慮されていたことを指摘。	III・K・7
A0594	カタロニア商会の元帳	片岡泰彦	132 巻 1 号 (1987 年 7 月)	ロンバルディア地方で最初の複式簿記帳簿といわれるカタロニア商会の元帳の帳簿組織、勘定科目について検討。	III・G・4
A0595	書評：小島男佐夫著『会計史入門』	泉谷勝美	132 巻 2 号 (1987 年 8 月)	小島著『会計史入門』の書評。	XVI・S・5 (→III・S・5)
A0596	アメリカ公認会計士協会百周年	著者不詳	132 巻 2 号 (1987 年 8 月)	<i>The Journal of Accountancy</i> 誌の百周年記念号 (1987 年 5 月号) を紹介。	XVI・P・8 (→XIII・P・8)
A0597	英国複会計制度の検討	山浦久司	132 巻 5 号 (1987 年 11 月)	イギリスの複会計制度を、1868 年鉄道事業法を中心として考察し、当該制度がいかなる目的を有し、また、いかに性格を変化させていったかについて検討。	IV・J・7
A0598	会計基準設定の現代的特徴と方向 (一)	津守常弘	133 巻 1 号 (1988 年 1 月)	日本の企業会計原則の設定後の変遷について、特に企業会計原則が有する計算機能として会計計算と開示の重点の置かれ方の変遷に着目して考察。	IV・A・9 (IV・P・9)
A0599	会計基準設定の現代的特徴と方向 (二・完)	津守常弘	133 巻 2 号 (1988 年 2 月)	上掲論文 A0598 の続編。会計規制上の問題点の推移をアメリカの公開拡大を中心に考究。	IV・P・9 (IV・A・9)
A0600	イギリス複会計制のもとでの財務諸表について	東山英次	133 巻 3 号 (1988 年 3 月)	イギリスの 1911 年鉄道会社法の第一附表に基づく財務諸表の体系と各財務表の内容、関連および特徴の分析、さらに、1868 年法のもとでの財務諸表との比較・検討。	IV・J・7
A0601	トレイズメンの勃興と簿記書の展開	小島男佐夫	133 巻 5 号 (1988 年 5 月)	イギリスのトレイズメン向けの簡易な簿記書とされる Monteaage と Hatton の簿記書を紹介・解説。	III・J・7

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0602	日本における会計革命	染谷恭次郎	134 巻 1 号 (1988 年 7 月)	日本では 1800 年代の後半と 1900 年代の半ばに会計上の大きな変革を経験したことを概説し、その理由として経済発展の遅れと新しい政治、経済、文化制度を創出する力の存在を指摘。	IV・A・8
A0603	書評：片岡泰彦著『イタリア簿記史論』	黒澤 清	134 巻 1 号 (1988 年 8 月)	片岡著『イタリア簿記史論』の書評。	XVI・G・5 (→III・G・5)
A0604	松尾憲橋教授の訃	著者不詳	134 巻 1 号 (1988 年 7 月)	松尾への追悼文。	XV・A・9
A0605	第五回会計史世界会議について	著者不詳	134 巻 1 号 (1988 年 7 月)	第五回会計史世界会議のプログラムを紹介。	XVI・S・9
A0606	連結財務諸表生成の史的考察（一）—アメリカ鉄道業における事例研究—	小栗崇資	134 巻 2 号 (1988 年 8 月)	連結財務諸表の意義と役割を歴史的な次元から把握し。初期の連結貸借対照表の段階から資本連結が行われるまでの経緯を論証。	IV・P・7
A0607	連結財務諸表生成の史的考察（二・完）—アメリカ鉄道業における事例研究—	小栗崇資	134 巻 3 号 (1988 年 9 月)	上掲論文 A0606 の続編。連結財務諸表が生成されるに至った背景について検討。	IV・P・7
A0608	コフェロの未実現損益論	渡辺陽一	134 巻 4 号 (1988 年 10 月)	Kovero が財産評価論として現在の調達価値を提唱していることを指摘し、最も具体的な例として未実現評価損益について解説。	IV・K・9
A0609	ディベルンの簿記理論—十七世紀における精算表の出現—	片岡泰彦	134 巻 5 号 (1988 年 11 月)	Dibbern の簿記書（1692）を、特に六桁式の決算一覧表（精算表）の作成に着目して検討。	III・K・7
A0610	英国計算書類体系の形成過程（一）—「一九世紀」郵船会社等による複会計制実践の意味—	千葉準一	134 巻 5 号 (1988 年 11 月)	イギリスの「複会計制度」を 1868 年鉄道規制法に規定されるものを中心として言及。	IV・J・7
A0611	第五回会計史世界会議に出席して	平林喜博	134 巻 5 号 (1988 年 11 月)	第五回会計史世界会議のプログラムと主たる報告の概要を紹介。	XVI・S・9
A0612	英国計算書類体系の形成過程（二）—「一九世紀」郵船会社等による複会計制実践の意味—	千葉準一	134 巻 6 号 (1988 年 12 月)	前掲論文 A0610 の続編。「複会計制度」の多様性を示す一類型として郵船会社によって用いられた複会計制度について考察。	IV・J・7
A0613	米国管理会計発達試案	廣本敏郎	135 巻 1 号 (1989 年 1 月)	アメリカを中心として発展してきた管理会計の研究・教育について 1920 年代以降の展開を概観し、今後の展望を検討。	V・P・9

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0614	書評：日本公認会計士協会編『公認会計士制度三十五年史-最近の十年-』	染谷恭次郎	135 巻 1 号 (1989 年 1 月)	日本公認会計士協会編『公認会計士制度 35 年史』（『25 年史』の補遺）の書評。	XVI・A・9 (→XIII・A・9)
A0615	スプレイグ簿記論の論理構造	中野常男	135 巻 3 号 (1989 年 3 月)	アメリカにおける資本主理論的簿記論の確立者である Sprague の簿記論について検討。	III・P・7
A0616	青木倫太郎の訃	著者不詳	135 巻 3 号 (1989 年 3 月)	青木への追悼文。	XV・A・9
A0617	英国計算書類体系の形成過程（三・完）—「一九世紀」郵船会社等による複会計制実践の意味—	千葉準一	135 巻 4 号 (1989 年 4 月)	前掲論文 A0610 と A0612 の続編。	IV・J・7
A0618	小島男佐夫先生のご逝去を悼む	平林喜博	135 巻 4 号 (1989 年 4 月)	小島への追悼文。	XV・A・9
A0619	片岡義男先生を偲んで	中込世雄	135 巻 5 号 (1989 年 5 月)	片岡への追悼文。	XV・A・9
A0620	イタリア式簿記の日本への伝播について	岩辺晃三	135 巻 6 号 (1989 年 6 月)	西洋式簿記法の日本への伝播が、戦国時代にまで遡れると推定。	III・A・7
A0621	米国資金会計論の展開（一）	佐藤倫正	135 巻 6 号 (1989 年 6 月)	アメリカの資金学説の展開について、1940 年代後半から考察。	IV・P・9
A0622	沼田嘉穂先生を偲ぶ	大藪俊哉	136 巻 1 号 (1989 年 7 月)	沼田への追悼文。	XV・A・9
A0623	米国資金会計論の展開（二・完）	佐藤倫正	136 巻 2 号 (1989 年 8 月)	前掲論文 A0621 の続編。資金的損益計算、資金的貸借対照表、財務諸表の非連携観について検討。	IV・P・9
A0624	番場嘉一郎先生を偲ぶ	中村 忠	136 巻 2 号 (1989 年 8 月)	番場への追悼文。	XV・A・9
A0625	書評：五十嵐邦正著『静的貸借対照表論』	渡辺陽一	136 巻 4 号 (1989 年 10 月)	五十嵐著『静的貸借対照表論』の書評。	XVI・K・8 (→IV・K・8)
A0626	品田誠平先生を偲ぶ	茂木虎雄	136 巻 4 号 (1989 年 10 月)	品田への追悼文。	XV・A・9
A0627	イギリスにおける素価概念の変遷	福島吉春	136 巻 5 号 (1989 年 11 月)	近代的原価計算の先駆形態としての素価計算について、1870 年代以降のイギリスにおける文献を中心に考察。	V・J・7
A0628	報告会計制度と企業内容開示制度—戦後我国「証券取引委員会」制度が残したもの—	千葉準一	137 巻 1 号 (1990 年 1 月)	報告会計制度と企業内容公開制度の問題点を近代会計制度の母国イギリスのそれを基に整理しながら探求し、さらにわが国の戦後『財務諸表準則』と「証券取引委員会」制度の関連問題についても検討。	IV・A・9 (IV・J・8)

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻号 (年月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0629	二先達—國松 豊, 上野道輔—著『貸借対照表論』の一考察	濱田弘作	137 巻 2 号 (1990 年 2 月)	1910 年代の國松と上野両者の『貸借対照表論』を参考文献・引用文献から計量的に概観。	IV・A・7
A0630	書評：戸田博之著『収支的簿記体系の研究』	森川八洲男	137 巻 3 号 (1990 年 3 月)	戸田著『収支的簿記体系の研究』の書評。	XVI・K・8 (→III・K・8)
A0631	鍋島 達先生を偲ぶ	山口達良	137 巻 3 号 (1990 年 3 月)	鍋島への追悼文。	XV・A・9
A0632	会計学文献概観（一四九四年～一八〇〇年）	B. S. ヤーメイ（片岡泰彦訳）	137 巻 4 号 (1990 年 4 月)	Paciolo の「簿記論」以降の主要な簿記書の歴史的意義について述べた Yamey の講演録（邦語訳）。	III・S・7
A0633	弔辞	中島省吾	137 巻 5 号 (1990 年 5 月)	黒澤への追悼文。	XV・A・9
A0634	黒澤清先生を偲ぶ	合崎堅二	137 巻 5 号 (1990 年 5 月)	黒澤への追悼文。	XV・A・9
A0635	シュバルツ簿記における補助簿—現金出納帳を中心に—	岡下 敏	138 巻 1 号 (1990 年 7 月)	Schwarz の簿記書（1518）に限定して、彼の補助簿（現金出納帳）における特徴点を考察。	III・K・7
A0636	産業革命とイタリア式貸借簿記の革新—クロンヘルム（1818）を中心として—	中野常男	138 巻 2 号 (1990 年 8 月)	産業革命に伴って生じたイタリア式貸借簿記革新の現れとしての Cronhelm の簿記論について検討。	III・J・7
A0637	イギリス簿記書と組織文化	安藤英義	138 巻 3 号 (1990 年 9 月)	イギリスにおける初級簿記の検討から、同国の伝統的な簿記の文化がうかがえることを指摘。	III・J・8
A0638	資金概念の変遷—現金フロー計算書のかくれた側面—	佐藤倫正	138 巻 3 号 (1990 年 9 月)	資金計算書発展 100 年の歴史から、F A S B の現金フロー計算書概念を批判的に考察。	IV・P・8
A0639	日本における会計と会計学の近代化過程—黒澤理論の社会的・歴史的意味をめぐって—	千葉準一	139 巻 1 号 (1991 年 1 月)	黒澤の理論的手法の考案を通じて、近代会計理論の日本的様式について検討。	II・A・9
A0640	書評：黒澤 清著『日本会計制度発展史』	染谷恭次郎	139 巻 4 号 (1991 年 4 月)	黒澤著『日本会計制度発展史』の書評。	XVI・A・8 (→IV・A・8)
A0641	ドイツ動態論生成以前の株式銀行の利益決定—一八六一年一般ドイツ商法典成立前の四三銀行の定款規定と決算報告書の研究—	川端保至	139 巻 6 号 (1991 年 6 月)	ドイツ普通商法典（1861）成立以前のドイツの株式会社銀行 43 社の利益決定実務について考察。	IV・K・7

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0642	わが国における引当金会計の系譜	山下寿文	140 巻 2 号 (1991 年 8 月)	引当金会計の系譜について、戦前の商工省準則と企画院草案に遡って検討。	IV・A・9
A0643	エーリッヒ・コジオール博士の回想	M. シュヴァイツァー (興津裕康訳)	140 巻 3 号 (1991 年 9 月)	Kosiol の会計学研究を回顧した Schweitzer の論稿 (邦語訳)。	XV・K・9 (→IV・K・9)
A0644	静態論の展開	五十嵐邦正	141 巻 1 号 (1992 年 1 月)	ドイツ会計学における静態論の展開について、Schär 以降の学説を考察。	IV・K・8
A0645	馬場克三先生の安らかなお休みを願って	内川菊義	141 巻 1 号 (1992 年 1 月)	馬場への追悼文。	XV・A・9
A0646	ドイツにおける財務会計—過去三〇年をふりかえって—	W. ブッセ・フォン・コルベ (尾畑裕訳)	141 巻 2 号 (1992 年 2 月)	ドイツにおける 1960 年代以降の財務会計論の展開を考察した Busse von Colbe の論稿 (邦語訳)。	IV・K・9
A0647	わが国監査規範の回顧と展望	新井清光	141 巻 3 号 (1992 年 3 月)	戦後のわが国の会計規範を歴史的に振り返り、その将来を展望。	VII・A・9
A0648	管理会計論研究の私的な回顧と展望—国際的視野のもとに—	宮本匡章	141 巻 4 号 (1992 年 4 月)	管理会計研究を始めた 1950 年代半ば以降の管理会計研究についての回想。	VI・A・9
A0649	アメリカにおける管理会計と財務会計の回顧	C. T. ホーン グレン (伊藤邦雄・廣本敏郎共訳)	141 巻第 4 号 (1992 年 4 月)	管理会計については A B C, 財務会計については 20 世紀の基準設定プロセスに焦点をあてた Horn-gren の論稿 (邦語訳)。	IV・P・9 (VI・P・9)
A0650	書評：千葉準一著『英国近代会計制度』	斎藤静樹	141 巻 4 号 (1992 年 4 月)	千葉著『イギリス近代会計制度』の書評。	XVI・J・8 (→IV・J・8)
A0651	わが国における貸借対照表論研究の軌跡	濱田弘作	141 巻 6 号 (1992 年 6 月)	わが国における貸借対照表論研究の軌跡を、雑誌『會計』創刊号から第 138 巻までを素材として論述。	IV・A・8
A0652	阪本安一先生を偲ぶ	野村健太郎	141 巻 6 号 (1992 年 6 月)	阪本への追悼文。	XV・A・9
A0653	会計帳簿と日本史の謎—文化論的アプローチにもとづいて—	岩辺晃三	142 巻 1 号 (1992 年 7 月)	江戸時代の商家の帳簿について文化論的に考察。	III・A・7
A0654	アメリカにおける資本主理論の展開過程について	中野常男	142 巻 2 号 (1992 年 8 月)	1830 年以降のアメリカで出版された文献を基に、同国における資本主理論の展開過程について検討。	III・P・7

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0655	戦後日本郵船における資産再評価	山口不二夫	142 巻 2 号 (1992 年 8 月)	資産の再評価問題について、日本郵船の資料を用いて、1946 年の企業再建整備法と 1950 年の第一次資産再評価を取り上げて考究。	IV・A・9
A0656	第六回会計史世界会議	平林喜博	142 巻 5 号 (1992 年 11 月)	第六回会計史世界会議の大会記。	XVI・S・9
A0657	パチョーリ簿記論と初期ドイツ簿記組織との関連性	片岡泰彦	142 巻 6 号 (1992 年 12 月)	Paciolo の「簿記論」と初期ドイツの簿記論についての比較・考察。	III・K・7
A0658	書評：中野常男『会計理論生成史』	高須教夫	143 巻 2 号 (1993 年 2 月)	中野著『会計理論生成史』の書評。	XVI・S・7 (→III・J・7, III・P・7, IV・P・7)
A0659	原価計算のパイオニアとしてのオイゲン・シュマーレンバッハ（一）	M. シュヴァイツァー (興津裕康訳)	143 巻 4 号 (1993 年 4 月)	原価計算における Schmalenbach の貢献を考察した Schweitzer の論稿（邦語訳）。	XV・K・8 (→V・K・8)
A0660	残存書翰から見た平井泰太郎教授の開城簿記研究の足跡	孫 徳栄	143 巻 4 号 (1993 年 4 月)	平井の開城簿記研究の足跡を、その残存書翰から検討。	III・C・7
A0661	書評：高須教夫『アメリカ連結会計論』	山地秀俊	143 巻 4 号 (1993 年 4 月)	高須著『アメリカ連結会計論』の書評。	XVI・P・9 (→IV・P・9)
A0662	原価計算のパイオニアとしてのオイゲン・シュマーレンバッハ（二・完）	M. シュヴァイツァー (興津裕康訳)	143 巻 5 号 (1993 年 5 月)	前掲論文 A0659 の続編。	XV・K・8 (→IV・K・8)
A0663	平井泰太郎教授の「開城簿記」損益計算観	孫 徳栄	143 巻 6 号 (1993 年 6 月)	平井による開城簿記研究の中で、特に損益計算観に焦点をあてて検討。	III・C・7
A0664	書評：廣本敏郎『米国管理会計発達史』	櫻井通晴	144 巻 1 号 (1993 年 7 月)	廣本著『アメリカ管理会計発達史』の書評。	XVI・P・9 (→VI・P・9)
A0665	資本的支出と収益的支出の区別—資産の概念—	渡邊康良	144 巻 2 号 (1993 年 8 月)	資産概念について、Hatfield の著作や 20 世紀前半の事例にまで遡って考察。	IV・P・8
A0666	シュバルツ簿記書第三例示の記帳	岡下 敏	144 巻 3 号 (1993 年 9 月)	Schwartz の簿記書（1518）のうち、第三例示の記帳と目的について検討。	III・K・7
A0667	簿記学と会計学—その史的展開過程について—	中野常男	144 巻 5 号 (1993 年 11 月)	簿記書の教示内容の史的展開過程の研究を基に、Hatfield に至って簿記学から会計学へと転換する過程を考察。	III・J・7 (IV・P・7)

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0668	第一次世界大戦直後のイギリスにおける原価計算認識	鈴木一道	144 巻 5 号 (1993 年 11 月)	第一次世界大戦直後のイギリスにおける原価計算に対する認識を検討。	V・J・9
A0669	日本鉄道会社の財務と会計	金戸 武	144 巻 5 号 (1993 年 11 月)	日本鉄道会社の設立背景, 会計規則および配当政策について考察。	IV・A・7
A0670	簿記・会計シフトと産業化及び証券投資の大衆化	久保田秀樹	144 巻 6 号 (1993 年 12 月)	簿記から会計へのシフトを, 産業化と証券投資の大衆化といった側面から考察。	IV・S・8
A0671	書評: 西川 登著『三井家勘定管見』	千葉準一	145 巻 1 号 (1994 年 1 月)	江戸時代の三井家の内部会計報告制度と会計処理技法について検討。	XVI・A・7 (→IV・A・7)
A0672	書評: 渡邊 泉著『決算会計史論』	千葉準一	145 巻 4 号 (1994 年 4 月)	渡邊著『決算会計史論』の書評。	XVI・J・7 (→III・J・7)
A0673	競争秩序とアメリカ財務公開思想—ブランドイスからスコットへの思想史的流を中心に—	大西清彦	145 巻 5 号 (1994 年 5 月)	財務公開制度成立の契機を「トラスト問題」ととらえ, その意義について再検討。	IV・P・7
A0674	印欧語における原価の語源について	夷谷廣政	145 巻 6 号 (1994 年 6 月)	印欧語における原価の語源について考察。	V・S・5
A0675	原価計算史の方法	山下正喜	145 巻 6 号 (1994 年 6 月)	原価計算史の研究方法について過去の文献から検討。	V・S・8
A0676	I C A S 主催「パチョーリ五〇〇年記念祭」に出席して	渡邊 泉	145 巻 6 号 (1994 年 6 月)	I C A S 主催「パチョーリ五〇〇年記念祭」の報告記。	XVI・G・9
A0677	会計学説史の座標軸	遠藤久夫	146 巻 1 号 (1994 年 7 月)	会計学説史研究分野における因果系列連鎖による座標軸の構築を提唱。	I・S・9
A0678	パチョーリ簿記論の成立	岸 悦三	146 巻 3 号 (1994 年 9 月)	Paciolo の人文主義者的側面から「簿記論」成立の背景を論述。	III・G・7
A0679	原価計算思考の変遷—原価計算の苦悩と挑戦の一断面—	平林喜博	146 巻 4 号 (1994 年 10 月)	20 世紀への転換期以降のアメリカ標準原価計算思考における原価管理の本質観を考察。	III・P・8
A0680	書評: 茂木虎雄著『イギリス東インド会社会計史論』	泉谷勝美	146 巻 5 号 (1994 年 11 月)	茂木著『イギリス東インド会社会計史論』の書評。	XVI・J・7 (→III・J・7)
A0681	修道士ルカ・パチョリ奉賛の特別会議とイタリア周遊の旅	久野光朗	146 巻 5 号 (1994 年 11 月)	Paciolo の <i>Summa</i> 出版 500 年記念特別世界会議の旅行記。	XVI・G・9
A0682	静態論と商法の発展	林 良治	146 巻 6 号 (1994 年 12 月)	Oberbrinkmann の所説を基に, 貸借対照表法との関連から, 近年の静態論動向を歴史的に検討。	IV・K・8

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0683	「パチョーリ簿記論」の 特徴に関する問題点	片岡泰彦	146 巻 6 号 (1994 年 12 月)	Paciolo の簿記論について新たに 出版された三つの訳書を検討しつ つ, Yamey のコメントを参考に, 「簿記論」のいくつかの問題点に ついて考究。	III・G・7
A0684	一九世紀ドイツ株式銀行 の損益計算—七六銀行定 款の計算規定と損益計算 書実務—	川端保至	147 巻 1 号 (1995 年 1 月)	19 世紀ドイツの 76 株式銀行定款 の損益計算実務を検討。	IV・K・7
A0685	書評：國部克彦著『アメ リカ経営分析発達史』	津守常弘	147 巻 3 号 (1995 年 3 月)	國部著『アメリカ経営分析発達史』 の書評。	VI・P・8
A0686	商法時価評価規定にもと づく資産評価—日本郵船 における事例から—	山口不二夫	147 巻 4 号 (1995 年 4 月)	1962 年以前の商法時価評価規定が 日本郵船でどのように遵守されて いたかを考察。	IV・A・8
A0687	近代会計制度成立のメル クマール	友岡 賛	147 巻 5 号 (1995 年 5 月)	近代会計制度の成立のメルクマー ルを, 独立のプロフェッショナル 監査の社会的定着をとする筆者の アプローチを紹介。	IV・J・8 (→VII・J・8)
A0688	メキシコにおける会計発 達小史	中川美佐子	148 巻 1 号 (1995 年 7 月)	古代から現代までのメキシコにお ける会計の発達を概観。	IV・R・8
A0689	トークン会計の現代的意 義—シュマントーベッセ ラ理論の波紋—	小口好昭	148 巻 2 号 (1995 年 8 月)	Schmandt-Besserat の理論を基に, 古代トークン会計の現代的意義を 主張。	II・F・1
A0690	書評：片岡泰彦著『ドイ ツ簿記史論』	平林喜博	148 巻 2 号 (1995 年 8 月)	片岡著『ドイツ簿記史論』の書評。	XVI・K・8 (→III・K・8)
A0691	損益計算の展開と資金計 算書の萌芽	渡邊 泉	148 巻 3 号 (1995 年 9 月)	複式簿記が損益計算を中心とする システムにいかに移行したか, ま た, 資金計算重視の思考がどのよ うに加味されたかについて検討。	IV・J・5
A0692	井上達雄先生を偲ぶ	渡部裕亘・ 北村敬子	148 巻 4 号 (1995 年 10 月)	井上への追悼文。	XV・A・9
A0693	宮上一夫先生を偲ぶ	遠藤一久	149 巻 1 号 (1996 年 1 月)	宮上への追悼文。	XV・A・9
A0694	イギリス外貨換算会計の 変遷	井戸一元	149 巻 2 号 (1996 年 2 月)	イギリスにおける外貨換算会計の 変遷を 19 世紀末に遡って検討。	IV・J・8
A0695	一九世紀末葉のアメリカ 会計事情 (一) — <i>The Book-Keeper</i> (1880-1883) ・ <i>American Counting-Room</i> (1883-1884) ・ <i>Accountics</i> (1897-1900) から—	久野光朗	149 巻 2 号 (1996 年 2 月)	初期の会計関係の雑誌である <i>The Book-Keeper</i> , <i>American Counting- Room</i> , <i>Accountics</i> を基に, 19 世紀 末葉のアメリカの会計事情につい て検討。	III・P・7

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0696	書評：岡野 浩著『日本の 管理会計の展開』	櫻井通晴	149 巻 2 号 (1996 年 2 月)	岡野著『日本の管理会計の展開』 の書評。	XVI・A・9 (→VI・A・9)
A0697	一九世紀末葉のアメリカ 会計事情 (二・完) — <i>The Book-Keeper</i> (1880-1883) ・ <i>American Counting-Room</i> (1883-1884) ・ <i>Accountics</i> (1897-1900) から—	久野光朗	149 巻 3 号 (1996 年 3 月)	前掲論文 A0695 の続編。	III・P・7
A0698	書評：岡下 敏著『シュバ ルツ簿記論』	渡邊 泉	149 巻 3 号 (1996 年 3 月)	岡下著『シュバルツ簿記論』の書 評。	XVI・K・7 (→III・K・7)
A0699	書評：友岡 賛著『近代会 計制度の成立』	千葉準一	149 巻 6 号 (1996 年 6 月)	友岡著『近代会計制度の成立』の 書評。	XVI・J・7 (→III・J・7)
A0700	会計史における史的研究 の一考—ギャフィキンの 所説に沿って— (一)	濱田弘作	150 巻 2 号 (1996 年 8 月)	Gaffikin の所説にそって会計史の 研究方法を論述。	I・S・0
A0701	ベネット・コトルリの「世 界最初の複式簿記文献」 について	片岡泰彦	150 巻 2 号 (1996 年 8 月)	Cotrugli の「世界最初の簿記文献」 について検討。	III・G・7
A0702	会計史における史的研究 の一考—ギャフィキンの 所説に沿って— (二・完)	濱田弘作	150 巻 3 号 (1996 年 9 月)	前掲論文 A0700 の続編。	I・S・0
A0703	一九世紀イギリスの資金 計算書	渡邊 泉	150 巻 4 号 (1996 年 10 月)	ダウリス製鉄会社の財務表を考察 し、資金計算書がイギリスにおい て生成したことを指摘。	IV・J・7
A0704	商法計算規定解釈上の問 題点—特に「企業会計原 則」との関連を中心に—	長久保如玄	150 巻 4 号 (1996 年 10 月)	明治期以降のわが国商法の変遷を 概観しながら、「企業会計原則」 との関連から解釈上の新見地を提 示。	XIV・A・8
A0705	第七回会計史世界会議に 参加して	片岡泰彦	150 巻 4 号 (1996 年 10 月)	第七回会計史世界会議の大会報告 記。	XVI・S・9
A0706	コーラー『会計学辞典』 の成立前史	渡辺和夫	150 巻 5 号 (1996 年 11 月)	Kohler の『会計学辞典』成立まで の道程について検討。	II・P・9
A0707	「公正ナル会計慣行」と 商法—田中耕太郎『貸借 対照表法の論理』の先覚 性と時代制約—	長久保如玄	150 巻 6 号 (1996 年 12 月)	田中の著書を基に、「公正なる会 計慣行」と商法の関係を多角的に 考察。	XIV・A・9 (IV・A・9)
A0708	会計学研究・教育のあり 方	西澤 脩	151 巻 1 号 (1997 年 1 月)	戦後 50 年間の日本会計研究学会 全国大会の統一論題を概観すると ともに、金融・証券市場の拡大と 企業会計の関係を考察。	I・A・9

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0709	アメリカ鉄道会社における管理会計の生成問題—ウェスタン鉄道の事例を中心として—	高栢真一	151 巻 2 号 (1997 年 2 月)	1830 年代から 1840 年代にかけてのウェスタン鉄道における会計実務の検討から、それらが現代的意義をもつ管理会計実務への系譜として認識できうるかどうかについて検討。	VI・P・7
A0710	書評：足立 浩著『アメリカ管理原価会計史』	平林喜博	151 巻 2 号 (1997 年 2 月)	足立著『アメリカ管理原価会計史』の書評。	XVI・P・8 (→VI・P・8)
A0711	病院会計の開拓—ある会計学者の軌跡— (一)	染谷恭次郎	151 巻 3 号 (1997 年 3 月)	戦後わが国の病院会計の展開について回想。	X・A・9
A0712	書評：中根敏晴著『管理原価計算の史的研究』	河田 信	151 巻 3 号 (1997 年 3 月)	中根著『管理原価計算の史的研究』の書評。	XVI・P・8 (→V・P・8)
A0713	病院会計の開拓—ある会計学者の軌跡— (二)	染谷恭次郎	151 巻 4 号 (1997 年 4 月)	前掲論文 A0711 の続編。	X・A・9
A0714	勘定分類の史的考察—九世紀のアメリカ簿記書を中心として—	原 俊雄	151 巻 5 号 (1997 年 5 月)	19 世紀アメリカにおける簿記書を中心に、資本金勘定および商品勘定の帰属について検討。	III・P・7
A0715	病院会計の開拓—ある会計学者の軌跡— (三・完)	染谷恭次郎	151 巻 5 号 (1997 年 5 月)	前掲論文 A0711 と A0713 の続編。	X・A・9
A0716	直接原価計算論の再検討—マーブルの貢献とその限界—	高橋 賢	151 巻 6 号 (1997 年 6 月)	直接原価計算論の発展に貢献した Marple の所説を基に、直接原価計算論を再検討。	V・P・9
A0717	会計のシュメール起源について—言語発生的アプローチ—	夷谷廣政	151 巻 6 号 (1997 年 6 月)	会計の古代シュメール起源説について考察。	II・F・1
A0718	書評：泉谷勝美著『スンマへの径』	茂木虎雄	151 巻 6 号 (1997 年 6 月)	泉谷著『スンマへの径』の書評。	XVI・G・5 (→III・G・5)
A0719	複式簿記発生仮説と其のホメオ・スタシス—代数的影響と取引的基礎—	山本紀生	152 巻 1 号 (1997 年 7 月)	複式簿記の生成に関して、代数的影響と取引的基礎から検討し、また生成仮説について寓話を取り上げて検討。	III・S・0
A0720	会社法の強行法規性と「公正ナル会計慣行」—わが国商法計算規定の条文構造における「異常性」との関連を中心に—	長久保如玄	152 巻 2 号 (1997 年 8 月)	会社法の強行法規性と「公正ナル会計慣行」との関連について概観。	XIV・A・9 (IV・A・9)
A0721	会計変化論の視座	永野則雄	152 巻 4 号 (1997 年 10 月)	「新会計史」と称される、会計変化論について検討。	I・S・0
A0722	アメリカで揺らぐ資本概念—資本と利益の区別—	安藤英義	153 巻 1 号 (1997 年 1 月)	アメリカにおける資本概念の変化を、アメリカ会計の生成時代にまで遡って考察。	II・S・8

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻号 (年月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0723	アメリカ会計の変遷と展望	井尻雄士	153 巻 1 号 (1998 年 1 月)	主として 1980 年代以降のアメリカ会計の変遷と今後の展望を提示。	I・P・9
A0724	チャーチ原価計算論の源流	福島吉春	153 巻 1 号 (1998 年 1 月)	原価計算史上著名な Church の初期の論稿について検討。	V・P・7
A0725	「新しい会計史」としての会計変化の理論	永野則雄	154 巻 1 号 (1998 年 7 月)	「新しい歴史」に対比する「新しい会計史」について考察。	I・S・0
A0726	会計研究における分類学的一考	濱田弘作	154 巻 2 号 (1998 年 8 月)	日米を代表する <i>The Accounting Review</i> と『會計』に掲載された過去の論文を分類学的に検討。	I・S・0
A0727	書評：遠藤 孝著『引当金会計制度の展開』	成田修身	154 巻 2 号 (1998 年 8 月)	遠藤著『引当金会計制度の展開』の書評。	XVI・A・9 (→IV・A・9)
A0728	書評：片岡泰彦編『我国パチョーリ簿記論の軌跡』	茂木虎雄	154 巻 2 号 (1998 年 8 月)	片岡編『我国パチョーリ簿記論の軌跡』の書評。	XVI・G・7 (→III・G・7)
A0729	ボルティモア・オハイオ鉄道における会計情報の作成・利用	高栢真一	154 巻 3 号 (1998 年 9 月)	1820 年代後期から 1850 年代にかけてのボルティモア・オハイオ鉄道における会計情報の作成と利用について検討。	VI・P・7
A0730	書評：百瀬房徳著『貸借対照表法の生成史』	片岡泰彦	154 巻 3 号 (1998 年 9 月)	百瀬著『貸借対照表法の生成史』の書評	XVI・K・7 (→IV・K・7)
A0731	パチオリとシュバルツ—複式簿記成立初期における検算法の吟味—	岡下 敏	154 巻 4 号 (1998 年 10 月)	Paciolo と Schwarz を通して、複式簿記成立初期における検算法を考察。	III・K・7
A0732	マテシッチ教授が歩んだ道	藤田幸男	154 巻 5 号 (1998 年 11 月)	Mattessich の自伝的著書の解説。	XV・S・9 (→IV・S・9)
A0733	初期株式会社の利益決定と維持すべき資本の定義——一九世紀ドイツの一四七株式会社定款に見られる会計実務の研究——	川端保至	154 巻 6 号 (1998 年 12 月)	19 世紀ドイツの 147 株式銀行定款に見られる会計実務について考究。	IV・K・7
A0734	タオルミーナの会計史国際会議に参加して	片岡泰彦	155 巻 1 号 (1999 年 1 月)	イタリアのタオルミーナで開催された会計史国際会議の報告。	XVI・S・9
A0735	合崎堅二先生を偲ぶ	原田富士雄	155 巻 1 号 (1999 年 1 月)	合崎への追悼文。	XV・A・9
A0736	アメリカにおける監査研究の生成と展開—パラダイムと監査研究の座標軸—	鳥羽至英	155 巻 2 号 (1999 年 2 月)	アメリカにおける監査研究の生成と展開を 1950 年代の文献に遡って検討。	VII・P・9

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0737	書評：山口不二夫著『日本郵船会計史[財務会計編]』	西川 登	155 巻 2 号 (1999 年 2 月)	山口著『日本郵船会計史[財務会計編]』の書評。	XVI・A・8 (→IV・A・8)
A0738	シュメールにおける原価計算	夷谷廣政	155 巻 5 号 (1999 年 5 月)	会計の古代シュメールにおける原価計算について考察。	V・F・1
A0739	わが国商法における取得原価主義の沿革	松尾俊彦	156 巻 1 号 (1999 年 7 月)	わが国商法における取得原価主義の沿革について、明治期から昭和13 年商法改正までを検討。	XIV・A・8 (→IV・A・8)
A0740	ペンシルベニア鉄道における会計情報の作成・利用—業績評価と意思決定に関連して—	高栢真一	156 巻 1 号 (1999 年 7 月)	1840 年代後期から 1850 年代にかけてのペンシルベニア鉄道における会計情報の作成と利用について考究。	VI・P・7
A0741	和式帳合法の教育	田中孝治	156 巻 3 号 (1999 年 9 月)	江戸末期および明治期の庶民教育・初等教育における帳合法の教育について検討。	XII・A・7
A0742	複式簿記起源論「同時期説」への考察	片岡泰彦	156 巻 5 号 (1999 年 11 月)	複式簿記起源論における「同時期説」について考察。	III・G・7
A0743	暖簾の会計と社会	清水泰洋	156 巻 5 号 (1999 年 11 月)	19 世紀末から 20 世紀前半にかけてのアメリカにおける暖簾会計を再検討。	IV・P・7
A0744	わが国における会計学教育の発展—旧制高等商業教育機関を中心に—	中野常男	156 巻 6 号 (1999 年 12 月)	わが国における旧制高等商業教育機関における会計学教育について検討。	XII・A・8
A0745	期末棚卸商品の評価方法変遷の歴史—一六～一八世紀イギリスの簿記書分析を中心に—	渡邊 泉	156 巻 6 号 (1999 年 12 月)	16 世紀から 18 世紀のイギリス簿記書によって期末棚卸商品の評価方法の変遷を考究。	IV・J・7
A0746	カール・ケーファー教授を偲ぶ	安平昭二	157 巻 1 号 (2000 年 1 月)	Käfer への追悼文。	XV・K・9
A0747	書評：大西清彦著『財務公開思想の形成』	高尾裕二	157 巻 2 号 (2000 年 2 月)	大西著『財務公開思想の形成』の書評。	XVI・P・8 (→IV・P・8)
A0748	新井清光先生を偲ぶ	大塚宗春	157 巻 3 号 (2000 年 3 月)	新井への追悼文。	XV・A・9
A0749	染谷恭次郎先生を偲ぶ	片山 覚	157 巻 3 号 (2000 年 3 月)	染谷への追悼文。	XV・A・9
A0750	カーネギー・スチール社における価格設定と予算の作成—ペンシルベニア鉄道の会計機能の影響—	高栢真一	157 巻 6 号 (2000 年 6 月)	ペンシルベニア鉄道の会計機能がカーネギー・スチール社に与えた影響について検討。	VI・P・7

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0751	書評：尾畑 裕著『ドイツ原価理論学説史』	小林哲夫	157 巻 6 号 (2000 年 6 月)	尾畑著『ドイツ原価理論学説史』の書評。	XVI・K・8 (→V・K・8)
A0752	ベネット・コトルリ「簿記論」再考（一）	片岡泰彦	158 巻 1 号 (2000 年 7 月)	世界最初の複式簿記文献とされる Cotrugli の「簿記論」を再検討。	III・G・7
A0753	一七世紀ネーデルラントの会計事情—シモン・ステフィンの「簿記論」を中心として—	橋本武久	158 巻 1 号 (2000 年 7 月)	Stevin の「簿記論」の考察。	III・I・7
A0754	ベネット・コトルリ「簿記論」再考（二・完）	片岡泰彦	158 巻 2 号 (2000 年 8 月)	前掲論文 A0752 の続編。	XV・A・9
A0755	明治二三年商法（計算規定）とロエスレル第二草案	長久保如玄	158 巻 3 号 (2000 年 9 月)	明治 23 年商法（計算規定）における「計算書」の概念を、ロエスレル第二草案起草の過程から考察。	XIV・A・7 (IV・A・7)
A0756	近世商人と近代商業学校における和式帳合の法の教育の史的考察	田中孝治	159 巻 4 号 (2001 年 4 月)	近世商人と近代商業学校における和式帳合の法の教育について再検討。	XII・A・7
A0757	一六世紀アントウェルペンの会計実務	片岡泰彦	159 巻 5 号 (2001 年 5 月)	16 世紀アントウェルペンの会計実務について、印刷出版業者である Plantin の帳簿を基に検討。	III・I・7
A0758	財産目録の位置付け	百瀬房徳	159 巻 5 号 (2001 年 5 月)	財産目録の位置付けについて、17 世紀の Savary の『完全な商人』（1635）から現代まで概観し再検討。	IV・K・8
A0759	原価計算のルーツ	夷谷廣政	159 巻 5 号 (2001 年 5 月)	原価計算のルーツを古代シュメールに求めて検討。	V・F・1
A0760	アメリカ連結会計の生成・普及過程とその特質（一）	小栗崇資	159 巻 6 号 (2001 年 6 月)	19 世紀後半に遡りうるアメリカにおける連結会計の生成と普及過程およびその特質を考察。	IV・P・7
A0761	アメリカ連結会計の生成・普及過程とその特質（二・完）	小栗崇資	160 巻 1 号 (2001 年 7 月)	上掲論文 A0760 の続編。	IV・P・7
A0762	日本会計制度史研究の視点—会計（学）史と現代会計の接点—	千葉準一	160 巻 2 号 (2001 年 8 月)	わが国における会計史学の現況、および「日本会計（制度）史」の特殊性とその座標軸を考察。	I・A・0
A0763	書評：川端保至著『19 世紀ドイツ株式会社会計の研究』	高須教夫	160 巻 2 号 (2001 年 8 月)	川端著『19 世紀ドイツ株式会社会計の研究』の書評。	XVI・K・7 (→IV・K・7)
A0764	財産目録の類型	五十嵐邦正	160 巻 3 号 (2001 年 9 月)	Savary 以来の財産目録の類型について、貸借対照表との関係から考察。	IV・K・7

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0765	一九世紀イギリスの鉄道会社における固定資産概念及び利益概念の生成過程——一八三七年から一八四六年までのマンチェスター&パーミンガム鉄道会社の場合——(一)	佐々木重人	160 巻 3 号 (2001 年 9 月)	19 世紀イギリスの鉄道会社における固定資産概念と利益概念の生成過程について検討。	IV・J・7
A0766	朝鮮後期における「馬車會社」の開業と会計帳簿	杉本徳栄	160 巻 3 号 (2001 年 9 月)	李氏朝鮮後期における馬車會社の開業と会計帳簿について検討し、それらの記帳原理や計算構造上の特徴について考察。	IV・C・7
A0767	一九世紀イギリスの鉄道会社における固定資産概念及び利益概念の生成過程——一八三七年から一八四六年までのマンチェスター&パーミンガム鉄道会社の場合——(二・完)	佐々木重人	160 巻 4 号 (2001 年 10 月)	前掲論文 A0765 の続編。	IV・J・7
A0768	書評：鈴木一道著『イギリス管理会計の発展』	鈴木義夫	160 巻 5 号 (2001 年 11 月)	鈴木著『イギリス管理会計の発展』の書評。	XVI・J・8 (→VI・J・8)
A0769	二十世紀における米国会計学説の主潮概説	濱田弘作	160 巻 6 号 (2001 年 12 月)	20 世紀におけるアメリカ会計学説の主潮を論述。	II・P・8
A0770	財閥に於ける会計政策決定に対する所有者統制の構造	小野武美	161 巻 1 号 (2002 年 1 月)	わが国昭和戦前期の財閥における所有者統制と会計政策決定との関係について考究。	IV・A・8
A0771	植野郁太先生を偲ぶ	末政芳信	161 巻 4 号 (2002 年 4 月)	植野への追悼文。	XV・A・9
A0772	デュボン火薬会社における原価差異分析の展開	高栢真一	161 巻 5 号 (2002 年 5 月)	1912 年と 1913 年のデュボン火薬会社工場長会議議事録を基に、同社における原価差異分析の展開について検討。	IV・P・7
A0773	明治二十三年商法発布と和式帳合法	田中孝治	161 巻 6 号 (2002 年 6 月)	明治 23 年商法発布と和式帳合法の関連について検討。	III・A・7
A0774	書評：小栗崇資著『アメリカ連結会計生成史論』	高須教夫	162 巻 2 号 (2002 年 8 月)	小栗著『アメリカ連結会計生成史論』の書評。	XVI・P・8 (→IV・P・8)
A0775	覚書帳の変遷に関する研究	谷岡弘二	162 巻 6 号 (2002 年 12 月)	イタリアの簿記書とイギリス・アメリカの簿記書における覚書帳の位置付けの相違について考察。	III・S・7

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0776	二十世紀初頭における業績評価会計の展開—デュポン火薬会社の事例を中心として—	高栢真一	163 巻 5 号 (2003 年 5 月)	20 世紀初頭のデュポン火薬会社の業績評価会計の展開について第一次史料を基に検討。	VI・P・7
A0777	戦前期工場史料における Non Monetary Accounting とその現代的意義	山口不二夫	164 巻 1 号 (2003 年 7 月)	戦前期工場史料における Non Monetary Accounting とその現代的意義について考究。	IV・A・7
A0778	江戸商人の監査	田中孝治	164 巻 3 号 (2003 年 9 月)	江戸時代の商人の監査について、大規模かつ「番頭経営」であった伊勢商人を対象に考察。	VII・A・7
A0779	欧米制度の移植と日本型会計制度	久保田秀樹	164 巻 4 号 (2003 年 10 月)	「製造工業原価計算要綱」と「企業会計原則」の一般原則の成立を題材にして、欧米制度の移植と日本型会計制度との関連について検討。	IV・A・9
A0780	一九世紀ドイツの株式会社の資産評価実務	川端保至	164 巻 5 号 (2003 年 11 月)	19 世紀ドイツの株式会社の資産評価実務について考察。	IV・K・7
A0781	書評：建部宏明著『日本原価計算理論形成史研究』	平林喜博	165 巻 3 号 (2004 年 3 月)	建部著『日本原価計算理論形成史研究』の書評。	XVI・A・8 (→V・A・8)
A0782	デュポン火薬会社における意思決定会計の展開	高栢真一	165 巻 5 号 (2004 年 5 月)	20 世紀初頭デュポン火薬会社の意思決定会計がいかに展開されていたかについて、第一次史料を基に考察。	VI・P・7
A0783	山上達人先生を偲んで	向山敦夫 國部克彦	165 巻 6 号 (2004 年 6 月)	山上への追悼文。	XV・A・9
A0784	ジョサイア・ウェッジウッドによる原価の計算と資本主義の精神	福島吉春	166 巻 5 号 (2004 年 11 月)	Darwin の歴史観を探求するために、Wedgwood による原価の計算などを紹介。	V・J・7
A0785	書評：G. ザイヒト著（戸田博之訳）『ドイツ財務会計論の系譜』	五十嵐邦正	166 巻 6 号 (2004 年 12 月)	戸田訳（Seicht 原著）『ドイツ財務会計論の系譜』の書評。	XVI・K・8 (→IV・K・8)
A0786	三つの歴史的な原価観	千葉準一 吉原直子	168 巻 1 号 (2005 年 7 月)	原価評価や時価評価が強調される場合の社会的（制度的）・歴史的意味について検討。	IV・S・8
A0787	渡邊 泉著『損益計算の進化』	石川純治	168 巻 1 号 (2005 年 7 月)	渡邊著『損益計算の進化』の書評。	XVI・J・8
A0788	西欧諸国における十六世紀から十九世紀の覚書帳について	谷岡弘二	168 巻 2 号 (2005 年 8 月)	16 世紀から 19 世紀までの西欧簿記書において覚書帳が果たした役割を考察。	III・S・7

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0789	『商用簿記法初歩』とその影響	田中孝治	168 巻 2 号 (2005 年 8 月)	Packard の著書 (1868) の邦語訳である『商用簿記法初歩』の内容を紹介するとともに、それが明治期の簿記教育に与えた影響について検討。	III・A・7
A0790	ウェッジウッドの製品棚卸評価と配当方針	中 善宏	168 巻 3 号 (2005 年 9 月)	18 世紀の Wedgwood における期末製品の評価方法や期間損益と配当との関係を考察。	IV・J・7 (→VV・J・7)
A0791	吉岡正道著『フランス会計原則の史的展開』	大下丈平	168 巻 3 号 (2005 年 9 月)	吉岡著『フランス会計原則の史的展開』の書評。	XVI・H・8 (→IV・H・8)
A0792	商法計算・監査規定の近代化と「企業会計原則」	久保田秀樹	168 巻 4 号 (2005 年 10 月)	第二次世界大戦後の企業会計原則と商法における計算・監査規定の近代化を考察。	XIV・A・9
A0793	歴史から見た二つの会計観 (一)	渡邊 泉	168 巻 6 号 (2005 年 12 月)	フローとストックという二つの会計観について、複式簿記の生成時から現代にいたるまでの変遷を概観。	IV・S・6
A0794	歴史から見た二つの会計観 (二・完) —収益費用観から資産負債観への変容—	渡邊 泉	169 巻 1 号 (2006 年 1 月)	上掲論文 A0793 の続編。	IV・S・6
A0795	アメリカ会計学説におけるインプット理論の展開 (一)	竹島貞治	170 巻 1 号 (2006 年 7 月)	Vatter, Sorter, McCarthy などの学説の展開過程を、インプット理論としての観点から再検討。	IV・P・9
A0796	書評：土方 久著『複式簿記の歴史と論理』	中野常男	170 巻 1 号 (2006 年 7 月)	土方著『複式簿記の歴史と論理』の書評。	XVI・K・5 (→III・K・5)
A0797	アメリカ会計学説におけるインプット理論の展開 (二・完)	竹島貞治	170 巻 2 号 (2006 年 8 月)	前掲論文 A0795 の続編。	IV・P・9
A0798	書評：豊島義一著『長崎造船所原価計算生成史』	平林喜博	170 巻 2 号 (2006 年 8 月)	豊島著『長崎造船所原価計算生成史』の書評。	XVI・A・8 (→V・A・8)
A0799	二〇世紀初頭のアメリカにおける第三計算書の意義 — Thomas Warner Mitchell の主張を中心に —	小林竜二	170 巻 3 号 (2006 年 9 月)	第三の計算書とされるキャッシュ・フロー計算書の 20 世紀初頭アメリカにおける意義について、Mitchell の所説を基に検討。	IV・P・7
A0800	二〇世紀における会計学研究の回顧とその検討—ドイツの貸借対照表論の形成をめぐる問題—	興津裕康	170 巻 4 号 (2006 年 10 月)	Schmalenbach の動的貸借対照表論を中心として、20 世紀における会計学研究を回顧・考究。	IV・K・8

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0801	Simon Stevin「簿記論」の原型	橋本武久	170 巻 4 号 (2006 年 10 月)	近年発見された Stevin の著書『新発明』(1581) を考察。	III・I・7
A0802	第十一回会計史世界会議に参加して	片岡泰彦	170 巻 5 号 (2006 年 11 月)	第十一回会計史世界会議の大会参加記。	XVI・H・9
A0803	二〇世紀初頭GM社における割り当て予算管理の展開	高栢真一	171 巻 2 号 (2007 年 2 月)	20 世紀初頭のGM社における割当予算管理の展開過程について検討。	VI・P・8
A0804	企業会計基準と商法(会社法)との交渉パターンの変容	久保田秀樹	171 巻 2 号 (2007 年 4 月)	昭和期と平成期における企業会計基準と会社法(商法)の交渉パターンの変容について検討。	XIV・A・9
A0805	書評：北村浩一著『J.O. マッキンゼーの予算統制論』	上總康行	171 巻 3 号 (2007 年 3 月)	北村著『J.O. マッキンゼーの予算統制論』の書評。	XVI・P・9 (→VI・P・9)
A0806	覚書帳の分割に関する研究	谷岡弘二	171 巻 6 号 (2007 年 6 月)	イギリスとアメリカにおける覚書帳の分割方法の発展を考察。	III・J・7 (III・P・7)
A0807	明治初期の複式簿記書の研究—『帳合之法』の果たした役割—	津村怜花	172 巻 6 号 (2007 年 6 月)	『帳合之法』の啓蒙的役割と、簿記書としての意義を考察。	III・A・7
A0808	認識基準の史的展開の再吟味	渡邊 泉	173 巻 1 号 (2008 年 1 月)	費用・収益の認識基準の史的展開を考察し、複式簿記の本来的役割を再検討。	IV・S・6
A0809	経営システムとしての管理会計	廣本敏郎	173 巻 2 号 (2008 年 2 月)	経営システムとしての管理会計について、その実務を史的に検討。	VI・P・9
A0810	アメリカ巨大企業における管理会計の生成	高栢真一	173 巻 2 号 (2008 年 2 月)	アメリカ巨大企業における管理会計の生成を第一次史料を基に検討。	VI・P・8
A0811	書評：中野常男編著『複式簿記の構造と機能』	興津裕康	173 巻 4 号 (2008 年 4 月)	中野編著『複式簿記の構造と機能』の書評。	XVI・S・6 (→III・S・6)
A0812	書評：桑原正行著『アメリカ会計理論生成史』	清水泰洋	173 巻 4 号 (2008 年 4 月)	桑原著『アメリカ会計理論生成史』の書評。	XVI・P・8 (→IV・P・8)
A0813	日本の管理会計史の断層面—文化の重層性とアーキタイプス—	岡野 浩	173 巻 5 号 (2008 年 5 月)	日本の管理会計の生成発展について、社会史・文化史としての管理会計史の叙述に関わる問題を考察。	VI・A・9
A0814	飯野利夫先生を偲ぶ	安藤英義	173 巻 5 号 (2008 年 5 月)	飯野への追悼文。	XV・A・9
A0815	サービス組織の原価計算研究の史的展開—活動基準の原価計算の受容と展開を中心に—	岡田幸彦	174 巻 1 号 (2008 年 7 月)	サービス組織の原価計算研究を文献史的に整理し、ABCやABMが支持されるようになった背景やABCモデルが果たした役割について検討。	XV・P・9

番 号	論 文 等 の 標 題	執 筆 者	巻 号 (年 月)	考 究 内 容 の 要 旨	分 類
A0816	書評：渡邊 泉著『歴史から学ぶ会計』	原 征士	174 巻 2 号 (2008 年 8 月)	渡邊著『歴史から学ぶ会計』の書評。	XVI・S・6 (→I・S・6)
A0817	「会社経理統制令」(1940)の会計規制近代化上の意義	久保田秀樹	174 巻 5 号 (2008 年 11 月)	従来は会計研究サイドからほとんど関心が払われなかった「会社経理統制令」(1940)の会計規制近代化上の意義について検討。	XIV・A・9

Ⅳ 索 引：人名別索引と分類基準別索引

第Ⅳ節では、前節に掲げた「文献目録」に関連して、分析対象として抽出した研究論文等の執筆者についての「人名別索引」（Ⅳ - 1），および、複合的分類基準に基づく研究論文等の考究内容の分析結果についての「分類別基準索引」（Ⅳ - 2）をそれぞれ示すことにする。

Ⅳ - 1 人名別索引

執筆者名	番 号
合 崎 堅二	A0478 A0634
會 田 義雄	A0566
青 木 脩	A0311
青 木 茂男	A0432 A0447
青 木 茂	A0229
青木倫太郎	A0334 A0356
青 柳 文司	A0238 A0244 A0245 A0261 A0274 A0276
浅羽 二郎	A0215 A0243 A0309
安 宅 文雄	A0341
天 野 恭徳	A0196 A0240
新 井 清光	A0316 A0647
新井益太郎	A0433
有 本 邦造	A0071 A0091 A0093 A0112 A0114
安 藤 英義	A0434 A0480 A0552 A0637 A0722 A0814
飯 塚 勲	A0558 A0562
飯 野 利夫	A0164 A0463
五十嵐邦正	A0526 A0557 A0575 A0592 A0644 A0764 A0785
池田英次郎	A0181

執筆者名	番 号
石 川 純治	A0787
井 尻 雄士	A0723
泉 谷 勝美	A0239 A0241 A0292 A0318 A0351 A0389 A0392 A0394 A0422 A0449 A0469 A0489 A0510 A0556 A0571 A0595 A0680
和 泉 三郎 (黒澤 清)	A0075 A0076 A0100 A0129
市 原 季一	A0345 A0466
伊 藤 邦雄	A0563
井 戸 一元	A0694
井 上 清	A0259 A0270 A0308 A0312 A0315 A0320 A0362 A0425 A0427 A0503 A0546 A0569
今 福 愛志	A0441
岩 田 巖	A0123
岩 辺 晃三	A0620 A0653
夷 谷 廣政	A0674 A0717 A0738 A0759
植 野 郁太	A0348
上 野 陽一	A0089
内 川 菊義	A0379 A0645

執筆者名	番号			
江村 稔	A0176	A0249		
遠藤 一久	A0482	A0693		
遠藤 久夫	A0677			
大石善四郎	A0095			
大川戸猶吉	A0173			
大倉 義雄	A0140			
大下 丈平	A0791			
大島 国雄	A0277			
太田 哲三	A0101	A0150	A0156	A0161
	A0174			
大谷顕太郎	A0051			
大谷壽太郎	A0133	A0135		
大塚 宗春	A0748			
大西 清彦	A0673			
大森 研三	A0022			
大矢知浩司	A0305			
大藪 俊哉	A0622			
岡下 敏	A0350	A0376	A0391	A0430
	A0445	A0457	A0496	A0534
	A0550	A0572	A0593	A0635
	A0666	A0731		
岡田 誠一	A0002	A0003	A0004	A0010
	A0011	A0014	A0015	A0016
	A0017	A0018	A0019	A0020
	A0022	A0023	A0025	A0029
	A0031	A0032	A0035	A0038
	A0039	A0040	A0044	A0045
	A0046	A0047	A0048	A0049
	A0050	A0052	A0073	A0074
	A0081	A0122		
岡田 幸彦	A0815			
岡野 浩	A0813			
岡本 愛次	A0188			
岡本 清	A0264			
興津 裕康	A0800	A0811		
小倉栄一郎	A0177	A0228	A0310	A0382
	A0513			
小栗 崇資	A0606	A0607	A0760	A0761
尾崎 義夫	A0085			
小篠 相一	A0030			

執筆者名	番号			
小高 泰雄	A0235			
小野 武美	A0770			
上總 康行	A0805			
片岡 泰彦	A0339	A0476	A0481	A0494
	A0527	A0538	A0594	A0609
	A0657	A0683	A0701	A0705
	A0730	A0734	A0742	A0752
	A0754	A0757	A0802	
片岡 義雄	A0065	A0068	A0109	A0166
	A0169	A0171	A0172	A0191
	A0293	A0295	A0297	A0306
	A0332			
片野 一郎	A0260	A0385	A0388	
片山 覚	A0749			
加藤 盛弘	A0352	A0354	A0369	A0377
金子利八郎	A0128			
金戸 武	A0574	A0669		
河田 信	A0712			
鎌田 信夫	A0246			
上村 久雄	A0219			
川端 保至	A0492	A0641	A0684	A0733
	A0780			
神田 忠雄	A0213			
岸 悦三	A0325	A0326	A0333	A0380
	A0468	A0470	A0493	A0678
岸本英八郎	A0280			
北村 敬子	A0692			
木戸田 力	A0584			
木村 禎橘	A0090	A0198		
木村和三郎	A0092	A0094	A0098	A0099
	A0107	A0110	A0113	A0159
	A0160	A0299	A0302	
久野 光朗	A0548	A0551	A0565	A0681
	A0695	A0697		
久保田音二郎	A0175	A0383		
久保田秀樹	A0670	A0779	A0792	A0804
	A0817			
栗田 真造	A0346			
黒澤 清	A0054	A0055	A0056	A0057
	A0058	A0059	A0060	A0061

執筆者名	番号			
	A0062	A0064	A0102	A0103
	A0106	A0118	A0124	A0125
	A0226	A0255	A0288	A0294
	A0296	A0298	A0301	A0335
	A0344	A0349	A0378	A0386
	A0419	A0421	A0424	A0429
	A0435	A0448	A0450	A0501
	A0517	A0519	A0524	A0544
	A0580	A0582	A0585	A0586
	A0603			
桑原 幹夫	A0368	A0403	A0464	A0495
河野 一英	A0509			
河野 正男	A0587			
高栢 真一	A0709	A0729	A0740	A0750
	A0772	A0776	A0782	A0803
	A0810			
小口 好昭	A0689			
國部 克彦	A0783			
小島男佐夫	A0165	A0178	A0187	A0203
	A0221	A0231	A0237	A0253
	A0254	A0256	A0257	A0258
	A0262	A0267	A0281	A0290
	A0304	A0322	A0323	A0331
	A0399	A0426	A0436	A0459
	A0516	A0525	A0530	A0537
	A0555	A0564	A0578	A0601
後藤幸之助	A0314	A0373		
小西 一正	A0364	A0406		
小林 健吾	A0443	A0444	A0532	
小林 哲夫	A0751			
小林 竜二	A0799			
児林百合松	A0007	A0008	A0009	
斎藤 静樹	A0559	A0650		
斉藤 隆夫	A0375	A0390	A0483	
酒井 勲二	A0417			
酒井 文雄	A0395	A0397		
坂野 観司	A0236			
阪本 安一	A0163	A0265		
櫻井 通晴	A0664	A0696		
佐々木重人	A0765	A0767		

執筆者名	番号			
笹淵 文男	A0359			
佐藤 博明	A0396			
佐藤 倫正	A0621	A0623	A0638	
佐橋 義金	A0370			
敷田 礼二	A0205			
清水 宗一	A0472			
清水 泰洋	A0743	A0812		
下野直太郎	A0001	A0053	A0063	A0067
	A0084	A0108		
白井 佐敏	A0182	A0247	A0283	A0405
	A0460	A0488		
末政 芳信	A0771			
杉本 秋男	A0077	A0078	A0079	A0080
杉本 徳栄	A0696	A0663	A0766	
鈴木 稔	A0531			
鈴木 一道	A0668			
鈴木 義夫	A0768			
砂川 洋幸	A0321			
瀬尾幸三郎	A0041			
徐 龍達	A0358	A0361		
相馬 正三	A0139			
染谷恭次郎	A0400	A0512	A0561	A0576
	A0602	A0614	A0640	A0711
	A0713	A0715		
孫 徳栄	(→ 杉本 徳栄)			
高尾 裕二	A0747			
高須 教夫	A0579	A0658	A0763	A0774
高田 正淳	A0486			
高寺 貞男	A0207	A0209	A0291	A0393
	A0508			
高橋 賢	A0716			
高橋吉之助	A0194	A0330		
高橋 志郎	A0578			
竹島 貞治	A0795	A0797		
武田 孟	A0341			
武田 隆二	A0263	A0269	A0453	
但馬 弘衛	A0104	A0105		
田中 章義	A0411			
田中 孝治	A0741	A0756	A0773	A0778

執筆者名	番号			
	A0789			
田中藤一郎	A0069	A0117	A0126	A0127
	A0132	A0137	A0144	A0145
	A0148	A0149		
田中 弘	A0539			
谷岡 弘二	A0775	A0788	A0806	
千葉 準一	A0415	A0520	A0523	A0540
	A0541	A0590	A0591	A0610
	A0612	A0617	A0628	A0639
	A0671	A0672	A0699	A0762
	A0786			
津曲 直躬	A0547			
辻 厚生	A0225	A0278	A0313	A0338
	A0360	A0372	A0533	
辻 治躬	A0141			
辻山 栄子	A0479			
津村 怜花	A0807			
津守 常弘	A0408	A0416	A0598	A0599
	A0685			
土岐 政蔵	A0183	A0197	A0211	A0220
鳥羽 至英	A0497	A0500	A0736	
友岡 賛	A0687			
中 善宏	A0790			
中川美佐子	A0688			
長久保如玄	A0704	A0707	A0720	A0755
中込 世雄	A0619			
中島 省吾	A0180	A0227	A0633	
中島 精二	A0005	A0006		
中西 旭	A0336	A0371	A0387	A0475
	A0484			
中野 勲	A0529			
中野 常男	A0553	A0615	A0636	A0654
	A0667	A0744	A0796	
永野 則雄	A0721	A0725		
中村 茂男	A0024	A0026	A0027	A0034
	A0037			
中村 忠	A0624			
中村宣一郎	A0284	A0286	A0471	
中村 萬次	A0212	A0217	A0252	A0273
	A0279	A0307	A0328	A0342

執筆者名	番号			
	A0357			
成田 修身	A0727			
西川 登	A0737			
西川孝治郎	A0111	A0116	A0119	A0120
	A0131	A0138	A0143	A0146
	A0147	A0152	A0154	A0155
	A0186	A0190	A0195	A0199
	A0200	A0201	A0202	A0208
	A0216	A0232	A0233	A0234
	A0289	A0317	A0340	A0343
	A0363	A0367	A0374	A0384
	A0401	A0423	A0437	A0442
	A0446	A0467	A0477	A0507
西澤 脩	A0518 A0708			
沼田 嘉穂	A0115			
野瀬 新蔵	A0184	A0185	A0192	A0193
野村健太郎	A0652			
野本悌之助	A0066			
橋本 武久	A0753	A0801		
長谷川安兵衛	A0072			
畠中 福一	A0087	A0088		
馬場 克三	A0210	A0347		
濱田 弘作	A0506	A0522	A0536	A0554
	A0629	A0651	A0700	A0702
	A0726	A0769		
林 良治	A0409	A0414	A0682	
原 征士	A0816			
原 俊雄	A0714			
原田富士雄	A0589	A0735		
東 爽五郎	A0063			
東山 英次	A0600			
久野 秀男	A0543			
土方 久	A0491	A0549		
平井泰太郎	A0033	A0036		
平田 央	A0086			
平林 喜博	A0568	A0611	A0618	A0656
	A0679	A0690	A0710	A0781
	A0798			
平松 一夫	A0560			
廣本 敏郎	A0542	A0613	A0809	

執筆者名	番号			
福島 吉春	A0627	A0724	A0784	
藤井 健人	A0567			
藤田 幸男	A0732			
藤巻 治吉	A0083			
藤原 泰	A0130			
本田 耕一	A0465			
本田 利夫	A0151	A0153	A0157	A0167
	A0170	A0266	A0285	A0287
	A0300	A0303		
松尾 憲橘	A0514			
松尾 俊彦	A0739			
松谷 靖二	A0581	A0583		
松原 一泰	A0438	A0454	A0458	A0498
	A0504			
松本 剛	A0461			
松本 雅男	A0121			
松本 正信	A0250	A0329	A0337	A0528
宮上 一男	A0179	A0268	A0271	A0272
宮本 匡章	A0648			
宮本 豊	A0012	A0013		
向山 敦夫	A0783			
村瀬 儀祐	A0353	A0355		
茂木 虎雄	A0206	A0214	A0222	A0223
	A0224	A0242	A0275	A0282
	A0319	A0327	A0418	A0439
	A0473	A0499	A0545	A0625
	A0718	A0728		
百瀬 房徳	A0758			
森 信六	A0027			
森川八洲男	A0402	A0404	A0573	A0630
守永 誠治	A0324			
諸井勝之助	A0248			
安平 昭二	A0431	A0451	A0452	A0455
	A0746			
柳沢 豊勝	A0082			
矢部 忠保	A0410	A0413		
山浦 久司	A0462	A0588	A0597	
山上 達人	A0299	A0302		
山口 達良	A0631			
山口不二夫	A0655	A0686	A0777	

執筆者名	番号			
山崎 英雄	A0158			
山下 勝治	A0134	A0136	A0162	A0168
	A0189			
山下 寿文	A0642			
山下 正喜	A0485	A0490	A0505	A0511
	A0675			
山地 秀俊	A0661			
山邊 六郎	A0456			
山本 紀生	A0719			
尹 根鎬	A0365	A0366	A0440	
吉原 直子	A0786			
若杉 明	A0502			
渡邊 泉	A0474	A0521	A0535	A0676
	A0691	A0698	A0703	A0745
	A0793	A0794	A0808	
渡邊 進	A0142	A0251		
渡辺 和夫	A0706			
渡部 寅二	A0042	A0070		
渡部 裕亘	A0692			
渡邊 康良	A0665			
渡辺 陽一	A0420	A0570	A0608	A0626
渡部 義雄	A0044			
W. Busse von Colbe (尾畑 裕訳)	A0646			
R.H.Homburger	A0398			
C.T. Horngren (伊藤邦雄・廣本敏郎訳)	A0649			
M. Schweitzer (興津裕康訳)	A0643	A0659	A0662	
B.S.Yamey (片岡泰彦訳)	A0632			
著 者 不 詳	A0204	A0219	A0230	A0407
	A0412	A0428	A0487	A0515
	A0596	A0604	A0605	A0616

IV - 2 分類基準別索引

分類	番号
I・A・0	A0761
I・A・8	A0140 A0414 A0420 A0423 A0428
I・A・9	A0287 A0293 A0707
I・J・8	A0535
I・K・7	A0508
I・K・9	A0295 A0297 A0300
I・P・7	A0553
I・P・9	A0397 A0722
I・S・0	A0261 A0699 A0701 A0720 A0724 A0725
I・S・1	A0521
I・S・5	A0205
I・S・7	A0214
I・S・8	A0434 A0505
I・S・9	A0513 A0524 A0676
II・A・9	A0252 A0638
II・F・1	A0688 A0716
II・P・8	A0768
II・P・9	A0705
II・S・8	A0721
III・A・7	A0001 A0005 A0006 A0007 A0008 A0016 A0068 A0069 A0110 A0111 A0115 A0118 A0119 A0130 A0132 A0134 A0137 A0139 A0142 A0145 A0151 A0154 A0188 A0196 A0201 A0203 A0215 A0228 A0231 A0232 A0288 A0309 A0316 A0339 A0341 A0362 A0366 A0381 A0383 A0445 A0466 A0476 A0619 A0652 A0772 A0788 A0806
III・A・8	A0047 A0052 A0066 A0083 A0107 A0138 A0149 A0194 A0382
III・A・9	A0027 A0082 A0200
III・B・8	A0070 A0092 A0141
III・C・7	A0021 A0050 A0360 A0364 A0365 A0439 A0659 A0662
III・G・1	A0081
III・G・4	A0019 A0116 A0164 A0169 A0177 A0185 A0241 A0242 A0307 A0311

分類	番号
	A0314 A0319 A0346 A0350 A0391 A0421 A0448 A0468 A0488 A0509 A0529 A0570 A0593
III・G・5	A0102 A0105 A0106 A0148
III・G・7	A0002 A0003 A0018 A0028 A0030 A0031 A0032 A0033 A0034 A0036 A0037 A0054 A0121 A0124 A0147 A0150 A0166 A0168 A0170 A0171 A0317 A0318 A0379 A0464 A0492 A0536 A0571 A0677 A0682 A0700 A0741 A0751
III・H・4	A0291
III・H・5	A0554
III・H・7	A0227 A0246 A0324 A0332
III・I・4	A0220
III・I・7	A0043 A0044 A0125 A0126 A0131 A0577 A0752 A0756 A0800
III・J・4	A0048
III・J・7	A0058 A0259 A0264 A0280 A0289 A0322 A0330 A0425 A0435 A0473 A0520 A0534 A0600 A0635 A0666 A0671 A0805
III・J・8	A0636
III・K・4	A0375 A0526 A0545
III・K・5	A0109 A0390 A0493
III・K・6	A0108
III・K・7	A0004 A0009 A0017 A0038 A0053 A0057 A0061 A0155 A0160 A0361 A0409 A0412 A0424 A0426 A0429 A0430 A0444 A0456 A0459 A0495 A0502 A0533 A0537 A0549 A0568 A0592 A0608 A0634 A0656 A0665 A0730
III・K・8	A0097 A0098 A0099 A0100 A0127 A0181 A0182 A0186 A0305
III・M・7	A0059
III・M・8	A0039
III・N・7	A0064
III・P・7	A0055 A0056 A0060 A0063 A0306

分類	番号
	A0550 A0552 A0564 A0614 A0653 A0694 A0696 A0713
III・P・8	A0678
III・P・9	A0499
III・S・0	A0067 A0380 A0718
III・S・2	A0467
III・S・5	A0176 A0202 A0235 A0244 A0303
III・S・7	A0010 A0011 A0014 A0015 A0020 A0023 A0049 A0136 A0143 A0144 A0190 A0469 A0487 A0631 A0774 A0787
III・S・8	A0022 A0086 A0087 A0091 A0093 A0114 A0416
IV・A・7	A0512 A0628 A0668 A0776
IV・A・8	A0080 A0113 A0210 A0385 A0386 A0601 A0650 A0685 A0769
IV・A・9	A0221 A0222 A0223 A0586 A0597 A0627 A0641 A0654 A0778
IV・C・7	A0765
IV・G・4	A0165 A0211
IV・G・5	A0078
IV・G・7	A0112
IV・H・7	A0325 A0349 A0357 A0401 A0404 A0548
IV・H・9	A0285 A0286
IV・I・9	A0310
IV・J・5	A0519 A0522 A0690
IV・J・7	A0209 A0290 A0356 A0367 A0494 A0497 A0503 A0589 A0590 A0596 A0599 A0609 A0610 A0616 A0702 A0744 A0764 A0766 A0789
IV・J・8	A0218 A0463 A0686 A0693
IV・J・9	A0538 A0539 A0540
IV・K・7	A0122 A0163 A0178 A0273 A0419 A0447 A0449 A0460 A0475 A0480 A0490 A0640 A0683 A0732 A0763 A0779
IV・K・8	A0076 A0079 A0095 A0096 A0213 A0237 A0270 A0374 A0415 A0433 A0479 A0481 A0491 A0556 A0574 A0591 A0643 A0681 A0757 A0799

分類	番号
IV・K・9	A0077 A0212 A0308 A0525 A0607 A0645
IV・P・7	A0193 A0239 A0248 A0312 A0351 A0353 A0471 A0605 A0606 A0672 A0742 A0759 A0760 A0771 A0798
IV・P・8	A0183 A0184 A0206 A0207 A0240 A0258 A0274 A0313 A0347 A0368 A0376 A0378 A0392 A0394 A0396 A0403 A0437 A0478 A0583 A0637 A0664
IV・P・9	A0245 A0267 A0268 A0269 A0272 A0278 A0315 A0352 A0354 A0358 A0407 A0413 A0417 A0440 A0453 A0457 A0561 A0566 A0578 A0598 A0620 A0622 A0648 A0794 A0796
IV・R・8	A0687
IV・S・5	A0161
IV・S・6	A0262 A0792 A0793 A0807
IV・S・7	A0158 A0159 A0216
IV・S・8	A0669 A0785
IV・S・9	A0162
IX・A・9	A0576
IX・P・8	A0327 A0369
IX・P・9	A0247
V・A・7	A0484 A0489 A0504 A0510
V・F・1	A0737 A0758
V・J・7	A0084 A0340 A0580 A0582 A0626 A0783
V・J・8	A0271
V・J・9	A0667
V・K・7	A0408 A0567
V・K・8	A0180 A0217 A0321
V・P・7	A0204 A0224 A0299 A0337 A0723
V・P・8	A0094 A0174 A0263
V・P・9	A0302 A0517 A0557 A0612 A0715
V・S・5	A0229 A0320 A0673
V・S・7	A0236
V・S・8	A0120 A0195 A0674
VI・A・9	A0234 A0647 A0812
VI・P・7	A0277 A0708 A0728 A0739 A0749 A0775 A0781

分類	番号				
VI・P・8	A0175	A0282	A0442	A0443	A0532
	A0541	A0684	A0802	A0809	
VI・P・9	A0191	A0192	A0283	A0359	A0531
	A0808				
VI・S・9	A0071				
VII・A・7	A0777				
VII・A・8	A0238	A0323			
VII・A・9	A0523	A0551	A0646		
VII・J・7	A0402	A0573			
VII・J・8	A0496				
VII・P・7	A0461				
VII・P・8	A0304	A0363	A0405		
VII・P・9	A0530	A0735			
VII・S・3	A0065				
X・A・8	A0172	A0579			
X・A・9	A0581	A0584	A0585	A0710	A0712
	A0714				
X・B・3	A0090				
X・P・9	A0335				
X・S・8	A0275				
XI・S・9	A0279				
XII・A・7	A0197	A0740	A0755		
XII・A・8	A0743				
XII・A・9	A0260	A0527			
XIII・A・9	A0431				
XIII・J・8	A0042				
XIII・P・7	A0041	A0167			
XIV・A・7	A0754				
XIV・A・8	A0103	A0104	A0703	A0738	A0791
XIV・A・9	A0089	A0706	A0719	A0804	A0816
XIV・J・7	A0085				
XV・A・7	A0040	A0062	A0129	A0146	A0157
	A0187				
XV・A・9	A0173	A0199	A0249	A0250	A0251
	A0265	A0266	A0328	A0329	A0331
	A0333	A0334	A0336	A0342	A0343
	A0344	A0345	A0348	A0355	A0371
	A0372	A0399	A0406	A0410	A0432
	A0452	A0455	A0462	A0485	A0501
	A0547	A0558	A0565	A0603	A0615
	A0617	A0618	A0621	A0623	A0625

分類	番号				
	A0630	A0632	A0633	A0644	A0651
	A0691	A0692	A0734	A0747	A0748
	A0753	A0770	A0782	A0813	
XV・G・7	A0483				
XV・G・9	A0388				
XV・J・9	A0254	A0477			
XV・K・7	A0450	A0451	A0454		
XV・K・8	A0035	A0189	A0658	A0661	
XV・K・9	A0198	A0298	A0301	A0389	A0465
	A0642	A0745			
XV・P・10	A0814				
XV・P・7	A0458				
XV・P・8	A0088				
XV・P・9	A0179	A0226	A0253	A0284	A0387
XV・S・9	A0731				
XVI・A・7	A0153	A0233	A0422	A0500	A0506
	A0670				
XVI・A・8	A0516	A0542	A0588	A0639	A0736
	A0780	A0797			
XVI・A・9	A0117	A0208	A0400	A0446	A0486
	A0511	A0518	A0575	A0613	A0695
	A0726				
XVI・G・4	A0012				
XVI・G・5	A0243	A0276	A0498	A0555	A0602
	A0717				
XVI・G・7	A0123	A0219	A0225	A0727	
XVI・G・9	A0256	A0257	A0338	A0370	A0384
	A0393	A0474	A0675	A0680	
XVI・H・5	A0470				
XVI・H・7	A0051				
XVI・H・8	A0790				
XVI・H・9	A0801				
XVI・I・9	A0255				
XVI・J・4	A0045	A0046			
XVI・J・5	A0515				
XVI・J・7	A0013	A0025	A0438	A0544	A0679
	A0698				
XVI・J・8	A0128	A0587	A0649	A0767	A0786
XVI・K・5	A0795				
XVI・K・7	A0697	A0729	A0762		
XVI・K・8	A0133	A0135	A0156	A0395	A0482

分類	番号
	A0528 A0543 A0569 A0624 A0629 A0689 A0750 A0784
XVI・K・9	A0572
XVI・P・7	A0546
XVI・P・8	A0156 A0562 A0595 A0709 A0711 A0746 A0773 A0811
XVI・P・9	A0230 A0398 A0411 A0441 A0660 A0663 A0803
XVI・S・5	A0029 A0281 A0373 A0418 A0472 A0594

分類	番号
XVI・S・6	A0326
XVI・S・7	A0072 A0073 A0074 A0152 A0657 A0810 A0815
XVI・S・8	A0075 A0101
XVI・S・9	A0024 A0026 A0292 A0294 A0296 A0377 A0427 A0436 A0507 A0514 A0559 A0560 A0563 A0604 A0611 A0655 A0704 A0733

V 時系列分析の概要

V - 1 時代区分と分析結果の全体的概要

V - 1 - 1 三種類の時代区分

本稿の目的は、既述のように、会計学に関する学術誌として、わが国でもっとも長い歴史を有する『會計』を取り上げ、同誌に掲載された論稿から会計史に関わる研究論文等（合計 817 編）を抽出し、それぞれの論稿における考究内容を、第Ⅱ節で示した三つの個別的分類基準を組み合わせた複合的分類基準を用いて体系的に整理・分析することにより、同誌が創刊された 1917 年から 2008 年に至るまでの期間に見出される、わが国における会計史研究の展開とその研究上の特徴を明らかにすることにある。

そこで、本節では、第Ⅲ節で提示した「文献目録」に整理・集約された基礎データに基づき、会計史に関わる研究論文等として抽出された論稿の分析、特に時系列分析を進めることにするが、しかし、その前に本稿で試みた三種類の時代区分について概説することにした。

『會計』は、それが創刊された 1917 年を起点とし、現時点での帰着点を 2008 年と措定すれば、90 年超の歴史を有している。このような歴史の流れの中で同誌に掲載された会計史に関わる研究論文等を時系列的観点から分析するために、本稿では、『會計』の歴史を、まず大きく二つの時代に区分している。すなわち、『會計』の創刊号が刊行された 1917 年から第二次世界大戦下で一時的に休刊を余儀なくされた 1944 年に至るまでの期間を「大正～昭和戦前・戦中期」（以後、便宜上「戦前」と略す）と、『會計』が第二次世界大戦の敗戦後に復刊された 1949 年から 2008 年に至るまでの期間を「昭和戦後～平成期」（以後、便宜上「戦後」と略す）である。そして、その上で、これら二つの時代に見られる時系列的な趨勢変化の特徴を明らかにしようと企図している。

次に、考察対象とする期間（1917～2008 年）を、おおよそ 10 年という年数単位で機械的に八つの期間に区分して分析している。すなわち、『會計』の歴史を、①（1917～1930

年), ② (1931~1944 年), ③ (1949~1960 年), ④ (1961~1970 年), ⑤ (1971~1980 年), ⑥ (1981~1990 年), ⑦ (1991~2000 年), ⑧ (2001~2008 年) の八つに細区分して, それぞれの期間に見出される特徴と時系列的な趨勢変化を見出そうと試みているのである。

さらに, これら二つの時代区分に加えて, 上述した「戦前」と「戦後」という二区分, あるいは, おおよそ 10 年という年数単位での八区分では捉えられない時代的背景とその影響を把握するために, 第三の時代区分として, わが国における会計史研究の展開を, 特定の「事象」をメルクマールとし, 「萌芽期」・「離陸期」・「確立期」という三つに区分して, このような時代区分から見た大局的な研究上の趨勢の変化ないし特徴を明らかにしようとしている。ただし, 以前の論稿(中野他[2008])では, 第 I 節でも言及したように, ①1917 年の創刊から第二次世界大戦下の 1944 年の休刊に至るまでの期間を「萌芽期」, ②敗戦後の 1949 年の復刊から 1970 年までを「離陸期」, そして, ③1971 年から 2008 年までの期間を「確立期」としていたが, 本稿では, わが国における会計史研究者の唯一の学術団体(アカデミック・コミュニティ)である「日本会計史学会」の設立とその活動という「事象」がわが国の会計史学の発展にどのような影響を及ぼしたかを検討するために, 当該学会が創立された 1982(昭和 57)年を境として, 1949 年から 1981 年までの期間を「離陸期」, 1982 年以降 2008 年までの期間を「確立期」と区画して分析を行っている。繰り返しになるが, ここでいう「萌芽期」とは, 会計史研究がもっぱら研究者個々の関心事にすぎなかった時代である。また, 「離陸期」とは, 会計史研究が会計学における一つの学問分野, つまり, 会計史学として形成(認知)される時代であり, 「確立期」とは会計史研究が体系的な学問分野として確立される時代をいう。

V - 1 - 2 分析結果の全体的概要

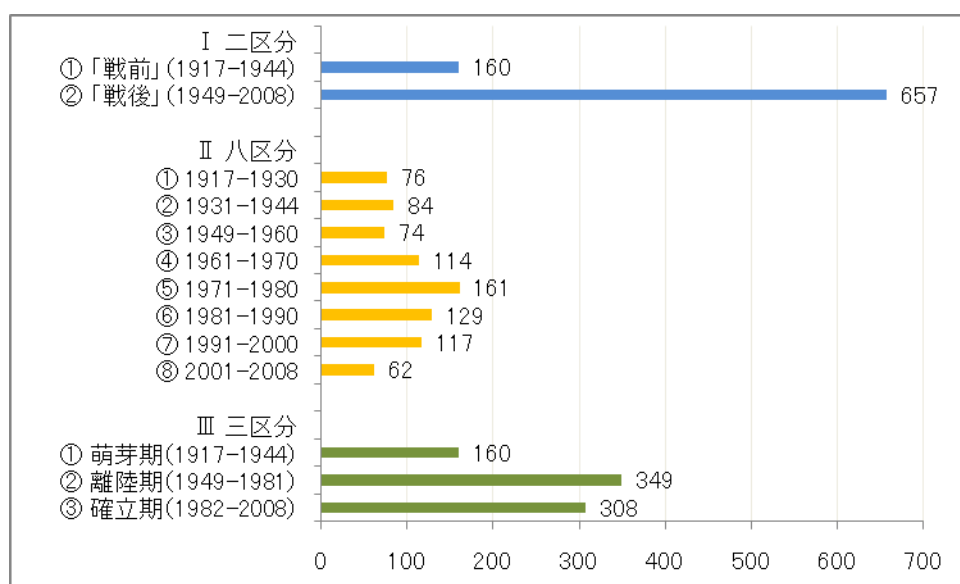
1917 年から 2008 年に至るまでの期間に『會計』に掲載され, かつ, 本稿における考察対象, つまり, 会計史に関わるものとして抽出された研究論文等の件数は, 上記の二区分, 八区分, および, 三区分で見るとき, 次頁の「図 1 a」のようにまとめられる。

すなわち, 「戦前」(大正~昭和戦前・戦中期: 1917~1944 年)と「戦後」(昭和戦後~平成期: 1949~2008 年)とに二区分して考察すれば, 「戦前」における『會計』への会計史に関わる研究論文等の掲載件数が 160 件にとどまるのに対して, 「戦後」は 657 件へと大幅に増加している。また, 掲載件数を期間の長短を考慮した年あたりの平均値で見れば, 「戦前」では会計史に関わる研究論文等の掲載件数は年平均で 5.7 件, 他方, 「戦後」のそれは年平均 11.0 件であり, 「戦前」の約 2 倍に達している。このことは, 「戦後」における会計史研究への関心の高まりを率直に反映したものと解される。

次に, 90 年超に及ぶ『會計』の歴史を, おおよそ 10 年という年数単位で八つの期間に区切って, 会計史関連の研究論文等の掲載件数を見た場合には, ⑤ (1971~1980 年) を中

心にその前後の数期間にピークが見出される。また、「戦前」を「萌芽期」（1917～1944年）、そして、「戦後」を、1981年を境に「離陸期」（1949～1981年）と「確立期」（1982～2008年）とに二区分、計三区分する場合の研究論文等の掲載件数の推移を見れば、それぞれ160件、349件、308件と、三つの時代区分のうち「離陸期」における掲載件数がもっとも多い。ただし、先ほどと同様に、年平均で見ると、「萌芽期」が5.7件、「離陸期」が10.6件、「確立期」が11.4件というように、「離陸期」よりも「確立期」の方が多いという分析結果も得られる。

図1 a 会計史研究論文等の掲載件数（その1：各時代区分別内訳）



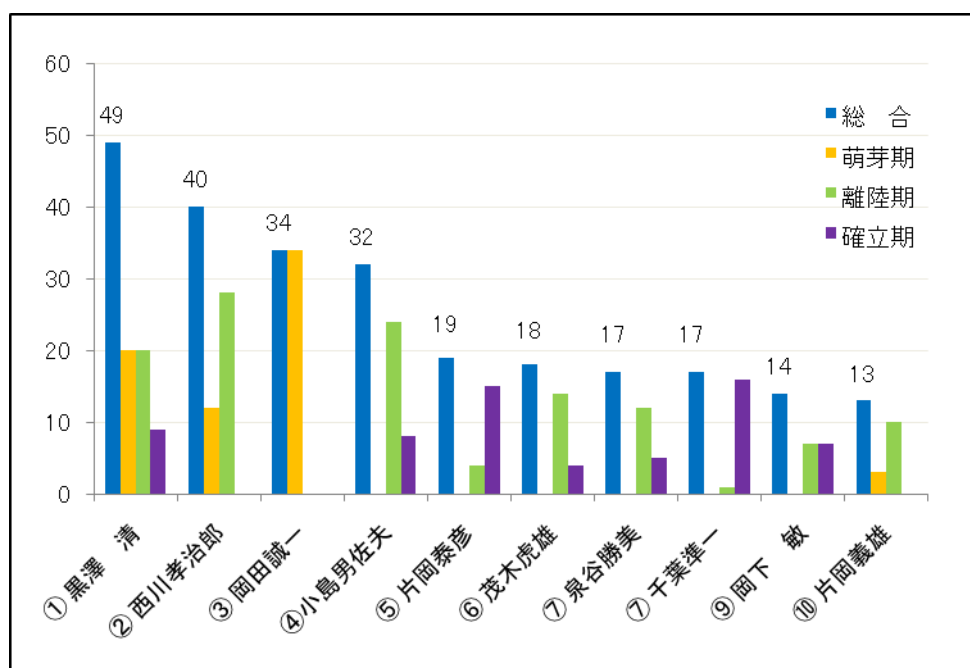
次に、「人名索引」のデータに基づき、対象とする1917年から2008年までの期間全体にわたり、『會計』への会計史に関わる研究論文等の掲載件数が多かった執筆者を整理・集計し、そのうちの上位10人を示したのが、次頁の「図1 b」である。

この図からも明らかなように、(1) 黒澤 清（「和泉三郎」名義のものを含む）がもっとも多く、合計49件に及んでいる。次いで、(2) 西川孝治郎（40件）、(3) 岡田誠一（34件）、(4) 小島男佐夫（32件）、(5) 片岡泰彦（19件）、(6) 茂木虎雄（18件）、(7) 泉谷勝美（17件）、(7) 千葉準一（17件）、(9) 岡下 敏（14件）、(10) 片岡義雄（13件）の順になる。

このうち、黒澤や西川、片岡（義）が、数量的な変化はあっても、「戦前」から「戦後」を通じて会計史にかかわる研究論文等を継続して公表しているのに対し、岡田の論稿はすべて「戦前」に集中して掲載されている。逆に、小島や茂木、泉谷は、「戦後」、特に「離陸期」を中心に研究論文等を掲載している。他方、小島や茂木、泉谷よりも

う少し若い世代に属する片岡（泰）や千葉は、「戦後」でも、後半にあたる「確立期」に掲載された論稿が多い。このことは、わが国における会計史研究の草分け的存在であった人たちが、会計史学を会計学における一つの学問分野として離陸（認知）させることに貢献のあった人たちが、さらに、これら先人たちの研究成果を継承しながら、会計史学の学問的確立を担った人たちと、会計史研究者の世代的遷移を物語っているものと考えられる。

図 1 b 会計史研究論文等の掲載件数（その 2：執筆者別内訳—上位 10 位）

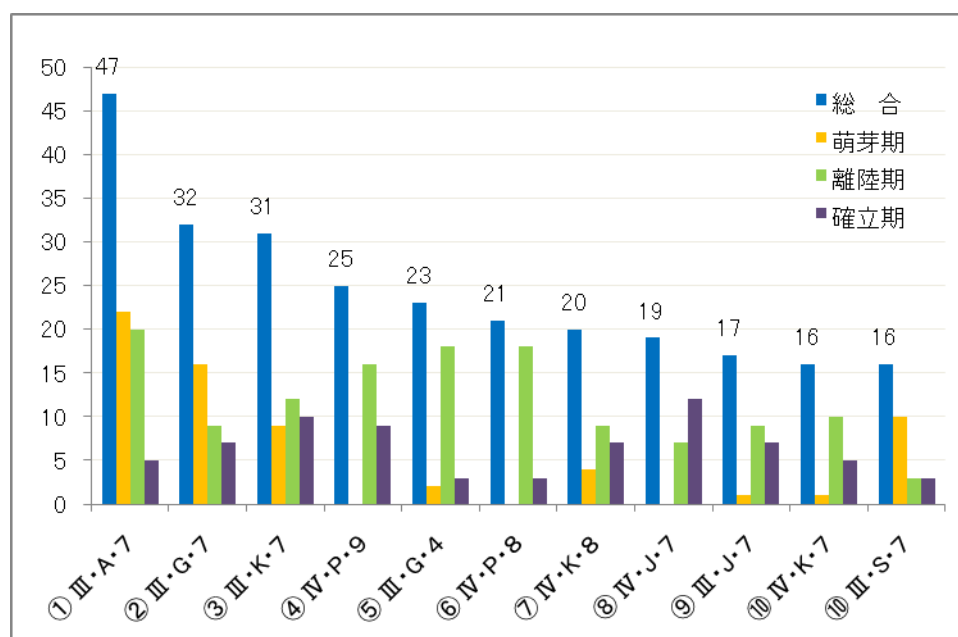


また、次頁の「図 1 c」は、「分類基準別索引」、つまり、『會計』に掲載された研究論文等の考究内容について、「研究領域」別・「地域」別・「時代」別という三つの属性に着目した個別分類基準を組み合わせた複合的分類基準に基づいて分析・集計し、その中でもっとも掲載件数が多かった分類結果の上位 10 位を示したものである⁽¹³⁾。

この図に示されるように、所定の基準にしたがって個々の研究論文等で取り上げられた考究内容を分類（分析）した結果からは、(1)「Ⅲ・A・7」（簿記・日本・近代）が 47 件と、もっとも多いことが明らかになった。次いで、(2)「Ⅲ・G・7」（簿記・イタリア・近代）（32 件）、(3)「Ⅲ・K・7」（簿記・ドイツ（オーストリア、スイスを含む：以下「ドイツ」と略す）・近代）（31 件）、(4)「Ⅳ・P・9」（財務会計・アメリカ合衆国（以下「アメリカ」と略す）・現代）（25 件）、(5)「Ⅲ・G・4」（簿記・イタリア・中世）（23 件）、(6)「Ⅳ・P・8」（財務会計・アメリカ・近代～現代）（21

件), (7)「Ⅳ・K・8」(財務会計・ドイツ・近代～現代)(20件), (8)「Ⅳ・J・7」(財務会計・イギリス・近代)(19件), (9)「Ⅲ・J・7」(簿記・イギリス・近代)(17件), さらに, (10)「Ⅳ・K・7」(財務会計・ドイツ・近代)と「Ⅲ・S・7」(簿記・その他(特定の地域に考究対象を限定していないもの)・近代)が同数で16件の順となる。

図1c 会計史研究論文等の掲載件数(その3:分類基準別内訳—上位10位)



これまでに『會計』に掲載された会計史に関わる研究論文等の傾向から見る限り,「日本」については「近代」における「簿記」の歴史にもっとも関心が高かったことがわかる。他方,「イタリア」については「中世」または「近代」における「簿記」の歴史に,逆に,「アメリカ」については「近代～現代」または「現代」における「財務会計」の歴史にそれぞれ関心が集まっている。しかし,「ドイツ」については,「近代」における「簿記」に関心が集まるとともに,「近代」または「近代～現代」における「財務会計」の歴史にも関心が寄せられている。同様に,「イギリス」についても,「近代」における「簿記」の歴史とともに,「近代」における「財務会計」の歴史にも関心が寄せられていることが示されている。

いずれにせよ,上掲の図からは,「研究領域」別では「簿記」と「財務会計」,「地域」別では「日本」・「ドイツ」・「イタリア」・「アメリカ」・「イギリス」,さらに,「時代」別では,「中世」もあるが,もっぱら「近代」を中心に「近代～現代」と「現代」という,わが国における会計史研究の傾向を特徴づけるキーワードが浮かび上

がってくる。その詳細については、次項以降において改めて分析することにした。

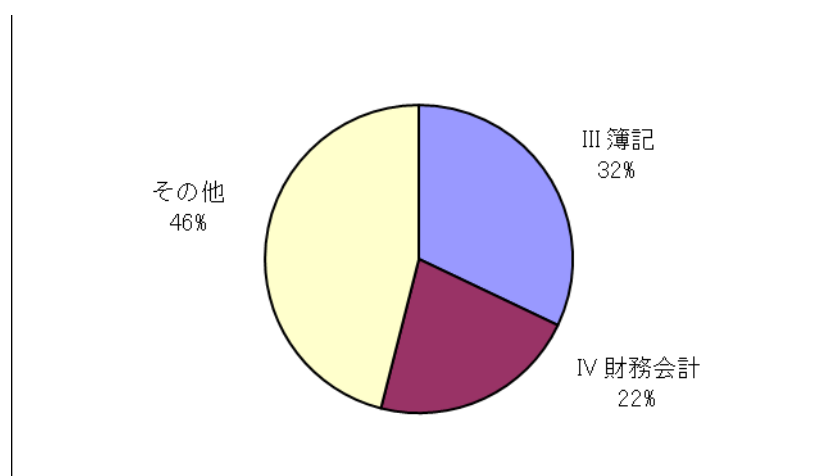
V - 2 二区分による分析結果：「戦前」と「戦後」

以下においては、まず検討の対象とする期間（1917～2008 年）を、「戦前」（大正～昭和戦前・戦中期）と「戦後」（昭和戦後～平成期）とに二区分して、そこに見出されるわが国における会計史研究の特徴について、「研究領域」別、「地域」別、および、「時代」別に検討してみよう。

V - 2 - 1 「研究領域」別の推移

会計史の研究対象となった会計学の「研究領域」別で見る場合、「戦前」（大正～昭和戦前・戦中期）と「戦後」（昭和戦後～平成期）を総合（合算）すれば、以下の「図 2 a」から明らかなように、研究対象として「Ⅲ 簿記」の占める比率が 32% ともっとも大きく、次いで「Ⅳ 財務会計」が 22% であり、これら二つの領域のみで全体の過半数を占める。

図 2 a 二区分で見た「研究領域」別の推移（総合）



しかし、「戦前」と「戦後」とに区分して考察すれば、そこに大きな差異を見出すことができる。すなわち、「戦前」では、次頁の「図 2 b」に示されるように、「Ⅲ 簿記」を対象とする歴史研究が 66% と、全体のほぼ 2/3 を占める状況であったのに対し、「戦後」においては、「図 2 c」から明らかなように、研究対象としての「Ⅲ 簿記」の占める比率は 24% と著しく減少する一方で、「Ⅳ 財務会計」の占める比率が 25% へと大きく増加したために、両者がほぼ拮抗する状況、むしろ「Ⅳ 財務会計」が「Ⅲ 簿記」をわずかながらも上回る結果になっている。このことから、会計史の研究においても、簿記の歴史（特

に Paciolo の「簿記論」(1494) の考察など、複式簿記の歴史) の研究を中心とした時代から、ようやく「戦後」に至って、本来の意味での会計(学)(特に財務会計)の歴史研究が行われる時代へと展開したことが示される。

図 2 b 二区分で見た「研究領域」別の推移(戦前)

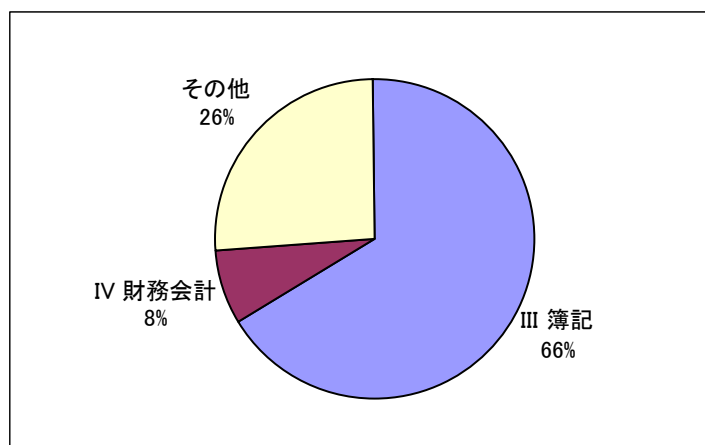
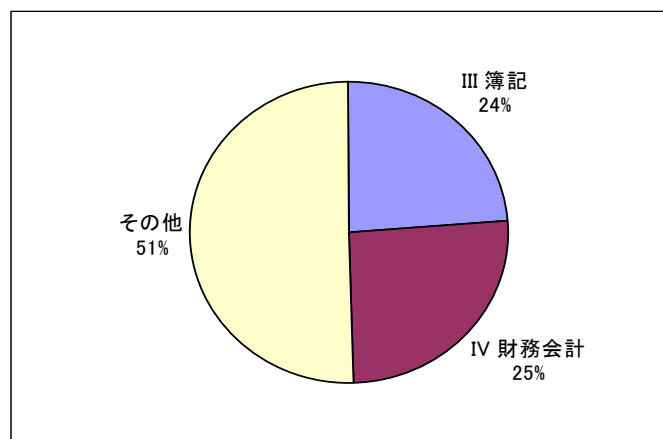


図 2 c 二区分で見た「研究領域」別の推移(戦後)



V - 2 - 2 「地域」別の推移

また、「戦前」(大正～昭和戦前・戦中期)と「戦後」(昭和戦後～平成期)という二区分を前提にして、会計史研究の対象とされた「地域」別の推移を見れば、「戦前」と「戦後」を通じて大きな変化は見出されない。すなわち、いずれの時代区分においても、そのうちのもっとも大きな比率を示すのはいうまでもなく「A 日本」である。すなわち、「戦前」は 28%、「戦後」も 26%を占め、これら二つの時代を総合(合算)すれば 26%と、ほぼ継続して 1/4 を占めることが示される(「図 3 a」・「図 3 b」・「図 3 c」参照)。

図 3 a 二区分で見た「地域」別の推移（総合）

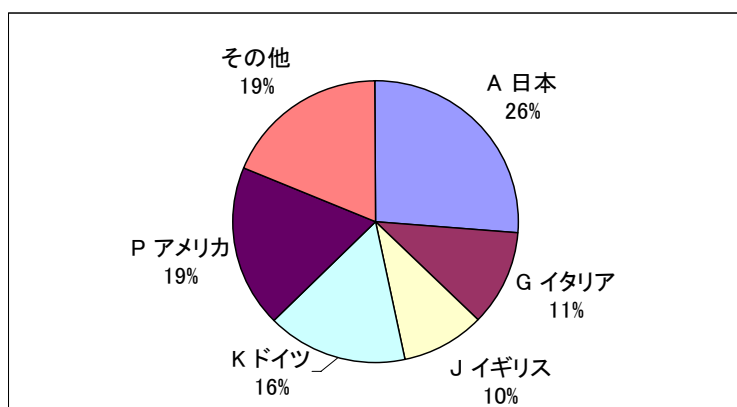


図 3 b 二区分で見た「地域」別の推移（戦前）

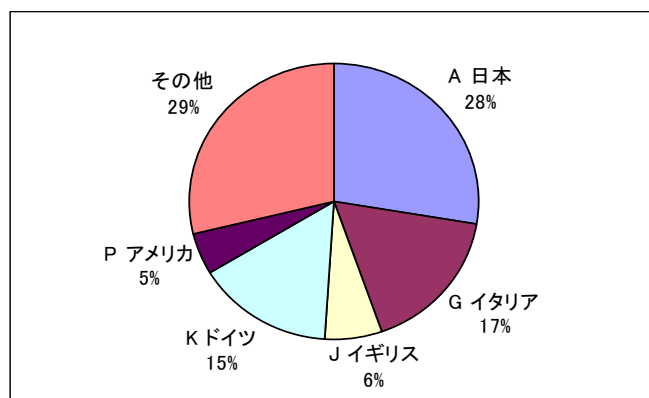
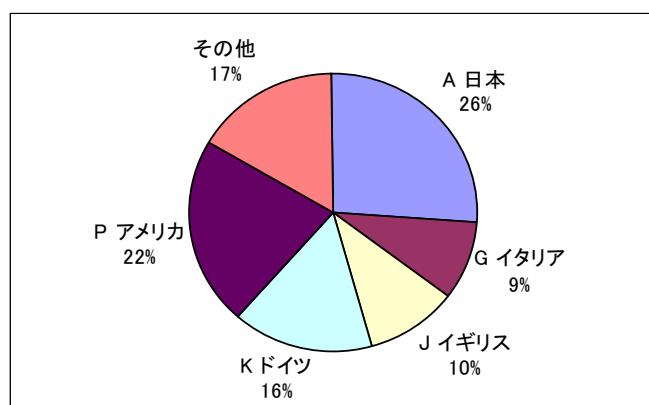


図 3 c 二区分で見た「地域」別の推移（戦後）



しかしながら、上掲の「図 3 b」と「図 3 c」との比較からは、そこにわずかながらも特徴的な変化を見出すことができる。たとえば、「G イタリア」は、「戦前」は 17%で

あったが、「戦後」は9%にまで減少している。このことは、「研究領域」別において、「戦前」の会計史研究の対象の中心が「Ⅲ 簿記」にあり、「戦後」にはそれが「Ⅳ 財務会計」へと移行したと関係するものと考えられる。他方、「K ドイツ」は、「戦前」が15%、「戦後」も16%と、継続して一定の関心を集めている。さらに、「戦前」は5%に過ぎなかった「P アメリカ」が、「戦後」は22%と、その比率を大幅に増加させている。これは、第二次世界大戦後のわが国の会計（学）研究の一般的傾向と軌を一にしていると思量される。すなわち、わが国におけるの会計（学）研究の関心の対象が、「戦後」、それまでのドイツ会計学からアメリカ会計学へと大きく転換していったということが反映されているものと考えられるのである。

しかしながら、その一方で、「研究領域」面に見られる「Ⅲ 簿記」から「Ⅳ 財務会計」へのドラスティックな移行と異なり、「K ドイツ」への関心が相対的に低下しなかった理由として、多くの研究者の理論的背景が「戦後」もかなり長い期間にわたり動態論を中心としたドイツ会計理論であったこと、また、証券取引法（金融商品取引法）の制定や、企業会計原則・諸種の会計基準の策定などアメリカ型の会計制度の導入・展開が進みつつある中で、依然としてドイツ一般商法典（1861）に系譜をもつ商法（会社法）を中心とした会計制度も厳然として存在し、両者が並存していることなどから、畢竟、「K ドイツ」の歴史研究に対する関心も維持されたと推測しうるのである。

V - 2 - 3 「時代」別の推移

さらに、会計史研究の対象とされた「時代」別で見ると、「戦前」（大正～昭和戦前・戦中期）と「戦後」（昭和戦後～平成期）を通じて、「7 近代」以降の時期に会計史研究の対象が集中している点に、わが国の会計史研究における最大の特徴が見出される。すなわち、「7 近代」、「8 近代～現代」、および、「9 現代」が占める比率は、「戦前」と「戦後」を総合（通算）した全体で88%（「戦前」を見ても「戦後」を見ても、いずれも88%）である（次頁の「図4 a」・「図4 b」・「図4 c」参照）。

しかしながら、その構成を検討すると、「戦前」と「戦後」では大きな差異が認められる。すなわち、「図4 b」と「図4 c」との比較からも明らかなように、「7 近代」が、「戦前」は57%と、単独で全体の過半数を占めていたのに対し、「戦後」はそれが35%にまで減少している。他方、「9 現代」は、「戦前」は5%にすぎなかったのが、「戦後」は33%にまで大幅に増加している。

このことは、「戦前」における会計史研究の主たる関心が、簿記、特に複式簿記の歴史に向けられていたのに対し、「戦後」は、先に述べたように、歴史研究の対象が本来の意味での会計（学）向けられるようになり、それが、「時代」別に見る場合に、第一次世界大戦終結後の「9 現代」の比率の大幅な増加に反映されているように思われる。

図 4 a 二区分で見た「時代」別の推移（総合）

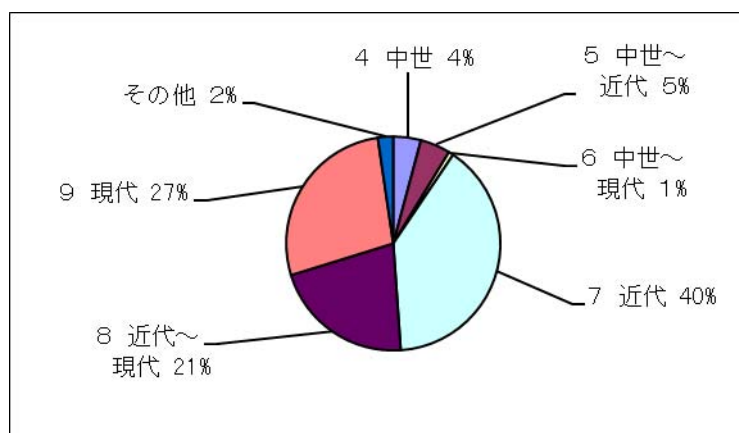


図 4 b 二区分で見た「時代」別の推移（戦前）

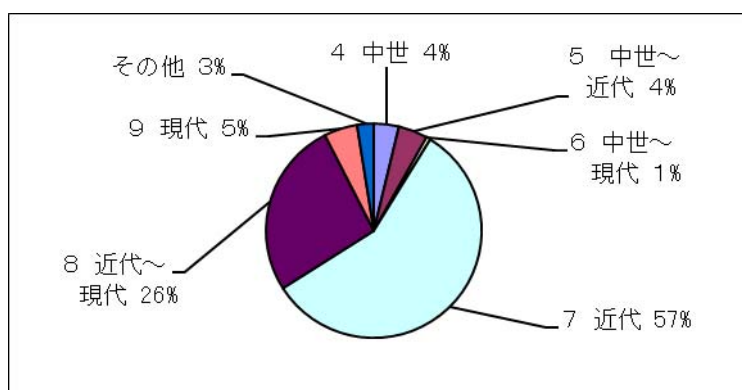
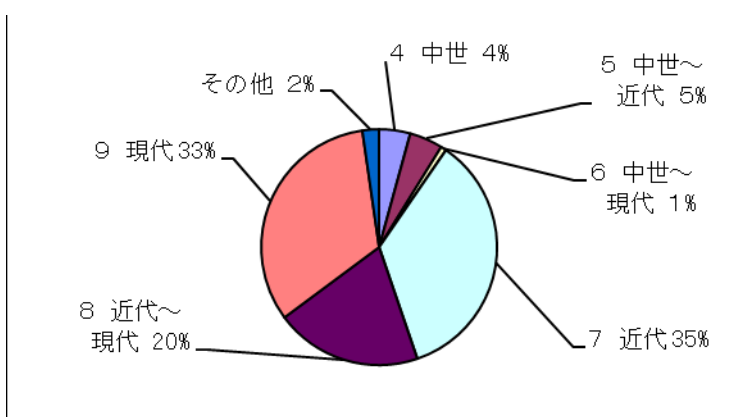


図 4 c 二区分で見た「時代」別の推移（戦後）



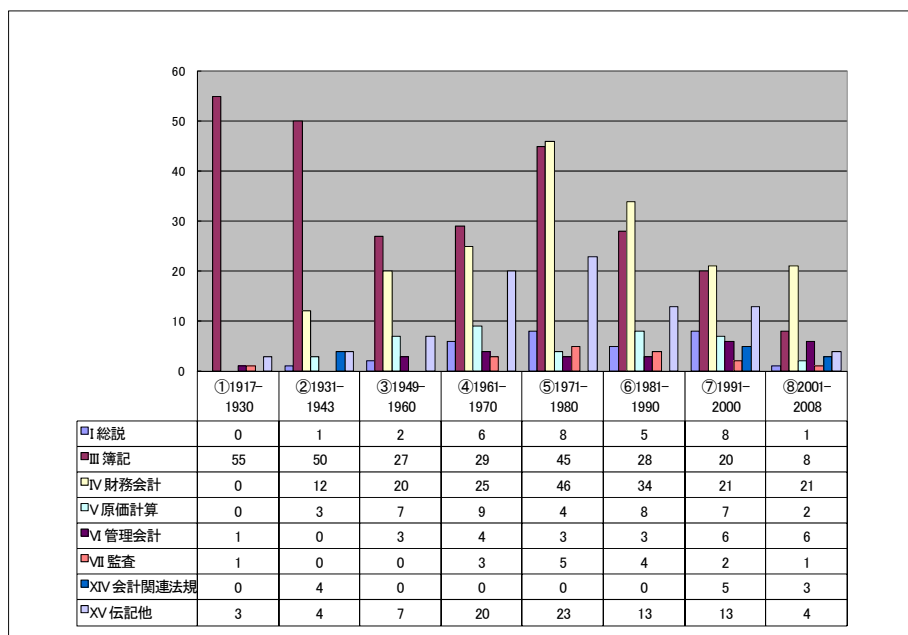
V - 3 八区分による分析結果：時代区分の細分化

次に、本節の冒頭でも述べたように、検討の対象とする期間（1917～2008 年）を、前項（V - 2）のように、「戦前」（大正～昭和戦前・戦中期）と「戦後」（昭和戦後～平成期）とに二区分するのではなく、おおよそ 10 年という年数単位で機械的に区切った八つの期間、つまり、①（1917～1930 年）、②（1931～1943 年）、③（1949～1960 年）、④（1961～1970 年）、⑤（1971～1980 年）、⑥（1981～1990 年）、⑦（1991～2000 年）、⑧（2001～2008 年）について、それぞれの期間に見出される特徴を明らかにしたい。

V - 3 - 1 「研究領域」別データの傾向と分析

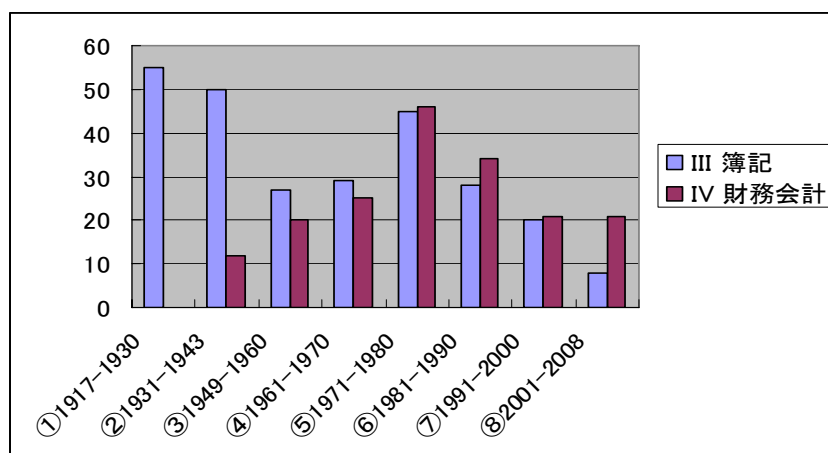
結論から言えば、「図 5 a」に示されるように、研究対象とする期間（1917～2008 年）を八つに細区分した上で分析を行っても、「戦前」（大正～昭和戦前・戦中期：①と②）は「Ⅲ 簿記」が会計史研究の対象として圧倒的に取り上げられ、「戦後」（昭和戦後～平成期：③～⑧）になって「Ⅳ 財務会計」が主たる研究対象として加わったということは、先の＜V - 2 - 1＞で言及したのと同様の結果である。他方、「Ⅴ 原価計算」、「Ⅵ 管理会計」、「Ⅶ 監査」といった会計学の他の主要な研究領域は、いずれの期間を通じても低い比率を示している。このことは、そもそもこれらの研究領域に携わる研究者の絶対数を反映しているのかもしれない。なお、会計史研究の展開とともに、「Ⅰ 総説」がわずかながらではあるが増加してきており、そこに会計史研究の蓄積がうかがえる。

図 5 a 八区分で見た「研究領域」別の推移（総合）



さらに、他の領域に比べて、相対的に多くの基礎データを得ることができた「Ⅲ 簿記」と「Ⅳ 財務会計」に着目すれば、以下の「図 5 b」に示されるように、⑤（1971～1980 年）の期間に『會計』への研究論文等の掲載件数が著しく増加している。これは、第 I 節でも言及したように、1968 年にアメリカ会計学会（American Accounting Association）に会計史委員会（Committee on Accounting History）が設置され、1970 年に当該委員会の報告書が公表されたり、同じ 1970 年から会計史研究者の世界会議にあたる会計史世界会議（World Congress of Accounting Historians）が定期的開催され始めたこと（当初は 4 年に 1 回、現在は 2 年に 1 回）、また、アメリカ、ひいては世界的規模の会計史研究者の学術団体であるアメリカ会計史学会（Academy of Accounting Historians）が設立され、その学会誌（*The Accounting Historians Journal*）が定期的に刊行されるようになるなど、会計史研究への関心の世界的高まりと軌を一にしていると見ることができる。もちろんわが国の会計史研究は「戦前」からそれなりの研究成果の蓄積を有していたが、1970 年前後頃からのアメリカを中心とした会計史研究の高まりという大きな潮流は、わが国の会計史研究者にも大きな刺激をもたらし、そのことが『會計』への研究論文等の掲載件数の増加という形で現れたものと考えられる。

図 5 b 八区分で見た「研究領域」別の推移：簿記と財務会計



また、1982 年には、わが国における唯一の会計史研究者の学術団体（アカデミック・コミュニティ）である「日本会計史学会」が設立されている。当該学会の設立により、毎年 1 回の全国大会の開催と、会計史分野でのわが国唯一の専門学術誌（兼年報）としての『会計史学会年報』の定期的刊行が行われるようになり、わが国の会計史研究者にとって研究成果発表の機会が、従来の日本会計研究学会や『會計』とは別の形で、恒常的に提供されることになった。このような事象（変化）が『會計』の誌面にもポジティブな影響を及ぼした。つまり、先に述べたように、1982 年以降の方が、年平均で見た場合に、わずかであ

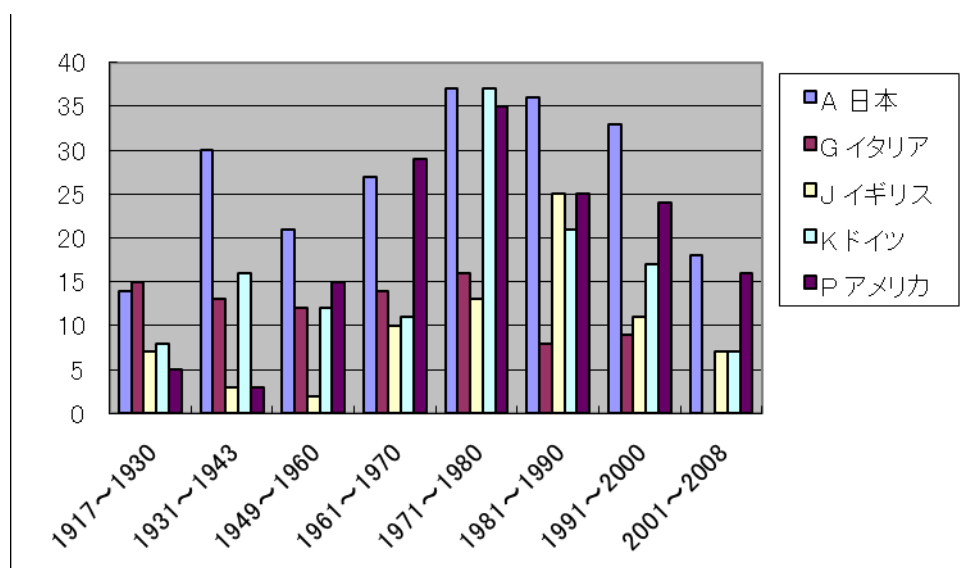
るが、論文掲載件数がそれ以前よりも増加するという事実が見出されるのである。

なお、会計史研究の対象となる研究領域も変化し、「戦前」（①と②：1917～1944年）は圧倒的に「Ⅲ 簿記」であったものが、「戦後」（③～⑧：1949～2008年）は「Ⅲ 簿記」よりは、むしろ「Ⅳ 財務会計」が次第に会計史研究の主役になってくる。このことは、前頁に掲げた「図5b」からも改めて確認することができるであろう⁽¹⁴⁾

V - 3 - 2 「地域」別データの傾向と分析

「図6」は、基礎データのうち、データ個数の多い上位五つの地域を対象として取り上げ、これらの地域を八つの期間に細区分して分析した結果を示したものである。この図からも明らかなように、「戦前」（大正～昭和戦前・戦中期：①と②）と「戦後」（昭和戦後～平成期：③～⑧）を比較すれば、おおむね「A 日本」と「K ドイツ」、「P アメリカ」は研究対象として増加傾向にあるが、逆に、「G イタリア」は減少傾向にある。

図6 八区分で見た「地域」別の推移（総合）



上記の四つの地域のうち、「戦前」（①と②：1917～1944年）と「戦後」（③～⑧：1949～2008年）で明確な差異が認められるのは「G イタリア」と「P アメリカ」である。すなわち、「G イタリア」に関する研究はおおむね「戦前」に集中し、逆に、「P アメリカ」に関する研究は「戦後」に集中するという傾向が見出される。他方、「A 日本」と「K ドイツ」は、研究論文等の掲載件数の趨勢的増加という全体的傾向からの大きな乖離は認められず、「戦前」と「戦後」における大きな差異は見出されない。

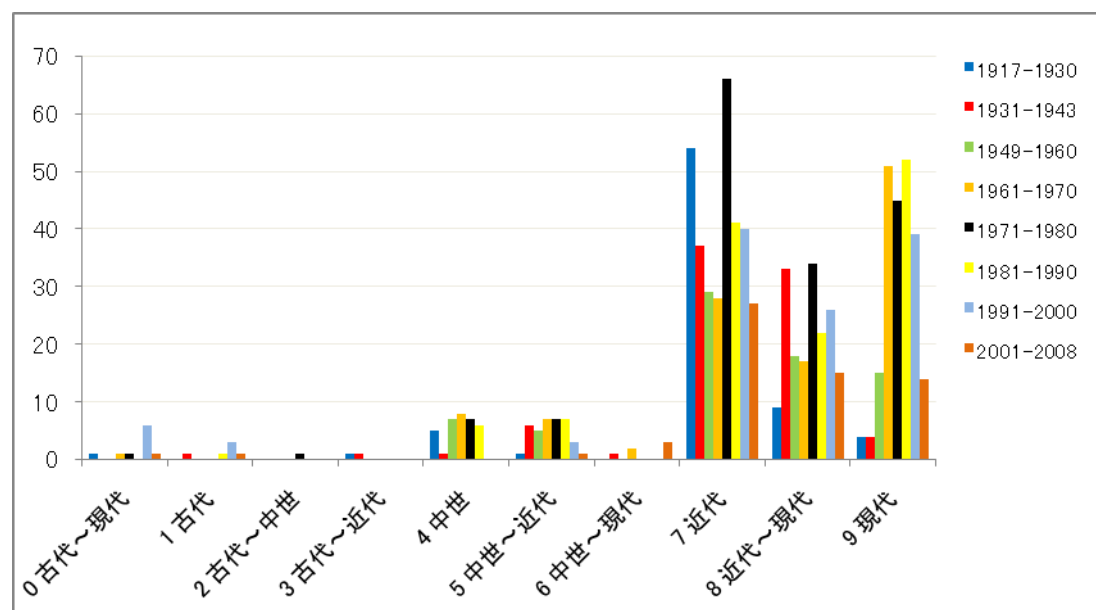
また、時代を経るとともに「A 日本」を対象とした（会計史）研究が増加するという傾

向は、経営学など他の研究分野でも容易に観察できる事実であろう。このことは、会計史研究の時系列的推移の特徴もまた、明治期以降のわが国の社会科学系研究における一般的傾向に合致したものと理解できる。

V - 3 - 3 「時代」別データの傾向と分析

「図7」から明らかなように、会計史研究の対象となった「時代」別の趨勢は、対象とする期間を八つに細区分した上で分析しても、先の〈V - 2 - 3〉で述べた内容と大きく異なるところはない。すなわち、「戦前」（大正～昭和戦前・戦中期：①と②）と「戦後」（昭和戦後～平成期：③～⑧）を通じて、「近代」を含むそれ以降の時期、つまり、「7 近代」、「8 近代～現代」、および、「9 現代」に会計史研究の対象が集中している点に、わが国の会計史研究における大きな特徴が見出されるのである。

図7 八区分で見た「時代」別の推移（総合）



V - 4 三区分による分析結果：「萌芽期」・「離陸期」・「確立期」

V - 4 - 1 「研究領域」別の推移

前項までにおいては、1917年から2008年に至までの期間に『會計』に掲載された研究論文等の考察から、わが国の会計史研究の流れを、二区分（「戦前」（大正～昭和戦前・戦中期：1917～1944年）と「戦後」（昭和戦後～平成期：1949～2008年））、あるいは、八区分（おおよそ10年という年数単位で細区分）することにより、その趨勢的特徴を明ら

かにしようとした。本項では、このような時系列分析の最後として、『會計』の誌面に映し出された 90 年を超える会計史研究の歴史を大きく三つの時代に区分する。すなわち、(1)「戦前」をわが国における会計史研究の「萌芽期」（1917～1944 年）、つまり、会計史研究がもっぱら研究者個々の関心事にとどまっていた時代と捉えるとともに、「戦後」については、これを「日本会計史学会」が創立された 1982 年を境に、(2)それ以前の期間を会計史研究の「離陸期」（1949～1981 年）、つまり、会計史研究が会計学における一つの学門分野（会計史学）として形成（認知）される時代、そして、(3)それ以降の期間を会計史研究の「確立期」（1982～2008 年）、つまり、会計史研究が体系的な学問分野として確立される時代と捉えて、先の「萌芽期」と合わせて、計三つの時代に大きく区分し、それぞれの時代を分析することによって、わが国における会計史研究の趨勢的变化を把握することにした。

このような時代三区分による分析からは、会計史に関わる研究論文として抽出された論稿が考究対象として取り上げた「研究領域」から見れば、萌芽期には「Ⅲ 簿記」（特に複式簿記）がその中心を占めていたことが確認できるが、時代を経るとともに、会計史研究の対象としての「Ⅲ 簿記」の占める比率は傾向的に低下し（萌芽期：65%→離陸期：28%→確立期：18%）、むしろ会計学を構成する他の研究領域へと歴史研究の対象が拡大される傾向にあることがわかる（たとえば、「Ⅳ 財務会計」については、萌芽期：8%→離陸期：26%）。また、「戦前」と「戦後」の二区分分析では、「簿記から財務会計へ」という大きな変化を看取することができたが、三区分による分析では、むしろ「簿記からその他の研究領域への拡大」が認められるのであり、「Ⅳ 財務会計」の歴史研究そのものは、「確立期」にあつては、比率的には、むしろ停滞ないし微減傾向にあるといえる（離陸期：26%→確立期：25%）（「図 8 a」・「図 8 b」・「図 8 c」・「図 8 d」参照）。

図 8 a 三区分で見た「研究領域」別の推移（総合）

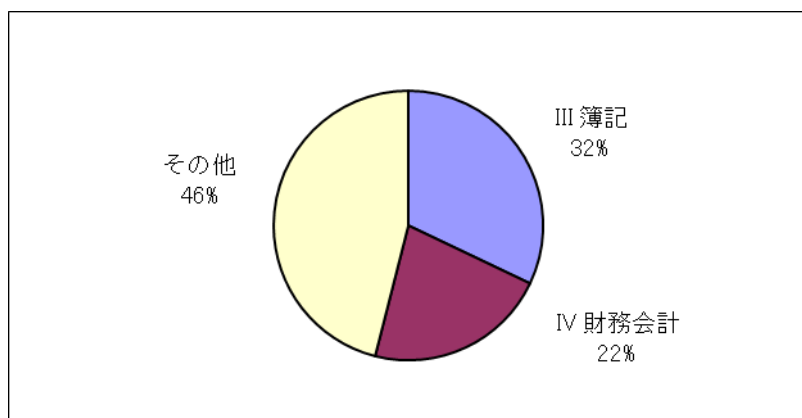


図 8 b 三区分で見た「研究領域」別の推移（萌芽期）

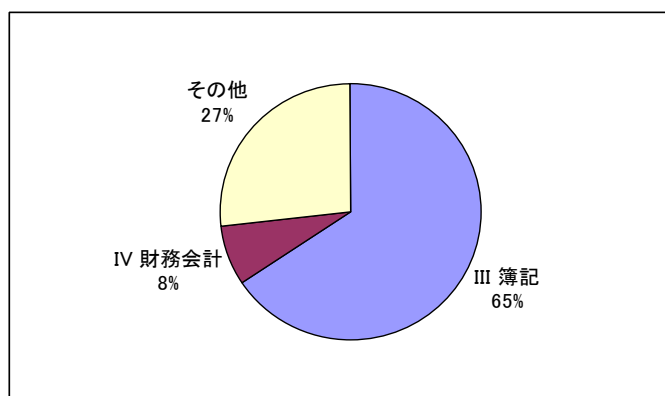


図 8 c 三区分で見た「研究領域」別の推移（離陸期）

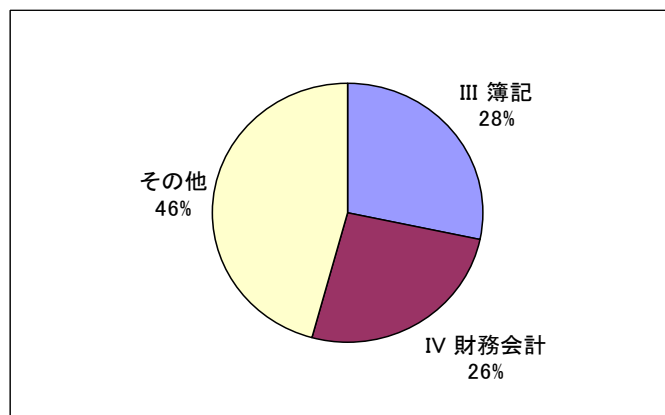
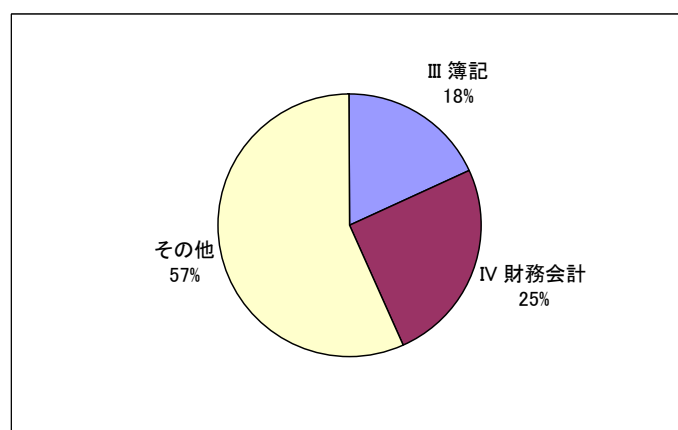


図 8 d 三区分で見た「研究領域」別の推移（確立期）



なお、会計学を構成する他の研究領域では、「離陸期」と「確立期」との比較において、

「Ⅴ 原価計算」が6%から5%へとわずかであるが減少したのに対し、「Ⅵ 管理会計」は3%から5%へと増加しており、原価計算を含む広義の管理会計領域における研究動向に若干の変化が見出される。他方、「Ⅹ 公会計・非営利会計」は、考究対象の比率としてはいまだ僅少であるが、「萌芽期」に1件、「離陸期」に3件、「確立期」に7件と、確実にその件数を増加させていることも特筆できるであろう。

V-4-2 「地域」別の推移

会計史に関わる研究論文等が考究対象として取り上げた「地域」別で見た場合には、三区分したいずれの時代においても「A 日本」がもっとも多く、比率的にも、萌芽期が28%、離陸期が25%、確立期が29%というように、おおむね1/4強の比率（総合（通算）で25%）で推移している。また、先の二区分による分析で明らかになった「G イタリア」の減少傾向は三区分分析でも裏付けられ、特に「確立期」ではそのことがより明確に示されている。すなわち、萌芽期に17%、離陸期に12%であったのが、確立期には5%にまで低下している。他方、増加傾向にあるとされた「P アメリカ」は、「離陸期」と「確立期」の間では大きな変化は認められず、前者で22%、後者でも22%と、比率的には、一定の水準で安定しているといえよう（「図9 a」・「図9 b」・「図9 c」・「図9 d」参照）。

ここでの分析結果から得られるもう一つの特徴的な事柄は、いずれの時代においても、「J イギリス」と「K ドイツ」がある程度の大きな比率でもって考究対象として取り上げられ、これら二つの地域を対象とした会計史研究が行われていることである。特に「K ドイツ」は三つのいずれの時代にも継続して一定の関心を集めている（萌芽期：15%→離陸期：16%→確立期：15%）。このことは、わが国における近年の会計（学）研究がアメリカの動向に敏感であり、かつその影響が増大しているという事実とは別に、歴史研究においてはなおドイツへの関心が相対的に高いことを示している。

図9 a 三区分で見た「地域」別の推移（総合）

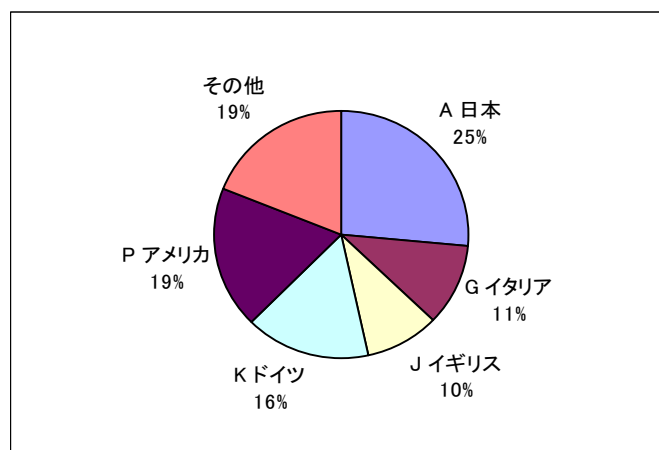


図 9 b 三区分で見た「地域」別の推移（萌芽期）

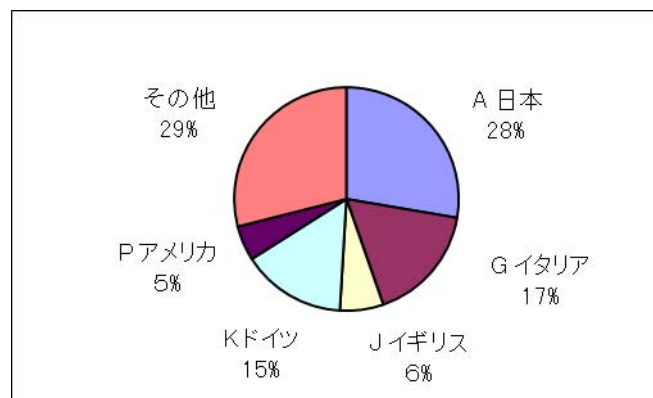


図 9 c 三区分で見た「地域」別の推移（離陸期）

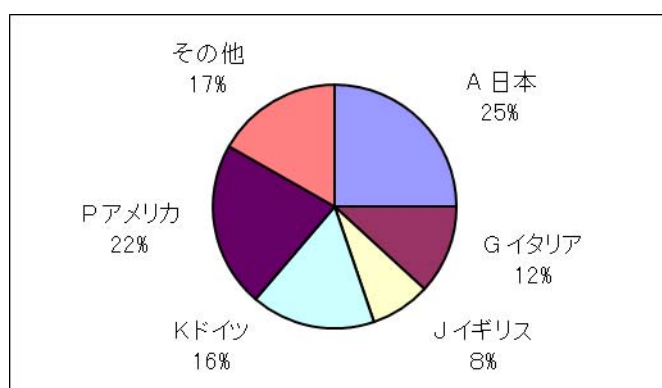
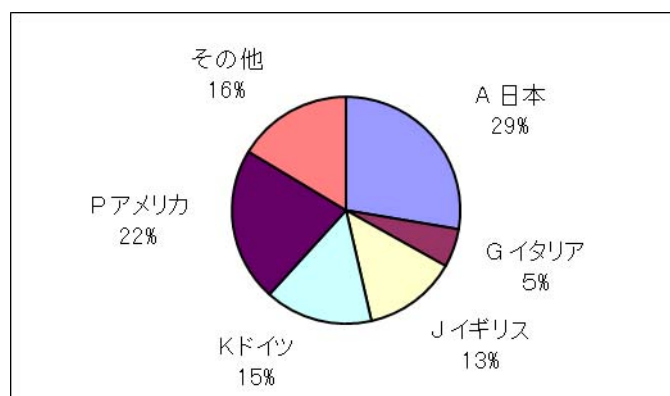


図 9 d 三区分で見た「地域」別の推移（確立期）



V-4-3 「時代」別の推移

研究論文等で対象とされた「時代」別で注目すべきは、三つの時代区分を通じて「7 近代」がもっとも多いということである。すなわち、萌芽期が57%でもっとも高いが、その後も離陸期で35%，確立期で36%という比率を示している（総合（通算）で40%）。これは、簿記、特に複式簿記が中世末期から近代初頭の経済社会において生成し、その後も近代産業社会の担い手である企業家たちのニーズに対応する形で種々の発展を遂げてきたこと、そして、会計史においては当初からかかる問題に関心に向けた研究が行われてきたということの反映であろう（「図10a」・「図10b」・「図10c」・「図10d」参照）。

その一方で、三区分のうちの「確立期」では、「9 現代」の比率が著しく増加している（萌芽期：5%→離陸期：32%→確立期：36%）。これは、会計史研究の対象が簿記から会計へ、そして、より現代的な関心へと考究の対象が移行したことの証左であろう。

図10a 三区分で見た「時代」別の推移（総合）

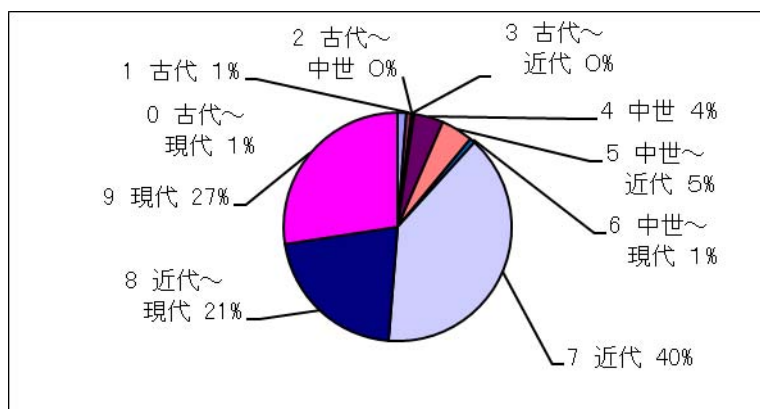


図10b 三区分で見た「時代」別の推移（萌芽期）

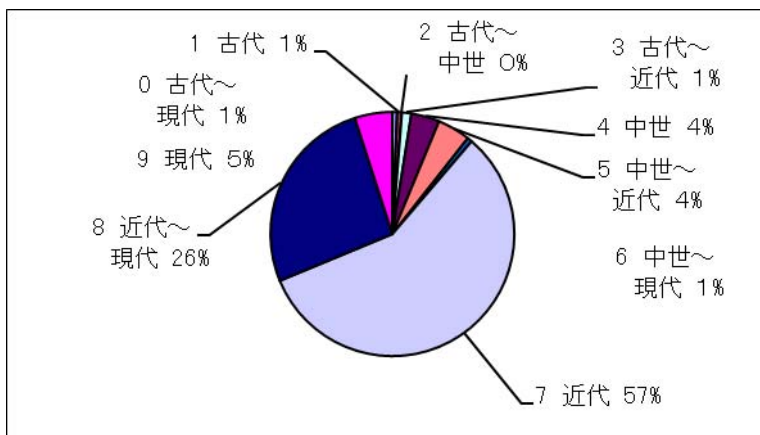


図 10c 三区分で見た「時代」別の推移（離陸期）

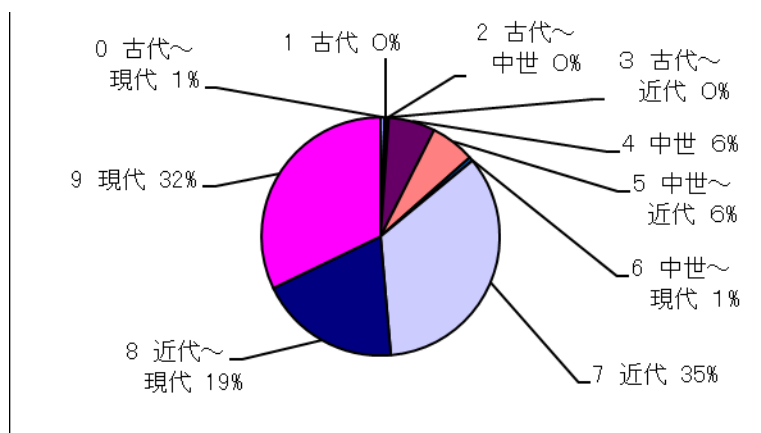
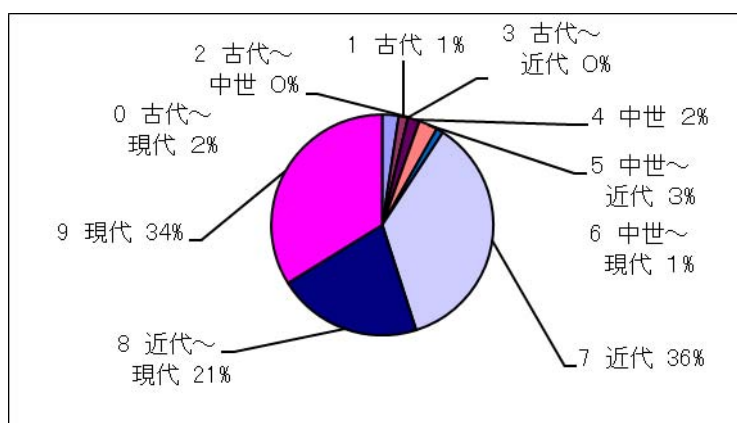


図 10d 三区分で見た「時代」別の推移（確立期）



VI 結 語

第VI節では、これまで検討してきた内容を要約するとともに、わが国における会計史研究の課題について記述することにより、本稿の結びとしたい。

叙上のように、本稿の目的は、1917年の創刊を起点とし、2008年を一応の帰着点とする90年を超える期間に、会計学に関するわが国有数の学術誌である『會計』に掲載された論稿のうちから会計史に関わる研究論文等を抽出し、これらの誌面に反映されたわが国の会計史研究の歩みを概観するとともに、その研究上の特徴を明らかにすることにあつた。

そのため、本稿の中核を構成する部分（第II節～第V節）では、上記の期間中に『會計』に掲載された各種の論稿から、会計史に関わる研究論文等（計817編）を抽出し、それぞ

れの論稿における考察内容を、研究領域・地域・時代という三つの属性に着目した個別分類基準を組み合わせた複合的な分類基準に依拠して体系的に整理・分析することにより、包括的な「文献目録」と「索引」（人名別索引と分類基準別索引）を作成し提示している。

この「文献目録」では、会計史に関わるものとして抽出された個々の研究論文等について、まずそれぞれの研究論文等を識別するための整理番号（A0001～）を付す（「番号」欄）とともに、研究論文等の標題（「論文等の標題」欄）、執筆者の名前（「執筆者」欄）、『會計』に掲載された巻・号（年・月）（「巻号（年月）」欄）、個々の研究論文等で考究されている内容の要旨（「考究内容の要旨」欄）、そして、研究領域・地域・時代という属性に着目した三つの個別分類基準を組み合わせた複合的基準による分類（分析）の結果（「分類」欄）を示している。また、「文献目録」に対する「人名別索引」と「分類基準別索引」をも併せて作成・掲載している。

第Ⅴ節では、このような「文献目録」において集計・整理された基礎データに基づき、1917年から2008年に至るまでの期間に見られる、わが国における会計史研究の特徴を明らかにするために、上記の期間を、(1)「戦前」（大正～昭和戦前・戦中期）と「戦後」（昭和戦後～平成期）という二つに区分する、また、(2)より細分化して、おおよそ10年という年数単位で機械的に区切って、①（1917～1930年）、②（1931～1943年）、③（1949～1960年）、④（1961～1970年）、⑤（1971～1980年）、⑥（1981～1990年）、⑦（1991～2000年）、⑧（2001～2008年）という八つに区分する、さらに、(3)(1)でいう「戦前」を会計史研究がもっぱら研究者個々の関心事にとどまっていた時代である「萌芽期」と捉え、「戦後」を「日本会計史学会」（1982）の設立という事象をメルクマールとして、「離陸期」（会計史研究が会計学を構成する一つの学問領域（会計史学）として形成（認知）される時代）と「確立期」（会計史研究が体系的な学問領域として確立される時代）という二つの時代に区画して捉えることにより、計三つの時代に区分するという、合わせて三種類の時代区分を用いて、それぞれの時代区分に基づいた時系列分析を試みている。

複合的分類基準を構成する会計学の「研究領域」別で見える場合には、「戦前」（大正～昭和戦前・戦中期）と「戦後」（昭和戦後～平成期）を通じて、「Ⅲ 簿記」が多くの研究者の関心を集めた研究領域であり、特に「戦前」においては最大の研究対象であったことがわかる。しかしながら、「戦後」には「Ⅳ 財務会計」が加わるとともに、次第にそれが「Ⅲ 簿記」に代わって会計史研究の主たる対象になっていくが、「Ⅴ 原価計算」や「Ⅵ 管理会計」、「Ⅶ 監査」といった他の研究領域の歴史研究は、該当する期間のいずれを見ても未だ低調な結果を示している。

また、会計史研究の主たる「研究領域」である「Ⅲ 簿記」と「Ⅳ 財務会計」について、考察対象とする期間（1917～2008年）をより詳細に八つの期間に細区分して検討を試みたところ、これらの研究領域での歴史研究に関する研究論文等の『會計』への掲載件数が1970年代に著しく増加していることが確認できた。なお、この事実の解釈については、アメリ

カやわが国での会計史研究者による関連学会の設立や国際会議の定期的開催などに刺激を受けて、会計史の研究が従来よりも活発化した結果であると思量される。

次に、「地域」別に分析を行なった結果、「G イタリア」と「P アメリカ」については、それぞれ「戦前」（大正～昭和戦前・戦中期）と「戦後」（昭和戦後～平成期）で大きな差異が認められた。すなわち、「G イタリア」に関する研究はおおむね「戦前」に集中し、逆に、「P アメリカ」に関するそれは「戦後」に集中するという傾向が明らかにされたのである。これとは対照的に、「A 日本」と「K ドイツ」については、「戦前」と「戦後」で傾向的に大きな差異は認められなかった。また、時代を経るとともに、「A 日本」を対象とする研究が増加する傾向にあり、このような傾向は、経営学など隣接する他の社会科学分野でも容易に観察できるものであろう。

また、「戦前」を「萌芽期」（1917～1944 年）、「戦後」を「離陸期」（1949～1981 年）と「確立期」（1982～2008 年）に区分するという新たな時代区分（三区分）を適用することによって、先の二区分や八区分による分析結果を追加的に検証することができた。ただし、「日本会計史学会」の設立がわが国における会計史研究にどのような影響を及ぼしたかという問題については、当該学会の設立が会計史研究者に刺激を与えた結果であろうか、会計史学会によって『会計史学会年報』という研究成果の公表媒体が別に用意されたにもかかわらず、「確立期」にあつては、『會計』でも年平均で見た場合に「離陸期」よりも研究論文等の掲載件数が増加しているという事実を確認することはできた。しかしながら、特に「研究領域」別・「地域」別・「時代」別の時系列的推移に着目した今回の分析からは、上記の問題に対する明確な解答を得ることはできなかった。

最後に、以上に要約したようなわが国の会計史研究の歴史に見出される特徴をふまえて、今後の研究課題について記しておくことにしたい。

まず、わが国における会計史の研究は、複式簿記（洋式簿記）に代表される近代会計の導入のときから見ても相対的に長い歴史を有しており、研究成果も相当に蓄積されている。しかし、その成果が、会計（学）一般の研究者に共有されていないと感じさせる局面が多い。時として会計（学）研究者からの、会計の歴史に関するあまりにもインフエントな発言を耳にすることがある。これは、当該研究者個人の知識レベルの問題であると同時に、広い意味での会計（学）のアカデミック・コミュニティに対する会計史研究者からの情報発信の不足の問題とも考えられる。

情報発信という点で考えれば、たとえば、イタリアにおける複式簿記発生史の研究などにおいて、わが国の研究者による第一次史料に基づくオリジナリティのある優れた研究が行われているにもかかわらず、残念ながらその成果について必ずしも国際的に共有されていない、つまり、研究成果に関する国際的な情報発信が不十分な点も見受けられる。

また、会計史の研究対象が、たとえば、過去において「Ⅲ 簿記」と「Ⅳ 財務会計」に集中する傾向があったように、研究の幅に広がりが見られないように思われる。具体的な

引用分析を実施した結果ではないが、会計史研究におけるわが国の研究業績への参照は、他の会計（学）の研究領域と比べても多いとは言えない。この要因として、研究の動機が研究者個々の関心に依存しており、研究の深まりはあっても、研究を通じた会計史研究者間の横のつながりに乏しいことが考えられる。さらに、会計史研究者と他の歴史研究分野の研究者、たとえば、経営史や経済史といった他の社会科学分野の歴史研究者との交流も、個人的なつながりは別にして、組織的に十分に行われていないことなども挙げられる。

さらに、会計学が実践科学（実務主導型の学問領域）としての性格を当初から強く有していたために、歴史研究に対する関心が比較的低く、そのために学問的体系化が遅れたことも指摘される。このような会計（学）の学問的性格それ自体が、会計（学）一般の研究者から見た会計史研究に対する誤ったイメージ（軽視ないし偏見）を形成する要因になったものと考えられる。

全般として、個々の会計史研究者による研究は着実に進展しているが、その研究成果に関する基礎的なデータの組織的な収集と蓄積が十分に行なわれておらず、これらを整理・集約して海外に情報発信することは一部の事例を除いてあまり積極的に行われていない。本稿は、このような反省に立った最初の試みに過ぎない。基礎データの組織的な収集と整理、そして、これに基づく国内・国外への積極的な情報発信をどのようにして継続的に行うかが、今後のわが国の会計史研究の発展に向けた最大の課題といえよう。

（2009年7月7日稿）

※1 本稿は、平成19年度～平成20年度の科学研究費補助金・基盤研究(C)（課題番号19530406）に基づく研究（研究課題名「会計史リサーチ・データベースの作成とその利用」（研究代表者：中野常男、研究分担者：清水泰洋・桑原正行・橋本武久））の成果をとりまとめた最終報告書に基づくものである。

※2 執筆者：

中野常男：神戸大学大学院経営学研究科 教授

橋本武久：帝塚山大学経営情報学部 教授

清水泰洋：神戸大学大学院経営学研究科 准教授

桑原正行：香川大学大学院地域マネジメント研究科 准教授

【注 記】

- (1) 複式簿記を解説した世界最初の印刷教本の著者、特にその名前の表記については、かつては“Luca Pacciolo”とか、“Lucas Paccioli”，あるいは，“Luca Paciolo”，“Lucas

Pacioli”など、さまざまな綴りが見られた。しかし、今日の通説では、姓だけで表記する場合には単数形の“Paciolo”（「パチョーロ」）が用いられ、姓と名の両方を表記する場合には「パチョーリ家のルカ」という意味なので複数形の“Pacioli”（「パチョーリ」）が用いられて“Luca Pacioli”と記すのが正式な綴りとされる。なお、このような名前の表記方法は、中世イタリアの会計帳簿に見出される商人や使用人の名前の表記にも随所で使用されていたといわれる（小島[1973], 3頁；泉谷[1980], 1頁脚注(1)；片岡[1988], 101頁）。

また、Paciolo の伝記等の詳細については、たとえば、Taylor[1942] を参照されたい（See also 片岡[1988]（第5章））。

- (2) Paciolo の「簿記論」、より詳細には、彼が1494年にヴェネツィアで出版した数学書『算術・幾何・比および比例総覧』(*Summa de Arithmetica Geometria Proportioni et Proportionalita*: わが国では『スُمマ』または『スンマ』と略称されることが多い) の第1部第9編論説第11に収録された「計算記録詳論」(*Particularis de Computis et Scripturis*) は、複式簿記を解説した世界最初の印刷教本とされる。この Paciolo の「簿記論」はラテン語ではなく、当時の（中世）イタリア語で著述されており、その現代語訳の試みは Ernst L. Jäger のドイツ語訳（1867）や、Vincenzo Gitti の（現代）イタリア語訳（1878）にはじまる。邦語訳の嚆矢は、平井泰太郎（神戸大学名誉教授）が若き日に神戸會計學會の機関誌『會計學論叢』（第四集）（1920（大正9））に公表した「『ばちおり簿記書』研究」であるが、これはアメリカの John B. Geijsbeek の *Ancient Double-Entry Bookkeeping*（1914）に収録されている英語訳を参考として邦語訳したものであり、その基は彼の旧制神戸高等商業学校の卒業論文（1918（大正7））であった。

なお、Paciolo の「簿記論」（1494）以前に、Benedetto Cotrugli による商業解説書の中に複式簿記の解説が見出されるが、それは、原稿が1458年に完成されていたにもかかわらず、出版は1573年に至ってのことであった。しかも、出版に先立って作成された写本からは当時として複式簿記に関するかなり高度な知識を含んでいたことが示されるが、肝心の印刷本は、編集者によりかなりの変更が加えられたため、その価値を低下させ、後世に低い評価を招く結果になっているといわれる（詳細については片岡[2007]（第2章）を参照のこと）。

- (3) 茂木[1969], 25 頁。
- (4) Foster は、*A Concise Treatise on Commercial Book-keeping*, …… (Boston, 1836) や、*Double Entry Elucidated*: …… (London, 1843) などの簿記解説書を大西洋の両岸で出版する一方で、古典簿記書のコレクションを行っており、1852年にはそれまでに彼が収集したコレクションに基づき、書誌学的見地からではあるが、簿記の歴史を単行本において論述するという、その当時としてきわめてユニークな著作 *The Origin and Progress of Book-keeping*: …… (London, 1856) を出版している。ただし、残念なことに、彼

のコレクションそのものは、ボストンへの輸送途中に海難事故ですべて失われてしまったといわれる (Hughes[1982], p.49)。

- (5) Parker 編集による会計史研究の文献目録としては、Parker [1969]; [1977]; [1980]; [1988] がある。なお、Parker による文献目録編集の作業が事実上中止されて以後も、たとえば、*Accounting, Business and Financial History* 誌に、“Accounting History Publications”，また、*Accounting History* 誌に “Accounting history publications list” という形で、英語で執筆された会計史研究文献のリストが継続的に掲載されている。ただし、残念ながら、そこでは、Parker の文献目録に見られたような研究領域別の整理・分析は行われていない (Edwards (compiled) [1992]; Anderson (compiled) [1993]; [1994]; [1995]; [1996]; [1998a]; [1998b]; [1999]; [2000]; [2002a]; [2002b]; [2003]; [2004]; [2005]; [2006]; [2008]; see also Hooper (compiled)[1996]; [1997]; Foreman (compiled) [1998]; [1999]; [2000]; [2001]; [2002]; [2003]; [2004]; [2005]; [2006]; [2007]; [2008])。
- (6) わが国への複式簿記 (洋式簿記) の本格的導入は、福澤諭吉の『帳合之法』(1873/74) と、Alexander A. Shand の『銀行簿記精法』(1873) が出版された 1873 (明治 6) 年にはじまり、この年をもってわが国における近代会計誕生のときとされる。その意味で、海野の『簿記學起原考』がそのわずか 13 年後の 1886 年に出版されていることは、わが国の近代会計創世記に現れた歴史的考察への関心の所産として高く評価されている (小島[1965], 227 頁; 日本会計研究学会近代会計制度百周年記念事業員会 (編)[1978], 序言(1); 黒澤[1982], 序)。

なお、『簿記學起原考』の内容の詳細については、小島[1965] (第 8 章); 同[1973] (第 5 章); 西川[1972] (第 2 部) 等を参照されたい。
- (7) ただし、まったく皆無というわけではなく、わが国における先行事例として、たとえば、安平・林 (共編) [1991] を挙げることができる。
- (8) 中野・橋本[1999], 196 頁。
- (9) 中野他[2008], 78 頁。
- (10) American Accounting Association(AAA)[1970] を参照。
- (11) 「研究領域」別の個別分類基準においては、会計史に関わる研究論文等として抽出された論稿を分類・整理する必要から、「X V 伝記・人物評等 (訃報を含む)」と「X VI 書評・資料・翻訳その他」を設けているが、これら二つの領域は、会計学を構成する主要な研究領域、たとえば、「III 簿記」, 「IV 財務会計」, 「V 原価計算」, 「VII 監査」などと同じレベルでの「研究領域」とは言えず、時系列分析を行う上での攪乱要因ともなりうるので、これら二つの領域に整理・分類された論稿については、第 V 節における分析対象から除外している。この点について、あらかじめご留意いただきたい。

- (12) 個別分類基準のうち時代別分類基準についてはそれぞれの時代区分をより明確にするために、「1 古代（～5世紀；ゲルマン民族の大移動まで）」、「4 中世（15世紀半ば；～東ローマ帝国の滅亡まで）」、「7 近代（～第一次世界大戦終結まで）」というように、（ ）内にそれぞれの時代を画する事象を例示している。

なお、本稿における「時代」別分類基準に基づく時代区分が、基本的に、ルネサンス的な時代三区区分法、つまり、＜古代 → 中世 → 近代＞（換言すれば、＜生 → 死 → 復活＞）というヨーロッパ的（ないしキリスト教的）な歴史意識に偏しているのではないかという批判はあろうが、このような時代区分を採用した背景には、少なくとも『會計』に掲載された論稿、特に会計史に関わる研究論文等として抽出したものから見る限り、わが国における会計史研究の対象が欧米の会計の歴史（ないし会計学説史）を中心とするものであったということがある。しかしながら、今後の研究を進めていく中で、会計の歴史をより合理的に把握・解釈できる新たな時代区分の提示の可能性についても探究したいと考えている。

- (13) なお、実際の集計結果から見れば、「XV・A・9」（伝記・人物評等（訃報を含む）・日本・現代）が54件と、もっとも多く、また、「XVI・S・9」（書評・資料・翻訳その他・その他（特定の地域に考究対象を限定していないもの・現代）も18件と、件数的には上位10位以内に入る。しかしながら、先の注(11)で述べた理由から、これら二つの項目については「図1 b」から除外している。
- (14) この点について、「戦前」と「戦後」、および、「Ⅲ 簿記」と「Ⅳ 財務会計」の分割表を基に独立性の検定を実施したが、その結果、両者に関連があることが認められた。なお、自由度は1、 χ^2 （カイ二乗）値は60.76、 $p < 0.001$ であった。

【参考文献】

泉谷勝美[1980]『複式簿記生成史』森山書店。

———[1997]『スンマへの径』森山書店。

海野力太郎[1886]『簿記學起原考』（纂譯兼出版人 海野力太郎）。

片岡泰彦[1988]『イタリア簿記史論』森山書店。

———[2007]『複式簿記発達史論』（大東文化大学経営研究所研究叢書 25）大東文化大学経営研究所。

黒澤 清[198]『日本会計学発展史序説』雄松堂書店。

小島男佐夫[1965]『複式簿記発生史の研究（改訂版）』森山書店。

———[1973]『簿記史』森山書店。

中野常男・橋本武久[1999]「『會計』にみるわが国の会計史研究の歩み」経営学・会計

- 学・商学研究年報（神戸大学大学院経営学研究科），XLV，125-153 頁。
- ・橋本武久・桑原正行・清水泰洋[2004]『わが国における会計史研究の発展に関する実証研究』（平成 14 年度～平成 15 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書）。
- ・橋本武久・桑原正行・清水泰洋[2005]「『會計』にみるわが国の会計史研究の展開：1917～2004 年」国民経済雑誌，第 192 巻第 1 号，1-44 頁。
- ・橋本武久・桑原正行・清水泰洋[2006]『わが国における会計史研究の史的研究：1917～2004 年』国民経済雑誌，第 193 巻第 2 号，1-18 頁。
- ・橋本武久・清水泰洋[2008]「わが国における会計史研究の展開—『會計』にみる会計史文献の史的分析：1917～2008 年—」商経学叢（近畿大学），第 55 巻第 1 号，75-90 頁。
- ・清水泰洋・桑原正行・橋本武久[2009]『会計史リサーチ・データベースの作成とその利用』（平成 19 年度～平成 20 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書）。
- 西川孝治郎[1972]『文献解題日本簿記学生成史』雄松堂。
- American Accounting Association (AAA), Committee on Accounting History[1970] “Report of the Committee on Accounting History,” *The Accounting Review*, Supplement to Vol.XLV, pp.52-64.
- Anderson, M.[2002] “An Analysis of the first ten volumes of research in *Accounting, Business and Financial History*,” *Accounting, Business and Financial History*, Vol.XII, No.1, pp.1-24.
- Badua, F.A., Previts, G.J. and Vasarhelyi, M.A.[2003] “The *Accounting Historians Journal* Index: Employing the *Accounting Research Database* to Profile and Support Research,” in R.K. Fleischman, V.S. Radcliffe and P.A. Shoemaker (edited), *Doing Accounting History: Contributions to the Development of Accounting Thought*, Oxford, 2003, pp.203-216.
- Foster, B.F.[1852] *The Origin and Progress of Book-keeping: Comprising an Account of All the Works on the Subject, Published in the English Language, from 1543 to 1852, with Remarks, Critical and Historical*, London (reprinted ed., New York, 1976).
- Heck, J.L. and Jensen, R.E.[2007] “An Analysis of the Evolution of Research Contributions by *The Accounting Review*, 1926-2005,” *The Accounting Historians Journal*, Vol.XXXIV, No.2, pp. 109-141.
- Hughes, H.P.[1982] “Some Contributions of and Some Controversies surrounding Thomas Jones and Benjamin Franklin Foster,” *The Accounting Historians Journal*, Vol.IX, No.2, pp.43-51.
- Taylor, R.E.[1942] *No Royal Road: Luca Pacioli and His Times*, Chapel Hill, North Carolina (reprinted ed., New York, 1978).
- Williams, B. and Wines, G.[2006] “The first 10 years of *Accounting History* as an international

refereed journal: 1996-2005,” *Accounting History*, Vol.XI, No.4, pp.419-445.

[文献目録]

- 染谷恭次郎(編)[1981]『会計文献目録—明治・大正・昭和前期』中央経済社。
- 中央経済社(編)[1969]『会計学文献目録大集』中央経済社。
- 日本会計研究学会近代会計制度百周年記念事業委員会(編)[1978]『近代会計百年—その歩みと文献目録—』日本会計研究学会。
- 安平昭二・林 昌彦(共編)[1991]『会計史・会計学史関係文献目録(邦語)総覧』研究資料(神戸商科大学経済研究所), No.118。
- Anderson, M.(compiled) [1993] “Accounting history publications, 1991,” *Accounting, Business and Financial History*, Vol.III, No.1, pp.121-124.
- (compiled) [1994] “Accounting history publications, 1992,” *Accounting, Business and Financial History*, Vol.IV, No.2, pp.355-359.
- (compiled) [1995] “Accounting history publications, 1993,” *Accounting, Business and Financial History*, Vol.V, No.2, pp.281-285.
- (compiled) [1996] “Accounting history publications, 1994,” *Accounting, Business and Financial History*, Vol.VI, No.2, pp.219-230.
- (compiled) [1998] “Accounting History Publications, 1995/6,” *Accounting, Business and Financial History*, Vol.VIII, No.1, pp.105-124.
- (compiled) [1998] “Accounting History Publications 1997,” *Accounting, Business and Financial History*, Vol.VIII, No.3, pp.371-382.
- (compiled) [1999] “Accounting History Publications 1998,” *Accounting, Business and Financial History*, Vol.IX, No.3, pp.375-382.
- (compiled) [2000] “Accounting History Publications 1999,” *Accounting, Business and Financial History*, Vol.X, No.3, pp.385-393.
- (compiled) [2002a] “Accounting history publications 2000,” *Accounting, Business and Financial History*, Vol.XII, No.1, pp.139-148.
- (compiled) [2002b] “Accounting History Publications 2001,” *Accounting, Business and Financial History*, Vol.XII, No.3, pp.505-512.
- (compiled) [2003] “Accounting history publications 2002,” *Accounting, Business and Financial History*, Vol.XIII, No.3, pp.393-399.
- (compiled) [2004] “Accounting history publications 2003,” *Accounting, Business and Financial History*, Vol.XIV, No.2, pp.209-215.
- (compiled) [2005] “Accounting History Publications 2004,” *Accounting, Business and*

- Financial History*, Vol.XV, No.2, pp.217-221.
- (compiled) [2006] “Accounting History Publications 2005,” *Accounting, Business and Financial History*, Vol.XVI, No.3, pp.457-462.
- (compiled) [2008] “Accounting History Publications 2006/2007,” *Accounting, Business and Financial History*, Vol.XVIII, No.3, pp.357-374.
- Coffman, E.N. and Wingfield, M.W. (prepared) [1984] An Index to the *Accounting Historians Journal* 1974-1983, The Accademy of Accounting Historians, Birmingham, Alabama.
- Edwards, J.R. (compiled) [1992] “Accounting history publications, 1990,” *Accounting, Business and Financial History*, Vol.II, No.1, pp.109-113.
- Foreman, P. (compiled)[1998] “Accounting history publications list 1997,” *Accounting History*, Vol.III, No.2, pp.149-154.
- (compiled) [1999] “Accounting history publications list 1998,” *Accounting History*, Vol. IV, No.1, pp.107-113.
- (compiled) [2000] “Accounting history publications list 1999,” *Accounting History*, Vol. V, No.1, pp.133-139.
- (compiled) [2001] “Accounting history publications list 2000,” *Accounting History*, Vol. VI, No.1, pp.117-120.
- (compiled) [2002] “Accounting history publications list 2001,” *Accounting History*, Vol. VII, No.1, pp.123-127.
- (compiled) [2003] “Accounting history publications list 2002,” *Accounting History*, Vol. VIII, No.1, pp.125-130.
- (compiled) [2004] “Accounting history publications list 2003,” *Accounting History*, Vol. IX, No.1, pp.109-113.
- (compiled) [2005] “Accounting history publications list 2004,” *Accounting History*, Vol. X, No.1, pp.133-136.
- (compiled) [2006] “Accounting history publications list 2005,” *Accounting History*, Vol. XI, No.3, pp.381-385.
- (compiled) [2007] “Accounting history publications list 2006,” *Accounting History*, Vol. XII, No.4, pp.465-470.
- (compiled) [2008] “Accounting history publications list 2007,” *Accounting History*, Vol. XIII, No.3, pp.401-407.
- Hooper, K. (compiled) [1996] “Accounting history publications list 1995,” *Accounting History*, Vol.I, No.1, pp.107-110.
- (compiled) [1997] “Accounting history publications list 1996,” *Accounting History*, Vol.II, No.1, pp.127-132.

- Parker, R.H.[1969] "Select Bibliography of Works on the History of Accounting," in R.H. Parker, *Management Accounting: An Historical Perspective*, London, pp.75-126 (Original text appeared in *Abacus*, Vol. I, No.1 (September 1965), pp.62-84; reprinted in R.H. Parker (edited), *Bibliographies for Accounting Historians*, New York, 1980).
- [1977] "Select Bibliography of Works on the History of Accounting 1966-1977," in R.H. Parker, "Research Needs in Accounting History: Appendix," *The Accounting Historians Journal*, Vol. IV, No.2, pp.7-28 (reprinted in R.H. Parker(edited), *Bibliographies for Accounting Historians*, New York, 1980).
- [1980] "Select Bibliography of Works on the History of Accounting 1978-1980," in R.H. Parker (edited), *Bibliographies for Accounting Historians*, New York, 1980.
- [1988] "Select Bibliography of Works on the History of Accounting 1981-1987," *The Accounting Historians Journal*, Vol. XV, No.2, pp.1-81.